佐々木ノテウラ遺跡

1986

石川県立埋蔵文化財センター

佐々木ノテウラ遺跡

県営公害防除特別土地改良事業
に係る埋蔵文化財調査報告書

1986

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は昭和59年度に実施した、県営公害防除特別土地改良事業（梯川流域地区）に伴う佐々木ノテウラ遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は県農林水産部の依頼により石川県立埋蔵文化財センターが実施し、費用は同部が負担した。

3　現地調査は谷内尾晋司、北野博司が担当し、本田秀生（調査員）の補助、次の方々の御協力を得た。記して感謝の意を表する。

北中貞夫、南出豊二、滝ケ浦政明、小橋幸吉、北中兼輔、指間勝男、坂下市蔵、山下正男、西出久雄、東出幸次郎、南出きく、山本美智子、出村千代子、本田あい、吉田美代子、北出せつ子、岡田久子、山崎あや、堂下志津枝、山下十重子、田中耕栄、藤田恒太郎、北野君子、北本芳江、西田康子、北村貞子、田中柳子、中村喜久枝、藤田雅子、西木戸みか、宮本はつ、南きみ、中田みか、南マス子、南俊子、築田武治、蓮井直久、寺田直作、土坂新男、山口花子、新城えり子、本由美子、県小松土地改良事務所、小松市教育委員会（順不同・敬称略）

4　遺物整理は、社団法人　石川県埋蔵文化財整理協会（担当―正木直子、黒田和子、渡辺洋子、土井真知子、小間博文、小林直子、勝島栄蔵）に委託した。

5　本書の執筆分担は次のとおりである。

第1章、遺物観察表……新城えり子

第2章、第3章、第4章、第5章第1節・第3節……北野博司

第5章第2節……本田秀生

6　本書の執筆にあたっては石川県立埋蔵文化財センター職員の他、次の方々より御教示、御協力を得た。記して感謝の意を表する。

伊林永幸、戸澗幹夫、出越茂和、木立雅朗、横山貴広、安宅務、本由美子（順不同・敬称略）

7　本書の編集は谷内尾、本田、新城の協力のもと、北野が行った。

(1)　挿図中の方位はすべて真北である。

(2)　挿図中の水平基準の数値は標高である。

(3)　挿図中の遺物は通し番号を付し、表・図版の遺物番号と一致する。

(4)　本文中の註は各章末にまとめた。

8　写真撮影は遺構を谷内尾、本田、北野が、遺物を本田、北野が担当した。

9　本調査の遺構・遺物の実測図・写真、出土品等の資料は石川県立埋蔵文化財センターにて一括保管している。

佐々木ノテウラ遺跡

目　　次

頁

例言……i

第1章　遺跡の環境……1
　第1節　地理的環境……1
　第2節　歴史的環境……3

第2章　調査の経緯と概要……8
　第1節　発掘調査に至る経緯……8
　第2節　調査日誌抄……9
　第3節　調査の概要……13

第3章　遺構と遺物……14
　第1節　I期以前の遺構と遺物……14
　第2節　I期の遺構と遺物……15
　第3節　II期の遺構と遺物……29
　第4節　III期の遺構と遺物……32
　第5節　IV期の遺構と遺物……45
　第6節　IV期以降の遺構と遺物……50
　第7節　土製品・石製品・瓦・鉄製品・木器……51

第4章　まとめ……54
　第1節　遺物・遺構の時期……54
　第2節　墨書土器……55
　第3節　居住地の変遷……57

第5章　考察……62
　第1節　加賀における7～8世紀の煮沸形態土師器……62
　第2節　掘立柱建物の柱穴内土器埋納について……64
　第3節　加賀における奈良・平安時代遺跡の動態―加賀国府の所在地をめぐって―……72

遺物観察表……78

挿　図　目　次

頁

第１図　周辺の遺跡（S＝1/25,000）……2
第２図　遺跡周辺の条里復元図（S＝1/50,000）4
第３図　調査区の位置（S＝1/6,000）……8
第４図　調査区土層図（S＝1/80）……10
第５図　遺構全体図・主要遺構および調査区区割図（S＝1/100・1/200）……11
第６図　Ⅰ期以前の土器（S＝1/3）……14
第７図　６・８・９号溝土層図（S＝1/40）……15
第８図　６号溝東南部平面図、断面図（S＝1/80）……15
第９図　Ⅰ期の土器　６号溝（S＝1/3）……16
第10図　７号溝東端部平面図（S＝1/40）……17
第11図　７号溝土層図（S＝1/40）……17
第12図　Ⅰ期の土器　７号溝（S＝1/3）……18
第13図　11号土坑平面図、土層図（S＝1/30）…19
第14図　15号土坑平面図、土層図（S＝1/30）…19
第15図　Ⅰ期の土器　11号土坑・15号土坑　P－327（S＝1/3）……20
第16図　13･14号土坑平面図、土層図（S＝1/30）…21
第17図　Ⅰ期の土器　13号土坑（S＝1/3）……22
第18図　Ⅰ期の土器　13号土坑（S＝1/3）……23
第19図　Ⅰ期の土器　13号土坑（S＝1/3）……24
第20図　Ⅰ期の土器　14号土坑（S＝1/3）……25
第21図　１号建物実測図（S＝1/80）……25
第22図　６号建物実測図（S＝1/80）……26
第23図　９号建物実測図（S＝1/80）……26
第24図　Ⅰ期の土器　包含層(1)（S＝1/3）……27
第25図　Ⅰ期の土器　包含層(2)（S＝1/3）……28
第26図　１号溝土層図（S＝1/40）……29
第27図　１号溝遺物出土地点図……29
第28図　８号建物実測図（S＝1/80）……29
第29図　Ⅰ～Ⅱ期の土器　１号溝（S＝1/3）…30
第30図　Ⅰ～Ⅱ期の土器　１号溝（S＝1/3）…31
第31図　10号建物実測図（S＝1/80）……31
第32図　６号土坑平面図、土層図（S＝1/30）…32
第33図　８号土坑平面図、土層図（S＝1/30）…32
第34図　２号井戸平面図、土層図、遺物出土状態図（S＝1/30）……33

頁

第35図　４号建物・４号柱列実測図（S＝1/80）……34
第36図　５号建物・５号柱列実測図（S＝1/80）……35
第37図　Ⅲ期の土器　６号土坑・２号井戸（S＝1/3）……36
第38図　Ⅲ期の土器　２号井戸・８号土坑（S＝1/3）……37
第39図　Ⅲ期の土器　８号土坑・４号建物・５号建物・４号柱列・５号柱列（S＝1/3）……38
第40図　Ⅲ期の土器　包含層(1)（S＝1/3）……41
第41図　Ⅲ期の土器　包含層(2)（S＝1/3）……42
第42図　Ⅲ期の土器　包含量(3)（S＝1/3）……43
第43図　Ⅲ期の土器　包含層(4)（S＝1/3，1/4）44
第44図　１号井戸平面図、土層図（S＝1/30）…45
第45図　２号建物実測図（S＝1/80）……46
第46図　３号建物実測図（S＝1/80）……47
第47図　７号建物実測図（S＝1/80）……47
第48図　Ⅳ期の土器　２号建物・３号建物・１号井戸・２号溝・３号溝・24号溝・包含層(1)（S＝1/3）……49
第49図　Ⅳ期の土器　包含層(2)（S＝1/3）……50
第50図　土錘･石製品･瓦･鉄製品（S＝1/3･1/1）……51
第51図　木器（S＝1/4・1/8）……52
第52図　墨書土器集成図、出土地点図……56
第53図　各期の遺構……58
第54図　Ⅰ期の遺物分布図……59
第55図　Ⅲ期・Ⅳ期の遺物分布図……60
第56図　掘立柱建物模式図（１）……64
第57図　小松市佐々木ノテウラ遺跡（１）…65
第58図　小松市佐々木ノテウラ遺跡（２）…67
第59図　輪島市三井小泉遺跡……68
第60図　中島町外遺跡……68
第61図　辰口町下開発遺跡……69
第62図　掘立柱建物模式図（２）……70
第63図　加賀中央部における奈良・平安期の主要遺跡（S＝1/400,000）……73

表　目　次

頁

第1表　遺跡地名表……2
第2表　墨書土器一覧表　……56
第3表　加賀における煮沸形態土師器の変遷　…63
第4表　諸古辞書に見る国府所在郡の異同　73

図　版　目　次

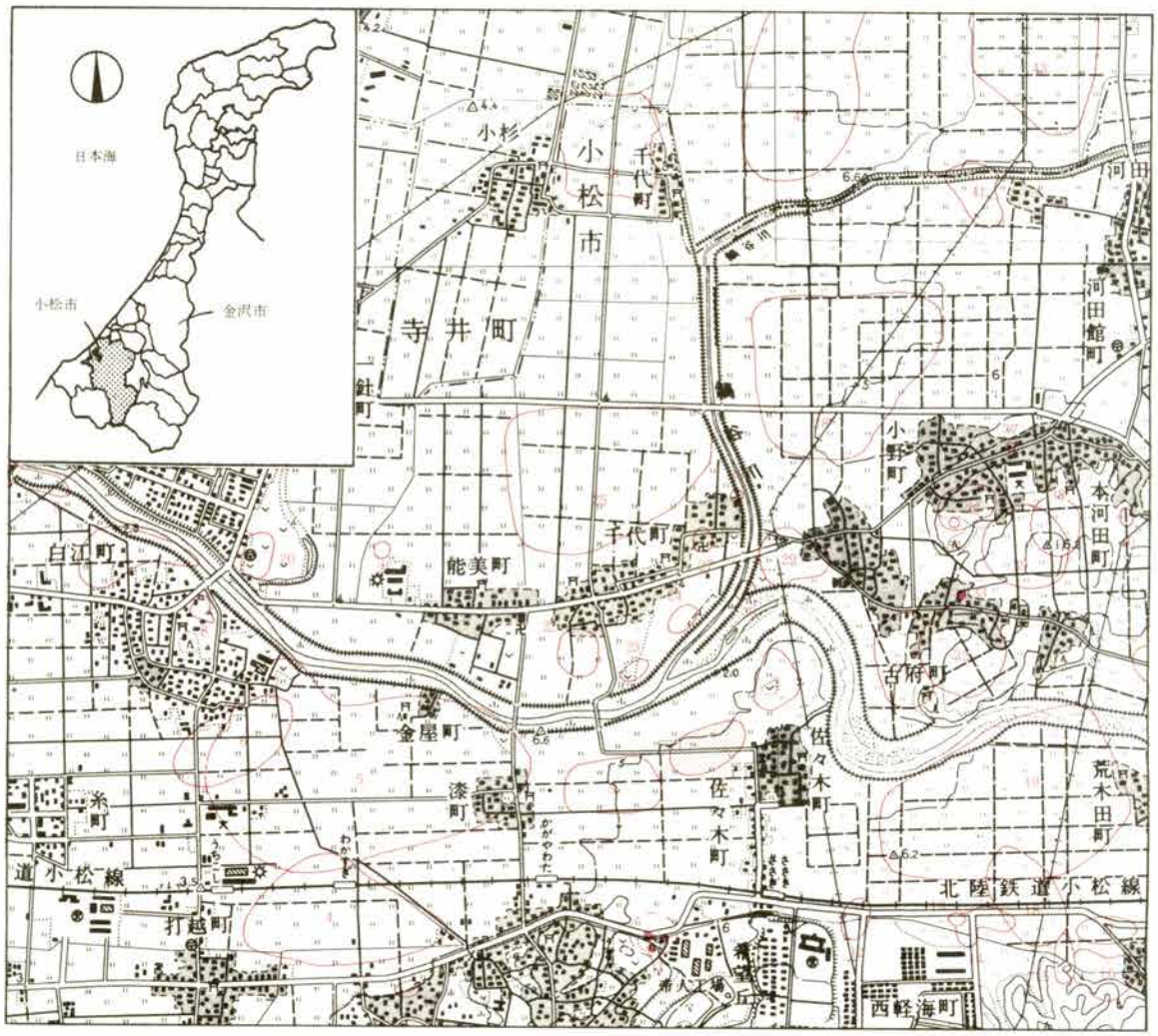
図版1　遺跡周辺の航空写真（1947）
図版2　遺跡周辺の航空写真（1975）、梯川流域遺跡群俯瞰
図版3　調査区俯瞰、工事実施後の遺跡の状況
図版4　調査区垂直写真（1）、（2）
図版5　調査区近景
図版6　6号溝
図版7　7号溝、11号土坑、13号土坑、15号土坑
図版8　Ⅰ期建物群（1・6・9号建物）
図版9　1号溝、8号建物、2号井戸
図版10　8号土坑、Ⅲ期建物群（4・5号建物）
図版11　Ⅲ期建物群柱穴、Ⅳ期建物群（2・3・7号建物）と区画溝
図版12　Ⅳ期建物群（2・3・7号建物）、同柱穴
図版13　1号井戸、範囲確認試掘坑
図版14　Ⅰ期以前・Ⅰ期の遺物
図版15　Ⅰ期の遺物
図版16　Ⅰ期の遺物
図版17　Ⅰ期・Ⅱ期の遺物
図版18　Ⅲ期の遺物
図版19　Ⅲ期の遺物
図版20　Ⅲ期の遺物
図版21　Ⅳ期の遺物
図版22　Ⅳ期・Ⅳ期以降の遺物、土製品・石製品・瓦・玉・鉄製品、自然遺物
図版23　木製品
図版24　墨書土器
図版25　金沢平野北西部の律令期主要遺跡

第１章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

白山山系の大日山連峰に源を発する梯川は、急峻な山間部の支流を集めて広深なＶ字谷を開析し、小規模な河岸段丘を形成しながら丘陵地帯を縫って北流する。中流域では低湿平野を形成し、大きく西に進路を変え、北東方向から流れて来る鍋谷川、八丁川などの支流を合わせ、蛇行しながら小松市街地北部をかすめて日本海に注いでいる。流程は約 42 km、流域面積は約 270 km² で、県下では手取川に次いで河川規模が大きい。平野部では流れが遅緩なため、古くから水運に適していたが、反面洪水や氾濫による被害も大きかった。本遺跡は国鉄小松駅から東へ約 4 km を測り、小松市佐々木町通称野手浦地内に所在する。地形的には、梯川が西に進路を変えてから大きく蛇行する中流左岸、標高約 4 m ばかりの自然堤防上に立地し、北側は近代まで入り江があったと伝えられるように、氾濫原が迫っている。南側は後背湿地となっており、その背後には小松東部丘陵が控える。小松東部丘陵は小松市の東南部に広がる丘陵で、能美江沼丘陵の一角を占め、能美丘陵の前縁から南に連なり加賀江沼丘陵に続いている。台地状で極めて傾斜が緩く、標高 100 m 以下の砂礫を主体とする第 4 紀更新世中期層の丘陵で、近年急速に開発されている。また本遺跡の対岸北東方向約 1 km 地点には、律令期の加賀国府所在推定地とされる標高 10 m ばかりの洪積台地、通称古府台地がひろがっている。梯川中流左岸は東西に細長い沖積平野を形成し、付近の集落も小松東部丘陵と梯川に狭まれた形で微高地上に並行するように連なっている。対して右岸は、手取川扇状地の南縁と接し、梯川支流による堆積作用も加わって幅広の平野を形成している。

本遺跡周辺は、現在は平担で水田として利用されているが、軽海町付近から北西方向に走り本遺跡の西約 150 m 地点を通って梯川本流に至る旧河道をはじめ、梯川の蛇行や氾濫による幾筋かの旧河道が航空写真より確認できる。これらの旧河道は各時代ごとに梯川水系の集落間や日本海を連結する重要な水運路として利用され、経済・商品流通に大きな役割を果たしたであろう。また分布調査の結果も合わせると、旧地形は旧河道による自然堤防と複雑に入り組んだ凹地を持った比較的アップダウンの激しい地形であり、このような地形を水田として開発するための灌漑用水として利用されていたであろう。軽海町地内を流れる梯川と支流滓上川の合流地点付近から給引する軽海用水は、旧河道の一筋を利用して明治 43（1910）年より本格的に開削され、現在では本遺跡を含む梯川中流左岸の平野部に分水して水田を潤している。



第1図　周辺の遺跡（1/25,000「美川」「粟生」「小松」「別宮」分載）

第1表　遺跡地名表（『石川県遺跡地図』）

No.	名称	所在地	種別	時代	備考
1	佐々木ノテウラ遺跡	小松市佐々木町	集落跡	弥生～中世	昭和59年度県教委調査
2	佐々木アサバタケ遺跡	〃　〃	〃	〃	昭和59・60年度県教委調査
3	佐々木遺跡	〃　〃	包含地	平安	
4	打越遺跡	〃　打越町	集落跡	古墳～中世	
5	漆町遺跡	〃　漆町他	〃	弥生～中世	昭和54～56，59・60年度県教委調査
6	念仏寺塔遺跡	〃　白江町	〃	〃	昭和54年度県教委調査
7	白江梯川遺跡	〃　〃	〃	〃	昭和57～59年度県教委調査
8	白江遺跡	〃　〃	館跡	室町	
9	平面梯川遺跡	〃　平面町	包含地	弥生	
10	若杉古窯跡	〃　若杉町	窯跡	江戸	近世窯跡
11	八幡古墳群	〃　八幡町	古墳	古墳	3基存在
12	大谷口遺跡	〃　軽海町	包含地	弥生後期	

No.	名称	所在地	種別	時代	備考
13	軽海遺跡	〃　〃	〃	弥生～中世	昭和60年度県教委調査
14	亀山玉造遺跡	〃　〃　4号1	集落跡	古墳前期	昭和46年度市教委調査
15	軽海中世墓址群	〃　〃　第2号用水(墓谷)	墳墓	鎌倉末期～室期初期	〃
16	軽海廃寺跡	〃　〃	寺院跡	平安後期	
17	西芳寺遺跡	〃　〃	〃	平安～近世	昭和54年度県教委調査
18	軽海西芳寺遺跡	〃　〃　・荒木田町	包含地	縄文～中世	昭和58・59年度県教委調査
19	荒木田遺跡	〃　荒木田町	〃	古墳～中世	
20	一針遺跡	〃　一針町	〃	縄文	
21	定地坊跡	〃　能美町	寺院跡	室町	
22	千代マエダ遺跡	〃　千代町	包含地	古墳～平安	
23	本村遺跡	〃　〃　(ドードウ)	〃	古墳	
24	横地遺跡	〃　〃　(ユマジ)	〃	縄文	
25	千代オオキダ遺跡	〃　〃	〃	奈良～中世	
26	千代遺跡	〃　〃　(デジロ)	集落跡	縄文～中世	昭和59・60年度県教委調査
27	千代城跡	〃　〃	城跡	室町	徳田志摩居城跡？
28	古府しのまち遺跡	〃　古府町	包含地	古墳～中世	昭和48年度県教委調査
29	古府遺跡	〃　〃	〃	平安中期	昭和59年度県教委調査
30	フドンド遺跡	〃　〃	集落跡・経塚	平安	白銅鏡出土
31	古府シマ遺跡	〃　〃	包含地	平安～中世	
32	南野台・南野台B遺跡	〃　〃	〃	縄文中期他	一部耕地整理の際破壊
33	古府横穴	〃　〃　(にか山)	古墳	古墳	
34	十九堂山中世墓址群	〃　〃	墳墓	中世	一部消滅
35	十九堂山遺跡	〃　〃	寺院跡	平安	
36	小野町遺跡	〃　小野町	包含地	古墳	
37	小野窯跡	〃　〃　成312	窯跡	江戸	昭和９年小学校設立の際破壊
38	小野スギノキ遺跡	〃　〃	包含地	平安～中世	
39	小野遺跡	〃　〃	〃	平安	
40	埴田ミヤノケ遺跡	〃　埴田町	〃	不詳	
41	下出地割遺跡	〃　河田館町	〃	〃	
42	牛島ウハシ遺跡	寺井町牛島	〃	古墳～平安	
43	佐野八反田遺跡	〃　佐野	〃	奈良～平安	

第２節　歴史的環境

本遺跡周辺に存在する縄文時代の遺跡には、中海(なかうみ)遺跡、軽海西芳寺(さいほうじ)遺跡がある。両遺跡とも中期後半の遺跡で、中海遺跡は梯川の支流滓上川右岸の河岸段丘上に、軽海西芳寺遺跡は小松東部丘陵から北西に緩く傾斜する台地上の「前山」に立地する。

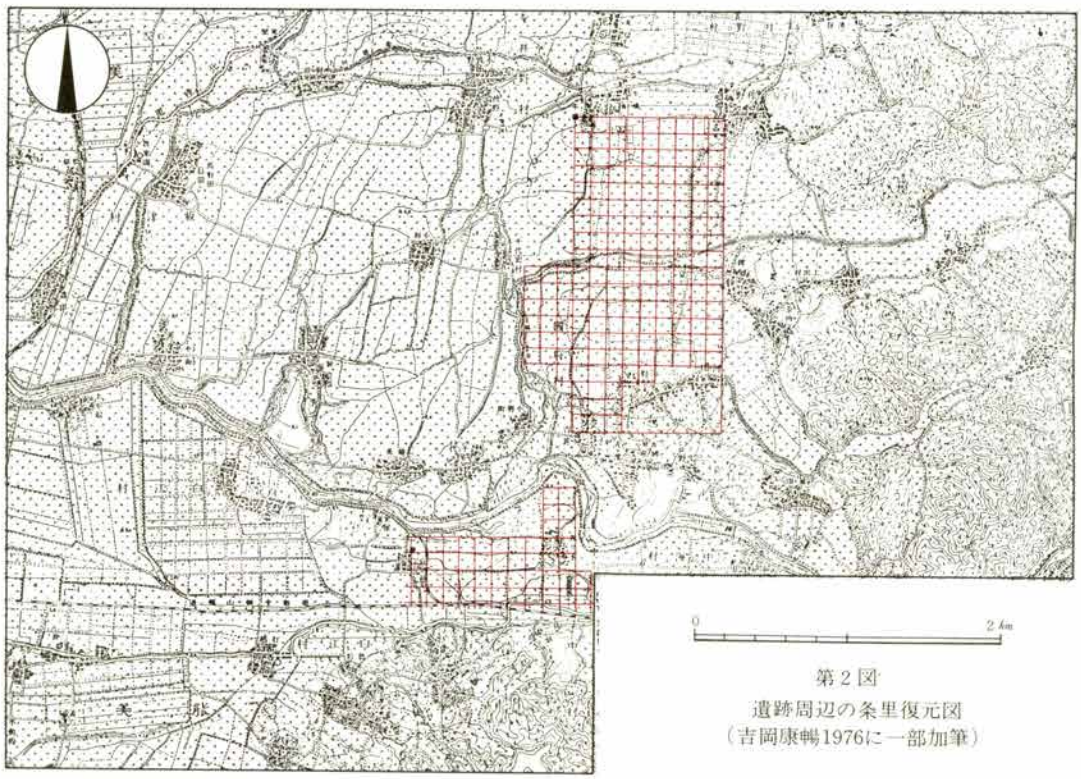
弥生時代に入ると、梯川左岸の低湿地にも遺跡が分布し始める。まず下流域において、中期の遺跡として八日市地方(ようかいちぢかた)遺跡、梯川鉄橋(てつきょう)遺跡が存在する。特に八日市地方遺跡から検出された土器は「小松式土器」と名付けられ、北陸地方の弥生時代中期中頃の標式となっている。中流域で本格的に遺跡が活動し出すのは、後期後半まで下る。まず漆町(うるしまち)遺跡において「ムラ」の存在が認められ、同時代の末期には白江(しらえ)梯川遺跡、白江念仏塔(ねんぶつとう)遺跡、本遺跡、佐々木アサバタケ遺跡など、多くの遺跡が東西に帯状に連なって存在する。これらの遺跡はいづれも地理的環境で述べた梯川の自然堤防上に立地している。農耕生活の浸透とともに、水田経営を行う上での諸条件が低湿地

への進出を押し進めたものと推察される。

畿内・東海・山陰系土器群の流入とともに、中流域の遺跡は古墳時代前期には飛躍的な発展を遂げる。各遺跡とも前時代とは比較にならないほど多くの遺構や遺物が検出されている。県下でも同時期における遺跡密集地として注目されており、前時代よりさらに一段階進んだ当時の「ムラ」の構造や生活形態を知る上で、多くの手がかりを与えている。またこれらの遺跡と時期を同じくして、南側に位置する小松東部丘陵には八幡古墳群が存在している。いづれ詳細な調査が実施されれば、時期の特定とともに当該期の「ムラ」の重層的な構造が明確になるであろう。またこの時期には、中流右岸にも千代マエダ遺跡をはじめいくつかの遺跡が存在する。

古墳時代前期～後期前半(4～6世紀)には隆盛を誇った梯川中流域の遺跡も、6世紀後半に入ると火が消えたようにその規模を縮小し、わずかに本遺跡と漆町遺跡の金屋サンバンワリ地区などで遺構が確認される程度で、これ以降9世紀後葉に入るまで遺跡の活動はあまり認められない。原因として洪水などの自然災害が挙げられるが、それのみで隆盛を誇っていた「ムラ」が広範囲に亘って長期間縮小したと考えるには疑問が残る。当該期は日本史的立場から見ても、氏姓制度による地方分権制から天皇中心の中央集権的律令国家体制へと移行する過渡期である。土地利用法の変化、社会制度の変化などを含めた検討も、遺跡の在り方を明確にする上で必要であろう。

律令国家体制の完成下で、8世紀の中頃には加賀地方でも初期荘園の開発が興るが、その数は



第2図
遺跡周辺の条里復元図
(吉岡康暢1976に一部加筆)

大変少く、したがって当時の開発状況を知る資料は少い。その中で本遺跡周辺に残存する条里制遺構は、当時の状況を解明する貴重な資料である。条里制遺構は、本遺跡周辺及び対岸の古府台地一帯、さらに鍋谷川を狭んで北方の平地に至る範囲で残存している。条里の施行期については不明であるが、南加賀では東大寺領能美郡幡生荘（所在地不詳）[1]で天平宝字年間（750～764）に施行されており、本遺跡周辺の条里もほぼ同一期には施行されたと考えられる[2]。条里の施行は、梯川流域に高度な灌漑技術を導入し、安定した耕地と一定の生産量を確保する先進的な開発をもたらした。また在地有勢者が台頭する要因にもなった（吉岡　1976）。

下って弘仁14(823)年には、越前国より分離して加賀国が設置される。加賀国府の所在地については諸説があるが、古府台地周辺説が現在のところ最も有力である。古府台地は加賀国のほぼ中央に位置し、能美平野を一望できる立地環境を持つ。古府台地の北西約1km地点に所在する古府しのまち遺跡付近は「能美千軒、国府千軒」と口承され、台地上に所在する十九堂山遺跡からは布目瓦片が出土し国分寺としての可能性が推察されているが、証跡はいまだに発見されていない。9世紀代の遺構や遺物は、金沢平野における同世紀のそれと比べると大変少く、国府創草期の周辺一帯の状況は明らかにされていない。

9世紀後葉～10世紀に入ると、梯川中流域の各遺跡で掘立柱建物を始め遺構や遺物が急増する。再開発促進に伴い各遺跡は、「ムラ」の変遷や再編成および建物群の新たな構成・形態を知る上で、多くの資料を提供している。これらの再開発は、国司として赴任してきた受領層の土着化に伴い、国衙を利用して、一時放棄され荒廃した条里制水田を対象としたと考えられている（室山　1973）。梯川上流域から中流域にかけての左岸は、律令体制下に軽海郷（『和名抄』）として組み込まれ対岸に国府を望むが、漆町遺跡から出土した10世紀中頃に比定する「庄」の墨書が入った須恵器は、国府の膝元で荘園開発が行われていたことを示す点で興味深い。

寛弘9（1012）年、加賀守源政職の悪政を加賀の百姓等が朝廷に訴え出た事件（寛弘事件）は、律令国家の秩序の乱れが地方でも相当進んでいたことを示すと同時に、加賀における在地有力者の台頭を明示している。平安時代後期に在地有力者として勢力を強めていた中宮八院[3]は、白山信仰の拠点である白山宮加賀馬場のうち上白山3社の中心であった中宮の末寺8ケ所の総称で、軽海郷の山間部に国衙を取り囲むような形で配置され、梯川の水源を押さえていた。中宮八院の勢力伸張は国司との対立を深め、安元事件へと発展する。これは、加賀国司近藤師高の目代として赴任した弟の近藤師経が、安元2（1176）年夏に白山宮の圧力を排除する目的で八院の1つ鵜川湧泉寺に強制的に立ち入ってこれを焼き打ちにした事件である。白山宮と本寺である延暦寺の強訴により、師高・師経兄弟の解任、配流という結着を見たが、加賀における古代秩序の決定的崩壊という点で大変意義深い。中宮八院については今日現存しておらず、明確に寺院として検出されてもいないが、地名によっていくつかはおおよその位置が推定できる[4]。また、本遺跡から南方約2km付近の小松東部丘陵内に所在する浄水寺遺跡は、平安時代中期後半に建立された寺院だが、その規模と出土遺物の質の高さから古代～中世に至る加賀の寺院形態の解明に1つの手がかりを与えるとともに、中宮八院や在地有力者との関係について多くの問題を投げかけている。

10～12世紀の文献史料としては、藤原為房が綴った『為房卿記』の寛治5（1091）年7月條に、加賀国司としての任期を終え帰京する際に、舟で川を下ったという記事がある。古府台地上に国府が所在したのであれば、梯川水系を利用した古代交通の形態が探れよう。

鎌倉時代に入ると梯川流域は、加賀斎藤氏の林系の庶流に属する板津氏・白江氏（『尊卑分脈』）などの在地武士が開発領主としてようやく台頭し始める。永仁5（1297）年の「菊大路文書」に、鎌倉幕府が橘成政に佐々木窪田乱橋などの領地を安堵した記事が見え、当時本遺跡周辺は、橘（八幡）氏の勢力下であったことが窺われる。嘉暦4（1329）年軽海郷は武蔵金沢称名寺領となる。その後康暦2（1380）年には問注所刑部少輔長康領となり、正親町三条家領を経て大永3（1523）年に禁裏御料所となっている。軽海郷では早い段階から年貢米・公事の銭納化がなされていた。また荘園市場として軽海郷市が立ち、梯川の水運を利用して絹織物や菊酒などの特産物の流通が行われていた。これら軽海郷に関する史料は、中世加賀の荘園内における村落構造を知る上で大変に貴重である。平安時代以降の梯川中流域の各遺跡は、近世に至るまで連綿と生活の跡を刻んでおり、白江梯川遺跡、漆町遺跡、佐々木アサバタケ遺跡では、平安時代末期から室町時代にかけて継続的に掘られた多数の井戸跡から、当時の生活を探る良好な資料が検出されている。

註(1) 幡生庄所在地については、式内社幡生神社の社名から、その現鎮座地である小松市吉竹町付近とする見解があったが、その後大治5年『東大寺諸荘文書并絵図等目録』の四至記載の検討から、吉岡康暢、浅香年木氏らにより能美郡辰口町西部地区を中心とする旧能美郡山上郷付近に想定する見解がだされ、また辰口西部遺跡群の発掘調査で「庄」「荘」の墨書土器が出土したことから、現在では当地が有力となっている。

(2) ただし残存する条里制遺構は、中世に再施行されたものと考えられている。（吉岡　1976）

(3) 湧泉寺・護国寺・昌隆寺・松谷寺・蓮花寺・善興寺・長寛寺・隆明寺の八寺をいう。

(4) 湧泉寺は現小松市遊泉寺町に、護国寺は同・五国寺町に、昌隆寺は同・正蓮寺町に、隆明寺は国・立明寺町にそれぞれ比定できる。

参考・引用文献

石川県教育委員会　1982　『石川県遺跡地図』

橋本澄夫　1968　「石川県小松市八日市地方遺跡の調査」『石川考古学研究会々誌』第11号　石川考古学研究会

小村茂・室山孝　1973　『軽海中世墓址群―発掘調査概報―』　小松市教育委員会

小村茂・橋本澄夫　1974　『古府しのまち遺跡』　石川県教育委員会

田嶋明人　1980　「白江念仏寺塔遺跡」『拓影』（『石川県立埋蔵文化財センター所報』第3号）

田嶋明人他　1982　『漆町遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

湯尻修平他　1985　『昭和59年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』　石川県立埋蔵文化財センター

石川県立埋蔵文化財センター　1982～1985　『石川県立埋蔵文化財センター年報』第1号～第5号

石川県立埋蔵文化財センター　1984・1985　『県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』（昭和54・55年度）・『同Ⅱ』（昭和56～59年度）

関戸信次　1965　「第一篇　自然篇」『小松市史』(4)風土・民俗篇

上野與一　1965　「第二篇　考古篇」『小松市史』(4)風土・民俗篇

飛島與三松　1981　「軽海町の歴史」『軽海町史』　軽海町史協力委員会

守屋以智雄　1983　「第1章　地形と地質」『辰口町史』　辰口町史編纂専門委員会

浅香年木　1975　「安元事件」『石川県大百科事典』　北国出版社

室山孝　1975　「軽海郷」『石川県大百科事典』　北国出版社

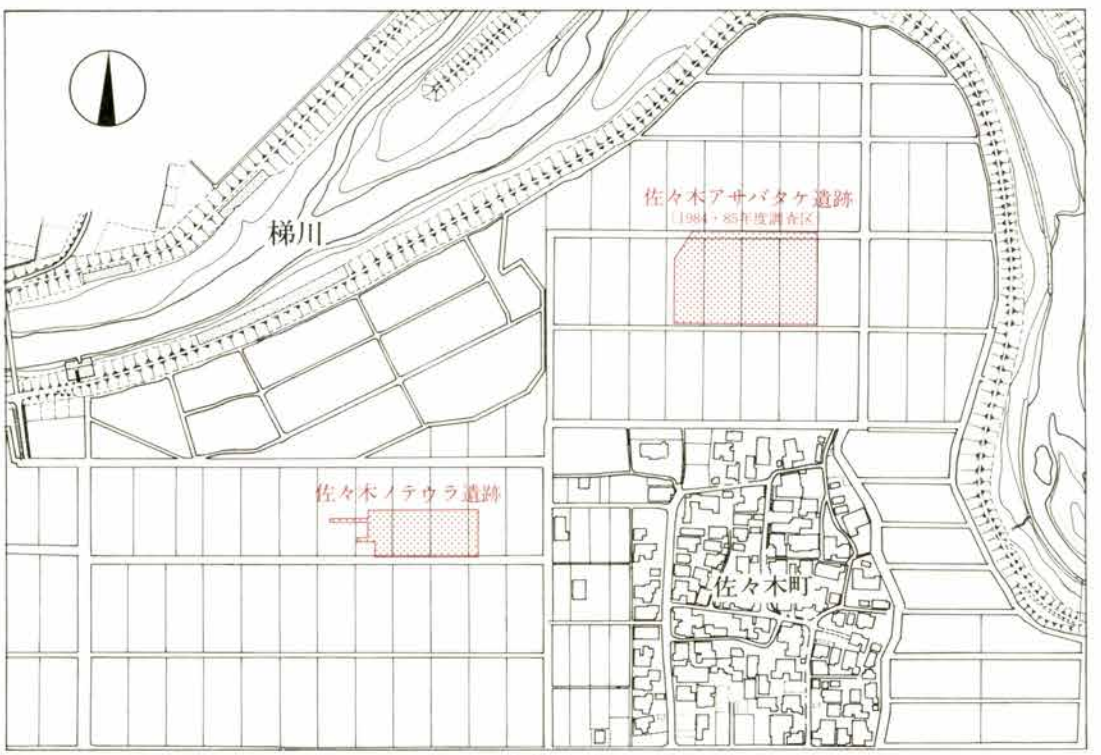
浅香年木　1975　「中宮八院」『石川県大百科事典』　北国出版社
『角川日本地名大辞典17　石川県』「軽海」「能美」「能美江沼丘陵」「能美郡」「小松市」　1981
日置謙編　1944　「金沢文庫文書」『加能古文書』　金沢文化協会
石川県編　1969　「第三章　中世加賀・能登の歴史」『石川県史資料』　石川県教育委員会
日置謙　1974　『石川県史』第一編　石川県図書館協会
吉岡康暢　1970　「第二章　古代史　第二節律令時代の能登・加賀、第三節律令政治の残映」『石川県の歴史』　北国出版社
浅香年木　1970　「第三章　中世史　第二節中世の経済文化」『石川県の歴史』　北国出版社
下出積与　1977　「原始・古代　3能登と加賀の立国」『石川県の歴史』　山川出版社
榛沢健二　1979　「加賀の荘園と農民」『石川県の歴史と風土』　新加能風土記刊行会
吉岡康暢　1959　「加賀における条里制をめぐる問題」『北陸史学』第8号　北陸史学会
吉岡康暢　1976　「平安前期の地方政治と国分寺（上）」『金沢大学日本海域研究所報告』第8号
吉岡康暢　1985　「加賀・能登の初期荘園と横江荘遺跡」『加能史料研究』創刊号　石川県史書刊行会
府和正一郎　1972　『梯川の意義の変遷』　小松市立女子高等学校社会科研究室
浅田三郎　1984　「軽海用水小史」『加南地方史研究』第31号　加南地方史研究会

第2章　調査の経緯と概要

第1節　発掘調査に至る経緯

本遺跡の発掘調査は県営公害防除特別土地改良事業梯川流域地区に係る緊急調査である。同事業は昭和52年、農林省より実施承認されたもので、その内容はカドミウムに汚染された梯川流域地区水田の土壌改良とそれに合わせて圃場の大規模化を促進することを目的としたものである。同事業に係る埋蔵文化財関係の調査は、昭和52年度の軽海西芳寺遺跡・麻畠大谷遺跡などの分布調査、昭和53年度の土壌改良に伴う客土用土砂の採土地にあたった那谷桃の木山1号窯跡（小松市教育委員会担当）の発掘調査に始まり、以後、昭和60年度までに漆町遺跡、軽海西芳寺遺跡、白江梯川遺跡、那谷金比羅山窯跡群、吉竹遺跡、本遺跡、佐々木アサバタケ遺跡、軽海遺跡で計約68,500 m² の発掘調査、他に数多くの分布調査[1]が実施されている。

本遺跡は昭和58年9月30日～同10月1日にかけて実施した分布調査によって発見され、県小松土地改良事務所との協議により、汚染田の土壌改良に伴う客土工事によって遺跡の破壊される箇所についてのみ発掘調査を行うこととし、現地調査は、昭和59年5月15日～同8月6日にかけて約3,100 m² を対象に実施した。あわせて調査区周辺部の範囲確認調査も実施した。現地調査の経過については、第2節の調査日誌抄に拠られたい。



第3図　調査区の位置（S＝1/6,000）

第2節　調査日誌抄

5月15日（火）　調査区を設定し、基本層序の確認を行うとともに、重機により耕土の除去作業を開始（～17日）。

5月17日（木）　作業小屋設営。

5月18日（金）　発掘器材搬入。調査区内のグリッド用の杭打ちを実施。

5月21日（月）　第2層の掘り下げと遺構検出作業を開始。

5月22日（火）～6月14日（木）　調査区西側から東方向へ第2層の掘り下げと遺構検出作業を継続。並行して1～16号溝の調査・実測。

6月15日（金）　D－7～9区の落ち込み部の調査を開始。6号溝の東南部で杭列を確認。

6月18日（月）　落ち込み部の調査完了。遺構略図作製。

6月21日（木）　調査区北壁、西壁の層序実測。調査区西側を拡張、遺構検出。

6月22日（金）　土坑・柱穴等の調査開始。

6月27日（水）～29日（金）　溝・土坑の層序実測。

7月2日（月）～5日（木）　土坑・溝・柱穴等の写真撮影、遺物出土状況実測。

7月7日（土）　1・2号井戸の調査開始。

7月11日（水）　掘立柱建物のエレベーション図を作製（～13日）。

7月12日（木）　区画溝追求のため調査区西側を拡張、遺構検出。

7月14日（土）　13号土坑遺物出土状況、2号井戸床面実測・写真撮影。

7月17日（火）～20日（金）　西拡張区遺構調査。掘立柱建物写真撮影。

7月23日（月）・24日（火）　航空写真測量のため調査区清掃。

7月25日（水）　航空写真測量の撮影を実施するが悪天のため図化不可能。

7月26日（木）　調査区排水・清掃作業。

7月27日（金）　航空写真測量の撮影実施。調査区全景写真撮影。

7月29日（日）　石川考古学研究会例会の遺跡見学。

7月31日（火）　柱穴掘方埋土の調査ほか。

8月1日（水）・2日（木）　範囲確認調査。

8月3日（金）　発掘器材撤収。

8月6日（月）　作業小屋撤収、現地調査終了。

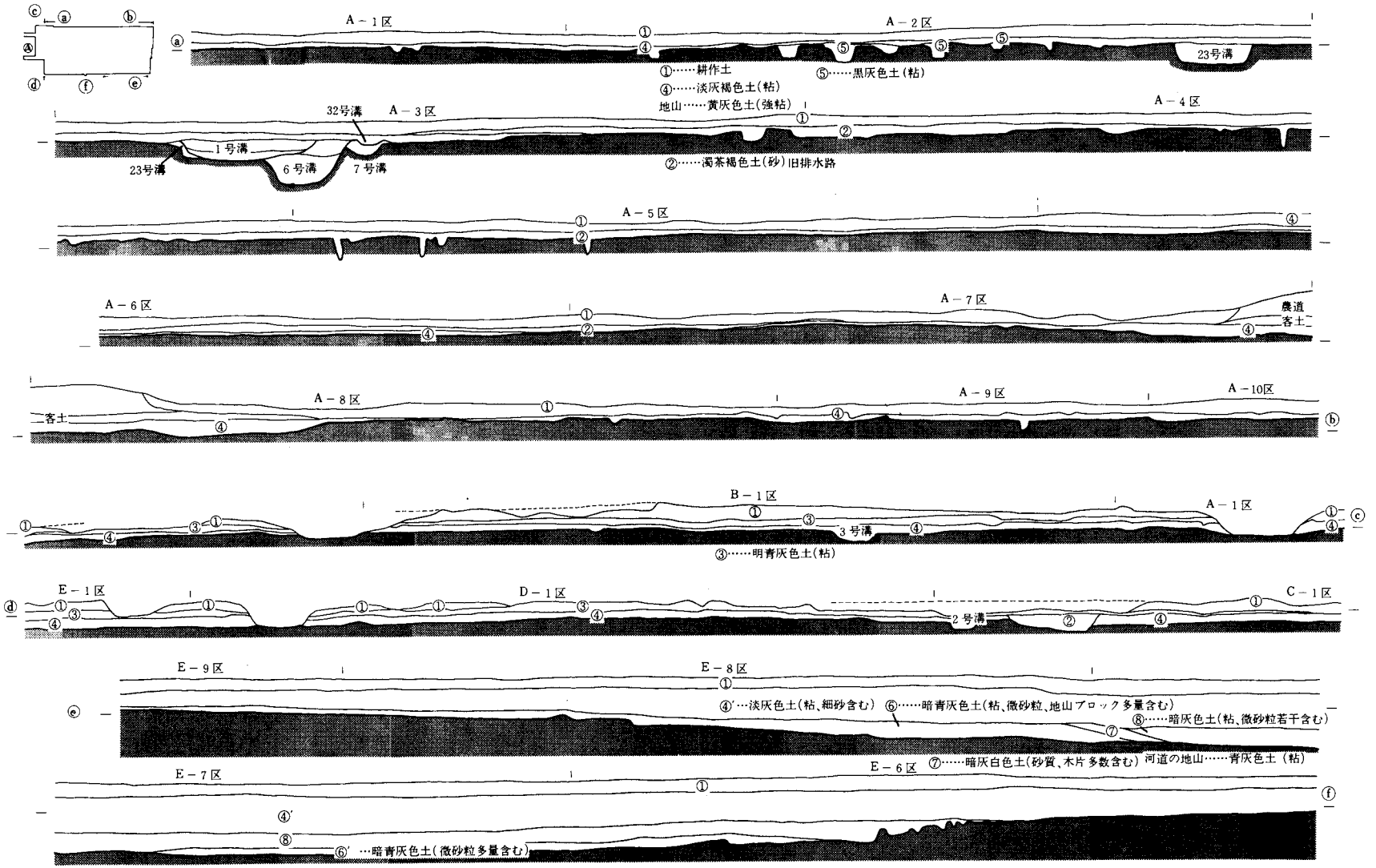
調査前の状況

表土除去作業

遺構検出作業

冠水状況

航空写真測量



第4図　調査区土層図(L＝4.20m：S＝1/80)

第5図　遺構全体図、主要遺構および調査区区割図

第3節　調査の概要

調査区は東西に長い長方形を呈する。その東北外にA－1杭を設定（仮想）し、工事計画畦畔を基準線に10mグリッドを組んだ。各グリッドの呼称は東北隅の杭ナンバーによった(第5図)。

遺跡の現況は、標高約4.4～4.7mの平坦な水田地帯で、耕土中には須恵器・土師器の散布が認められた。調査によって確認された基本層序は、第1層が耕土、第2層が明青灰色土(床土)、第3層が淡灰褐色土（遺物包含層)、第4層が茶褐色～黒褐色土（遺物包含層)、第5層が黄灰色土（弥生時代～平安時代の遺構検出面)、第6層が黒色粘土(上面で標高約3.2m)、第7層が灰色粘土である。第5層以下では遺物、遺構は確認していない。遺構面は調査区中央北よりの地区が最も高く(標高約4.3～4.4m)、この付近では第3、4層が既に削平されていた。第4層は調査区内においては確認されず、僅かに西半部の遺構覆土中に見られるのみである。

本遺跡の主体となるのは、7世紀、10世紀、12世紀の3時期である。各時期の遺構覆土はそれぞれ特長があり（7世紀代―黒褐色、10世紀―茶灰色、12世紀―淡灰褐色)、時期を推定しうる遺物の出土しない小遺構についても概ねその帰属時期は推察できる。以下本書では、検出された掘立柱建物が中心とする時期をそれぞれ古い順に本遺跡のⅠ～Ⅳ期として述べていく。

Ⅰ期以前…縄文時代晩期、弥生時代後期～古墳時代前期。少量の遺物が散発的に出土。

Ⅰ期……7世紀前半～8世紀前葉。調査区西よりに1・6・9号建物の住居・倉庫があり、中央～東よりに6・7号溝がある。6号溝の東南端は河道氾濫原の落ち込み部に続いており、そこでは桟橋状の遺構が検出された。

Ⅱ期……9世紀後半か。8号建物をこの時期のものと推定したが、Ⅰ期末ないしはⅢ期初の可能性もある。1号溝に若干の遺物があるものの絶対量は少ない。

Ⅲ期……10世紀前半。調査区中央部で、1号溝、1号柵に囲まれた屋敷地をもつ4・5号建物を主体とする。遺物量は建物群の周辺を中心に最も多い。

Ⅳ期……12世紀。Ⅰ期建物群と重復して調査区西よりで検出された2・3・7号建物、それをとり囲む区画溝などがある。

Ⅳ期以降…15世紀。Ⅳ期建物群の周辺で若干の遺物が出土している。

本遺跡の変遷は、以上のように大まかに4期（6段階）に分けて把えられる。各時期の建物群を中心とした遺構群は、重複度も少なく比較的純粋なかたちで検出していることから、当時の住居域におけるその構成を知る上では好資料を提供していると言えよう。

なお、調査終了後、遺跡周辺は大規模な圃場へと整備され（図版3下)、その景観は一変した。第1章第2節でも述べているように、本遺跡周辺は条里型地割をよく残した地域であり(第2図、図版1、図版2上)、一種の歴史的構築物とも言えるその消失は非常に惜しまれるところである。

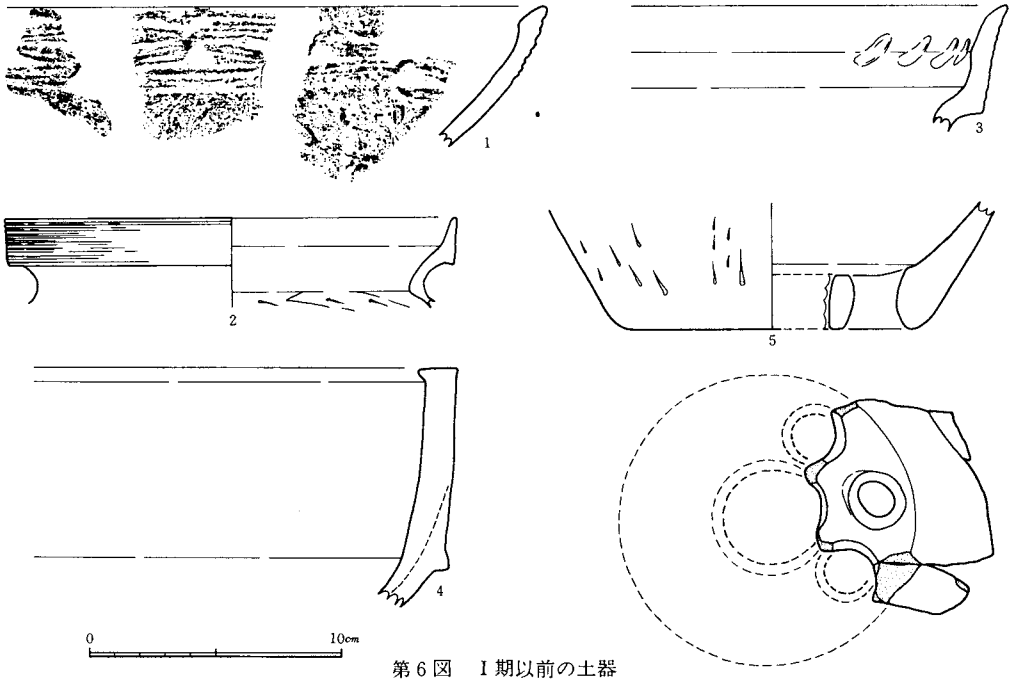
註(1)　分布調査実施箇所については下記文献参照。湯尻修平1985「遺跡の保護とほ場整備事業」『昭和59年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』　石川県立埋蔵文化財センター

第３章　遺構と遺物

第１節　Ⅰ期以前の遺構と遺物

Ⅰ期以前に遡る明確な遺構は確認していないが、D－６区～D－９区の落ち込み部（河道氾濫原）を中心に若干の遺物が出土しており、この凹地が少なくとも該期には存在していたことがわかる。

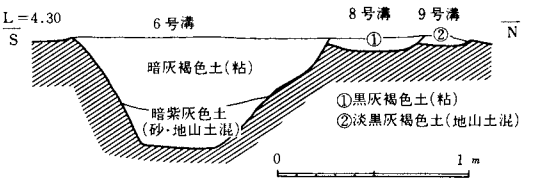
遺物には、縄文時代晩期（１）、弥生時代後期～古墳時代前期（２～５）の土器がある。１は浮線文系の浅鉢で、沈線により陽刻された網状文の結合部に上下２段の対になると三角形の抉りを入れる。文様帯は下方の浅い沈線によって区画される。類例は、長野県小諸市氷遺跡[1]、同茅野市御社宮司遺跡[2]などにみられ、県内では鳥越村下吉谷遺跡で確認されている[3]。晩期後半代と考えられる。２はくの字状の頸部をもつ有段甕形土器である。口縁帯は直立し、外面に細かい擬凹線文をめぐらす。内面頸部以下はヘラケズリで器壁は薄く、その境に明瞭な稜をもつ。３は大型の有段擬凹線甕形土器である。口縁部は上外方へのび、内面には指頭圧痕が残る。時期は２が法仏Ⅱ式期[4]、３が月影Ⅱ式期[5]と考えられる。４は大型壺形土器である。口縁端部は上方からの強いナデで内面が肥厚し、有段部外面はするどい稜をもつ。古墳時代前期の山陰系のものである。５は底部に８～９個の穴をもつ甑形土器である。古墳時代前期頃のものであろう。弥生時代後期～古墳時代前期の土器には、他に少量ながら高杯形土器、器台形土器、蓋形土器などがある。遺物量が少なく、分布も希薄であることから、調査区外の落ち込み部縁辺に小規模な遺構が若干存在した程度とみられる。



第６図　Ⅰ期以前の土器

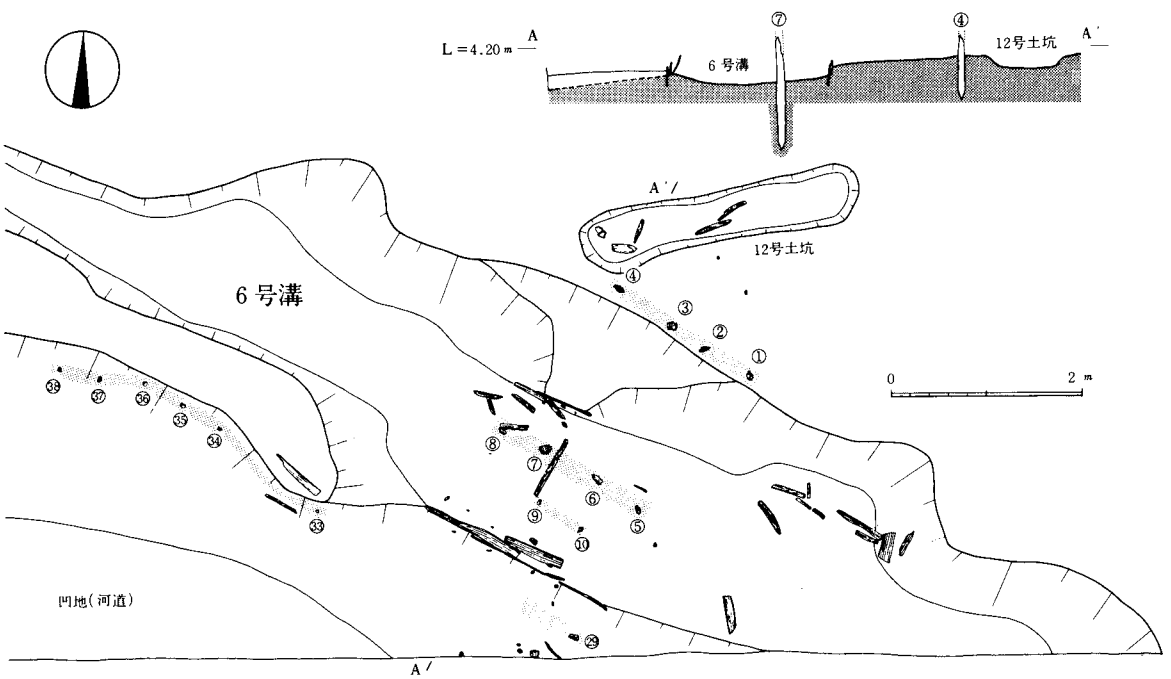
第2節　Ⅰ期の遺構と遺物

6号溝　調査区の中央を南東から北西に流れる。断面逆台形で、幅約140 cm、溝底幅約40 cm、深さ約60 cmを測る。下層は暗紫灰色土で細砂・地山土混り、上層は暗灰褐色土、ともに粘性が強い。

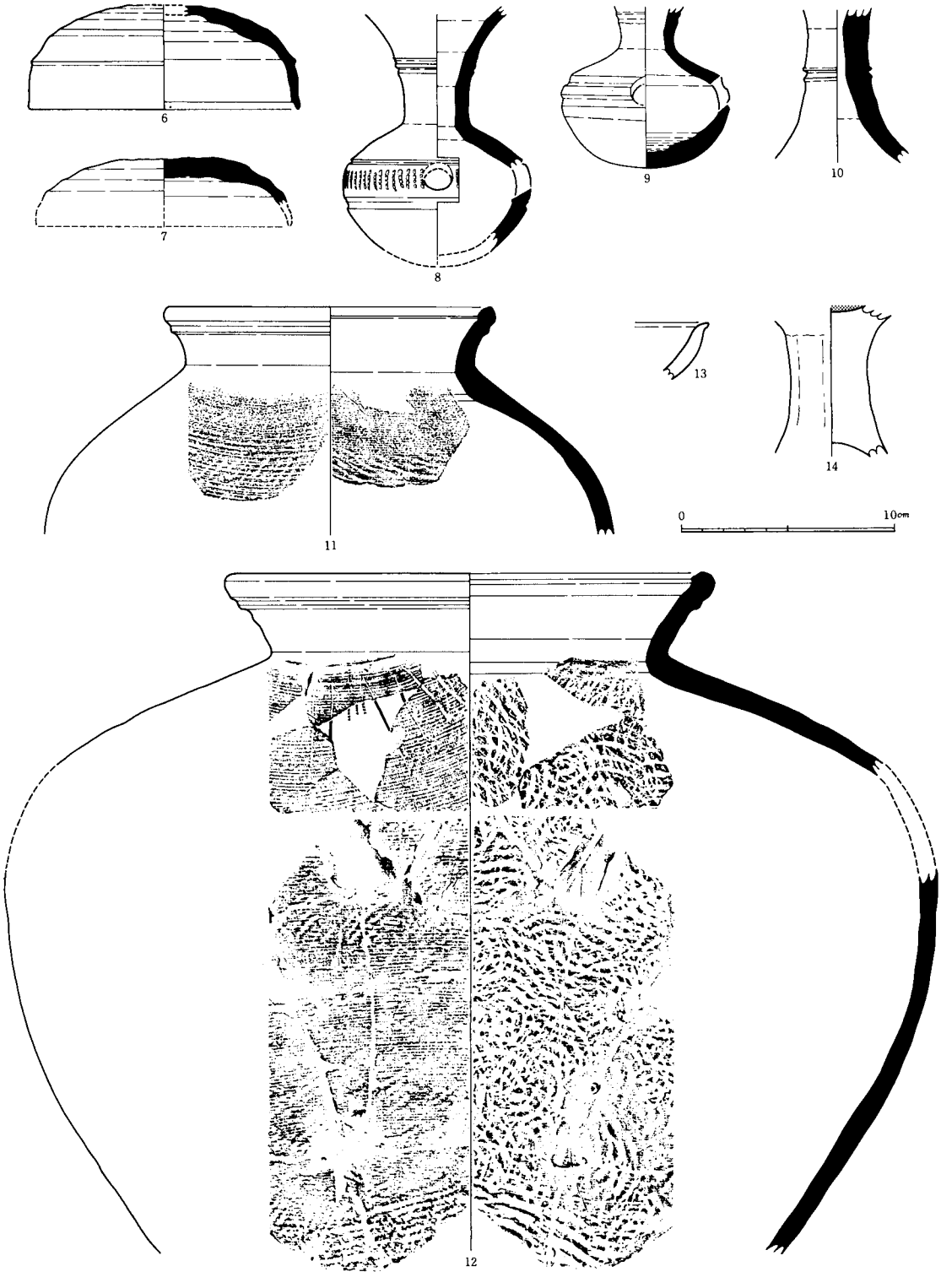


第7図　6・8・9号溝土層図(B－4区)

D・E－7～8区の落ち込み部（氾濫原）とつながり、そこで橋脚杭列、護岸用杭列、溝への導水施設と考えられる木造遺構を検出した（第8図)。橋と推定したものは、①～⑩、㉙の杭を橋脚とみたもので、河道へ突き出す桟橋状のものを想定できる。杭は上部が腐朽して欠損するが、残存長[6]（cm）は①69、②88、③68、④67、⑤67、⑥93、⑦114、⑧82、⑨59、⑩62、㉙65を測る。①～④の第1列は、径約15 cm前後の丸太材を半載したものを用い、⑤～⑧の第2列、⑨・⑩の第3列、㉙の第4列は、辺材を四角形に加工したものを用いている。第2列の各杭は、幅、厚みとも他より大きく、地中深く（約70 cm前後）打ち込まれており堅牢な感を与える。㉝～㊳の各杭は残存長で約40～65 cmを測り、辺材を加工したものを用いている。板材を組みあわせ、この地点から河道の水が溝へ流入するのを防ぐとともに護岸用柵として機能したものと推定できる。橋脚杭第2、3列の両側には、溝の壁に



第8図　6号溝東南部平面図、断面図



第９図　Ⅰ期の土器　６号溝（６～12）

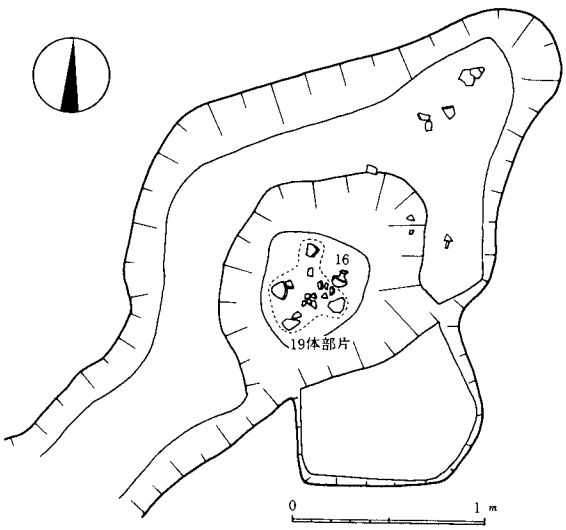
沿って小杭で固定された板材がある。散乱する他の板材もあわせ、溝の護壁とともに河道の水を定量的に引き込むための施設があったものと考えられる。

当溝では、他にA－3区で溝底壁際から直立した杭2本(残存長50～60 cm)や多くの板材が出土しており、かなり手の加えられていたことがわかる。また、C－5区東南部では、溝上位¼ほどがゆるやかに立ちあがり幅広となっているが、この地点に渡り橋を想定することも可能である。

6号溝は、集落の立地する自然堤防の後背湿地に存在した河道の水を、その増水時の被害を防ぐ意味などから、遺跡の北に接する梯川の氾濫原へ流すためのバイパス的機態を有したものと理解できる。

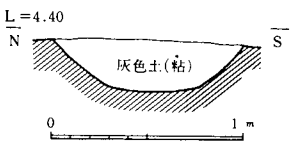
遺物は少量であるが下層を中心に出土している。出土地点は大きく別けて、D－7、8区の橋付近とB－4区、C－5区の東南部の2ケ所である。第9図に示したものは、破片の一部が出土したものも含んでおり、11、19、37はそれを7号溝と共有している。12は肩部外面に10条以上の沈線を刻む。図示したもの以外に、内面にかえりをもつ須恵器杯蓋片があり、瑳の形態差などから考えても、改修等により比較的長期に亘って使用されたものであろう（6は混入)。

7号溝　調査区の中央北よりに存在し、幅100 cm、深さ30 cmを測り、断面蒲鉾形を呈する溝である。溝幅はA－3区付近で、約50 cmと狭くなり6号溝に合流する。B－6区の東端部では北に屈折して膨らみ、溝は終結する。屈折地点では枝溝の12号溝が合流する。



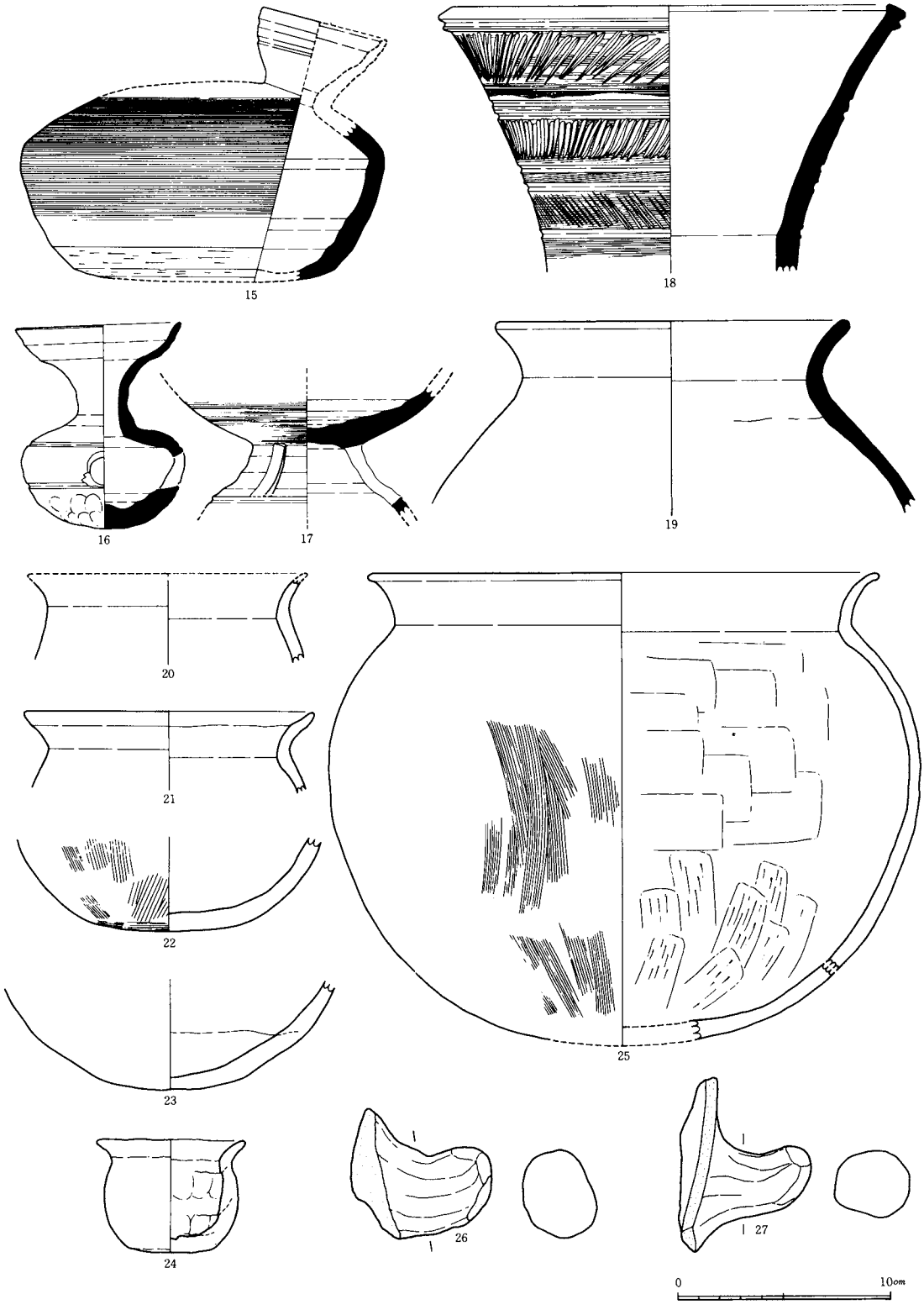
第10図　7号溝東端部平面図(B－6区)

覆土は、地山土を若干混入する粘性の強い灰色土の単一層である。6号溝との合流点の土層観察によれば、同溝の第1層の埋積以前に7号溝が埋まっていることが判明している。両者の築溝特期の前後関係は不明であるが、前記の同一個体遺物破片の共有や、遺物群の相互比較から考えて、一定期間同時併存したものとみることができる。



第11図　7号溝土層図(B－6区)

遺物はB－5区と東端部で集中してみられ、後者では瑳1点(16)、二次加熱を受けた甕破片多数が出土しており、この場でなんらかの祭祀行為の行われた可能性がある。6、7号溝内出土の須恵器は、瑳3点、高杯1点、平瓶1点、台付壺1点、甕4点と器種に偏りがあり、杯・蓋類の少ないのが特徴である。瑳は16が口縁部を欠損（包含層出土の細片1点を接合して実測)、8・9も溝の周辺部で小片となって出土しており、甕11･12をはじめてして各器種も破砕されたような状態で出土している（第54図)。これらはいずれも溝をその場とした祭祀に関わる現象と考え



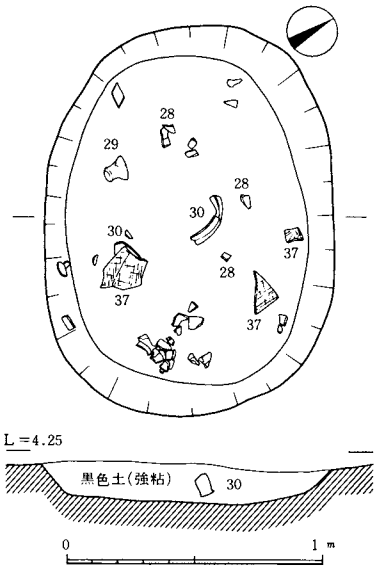
第12図　Ⅰ期の土器　7号溝(15～27)

られる。

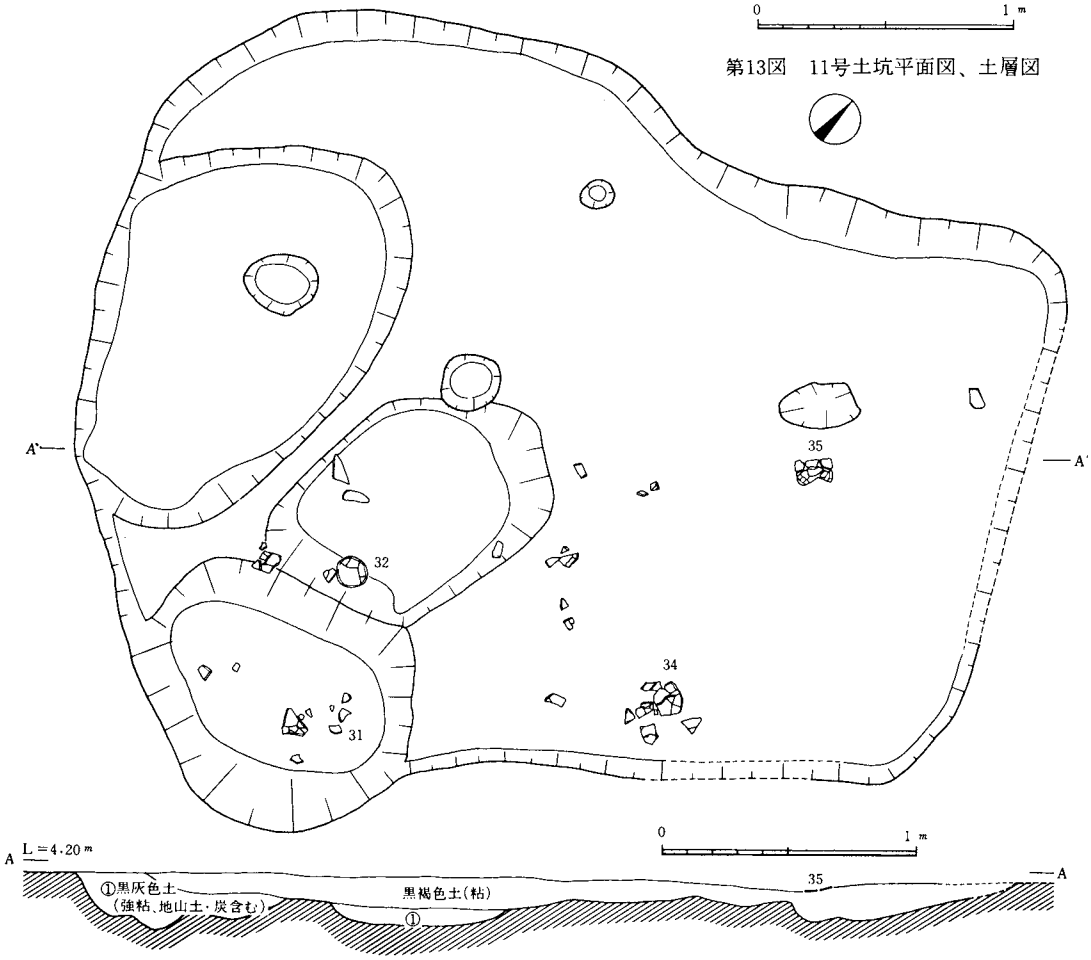
土師器はB－5区に集中する。甕（20・21）は口径13～14 cm前後で、平底風の丸底をもつ。25は口径と器高がほぼ等しく、把手（27）が付く。口縁端部は外反して丸くおさめるもの(20、25）と内面がヨコナデにより受口状を呈するもの(21）がある。

11号土坑　C－1区。径155×115 cmの楕円形で深さ15 cmを測る。覆土は強い粘性を帯びた細かな地山土を含む黒色土の単一層である。須恵器高杯（28）甕胴部片（37)、土師器では杯部内面黒色の高杯(29)、口縁部外反で端部を丸くおさめる甕(30)が出土している。

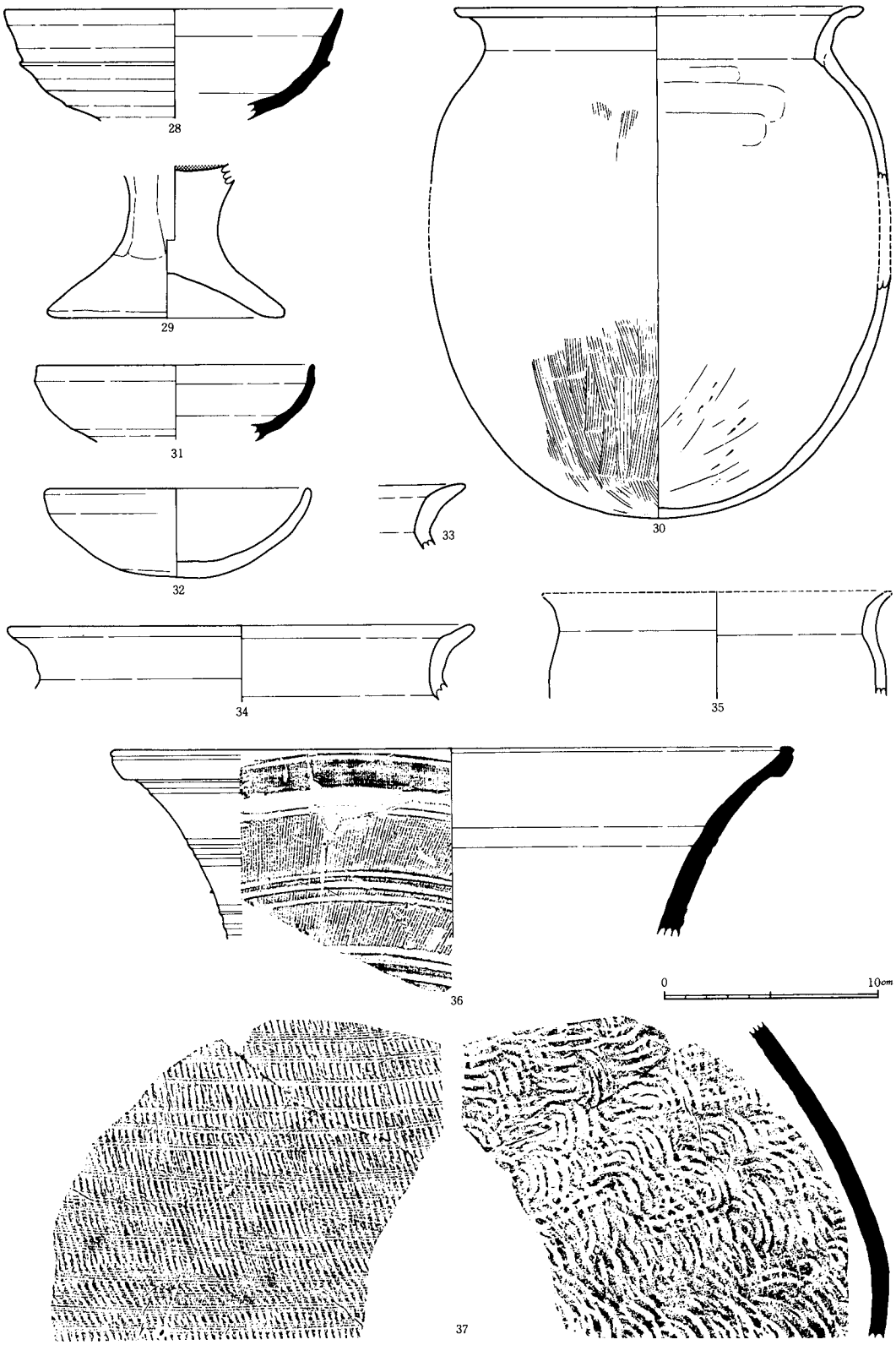
15号土坑　C－0～1区。約390×220～320 cmの不整形土坑。深さは約10 cm前後であるが、床面には南西部にさら



第13図　11号土坑平面図、土層図



第14図　15号土坑平面図、土層図



第15図　Ⅰ期の土器 11号土坑(28～30・37) 15号土坑(31～35) P-327(36)

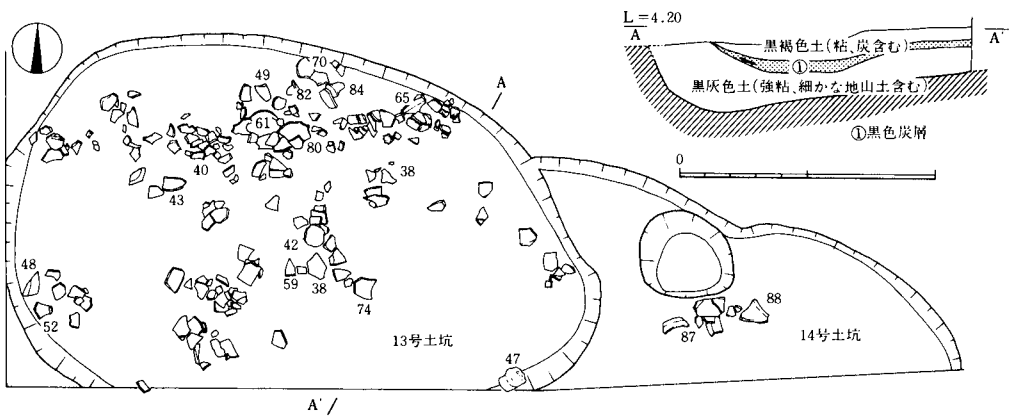
に10cmほど掘り込んだ穴3箇所があり、柱穴3～4がある。覆土は穴の部分が細かな地山土と炭を多量に含んだ黒灰色土、その上層が黒褐色土である。中央の穴では両層の間に薄い炭層が入っている。

遺物は上層を中心に出土しており、須恵器では椀ないしは蓋（31）、甕胴部片（37）、土師器では椀（32）、甕（33～35）がある。土師器甕には法量、口縁部形態に2種がある。

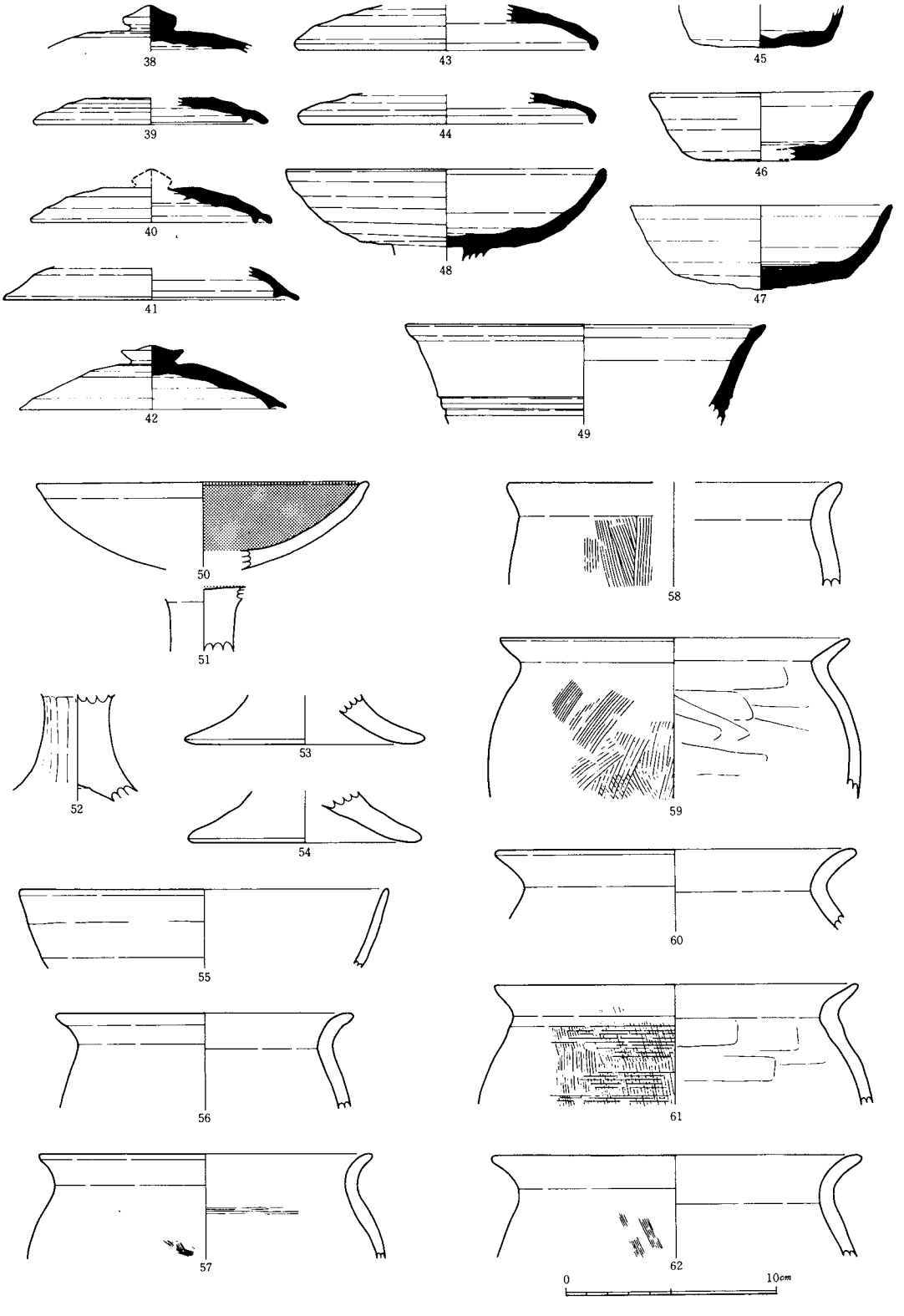
本土坑は、内部の柱穴や周辺部の小柱穴がそれを覆う簡素な上屋を想定でき、床面の3箇所の穴は多量の炭を含んでおり、出土遺物が煮沸形態の土師器を中心としていることを考えあわせると、単なるゴミ捨て穴というより、住居に付随する炊事場としての機能を持ったものと推定することも可能である。

13、14号土坑　C－0区。本来は15号土坑と同様に1つの土坑で、深い部分が13号土坑、浅い平担な部分を14号土坑としている。形態は15号土坑に類した略長方形に近いものとみられ、長辺で約400cmを測る。深さは13号土坑部分で20～30cm、14号土坑部分で約10cm。覆土は下層が地山土を混入する粘性の強い黒灰色土、上層は13号土坑部分のみで炭を多量含む黒褐色土、その間には2～5cmの炭層がある。14号土坑部分に浅い柱穴状のへこみ1箇所がある。

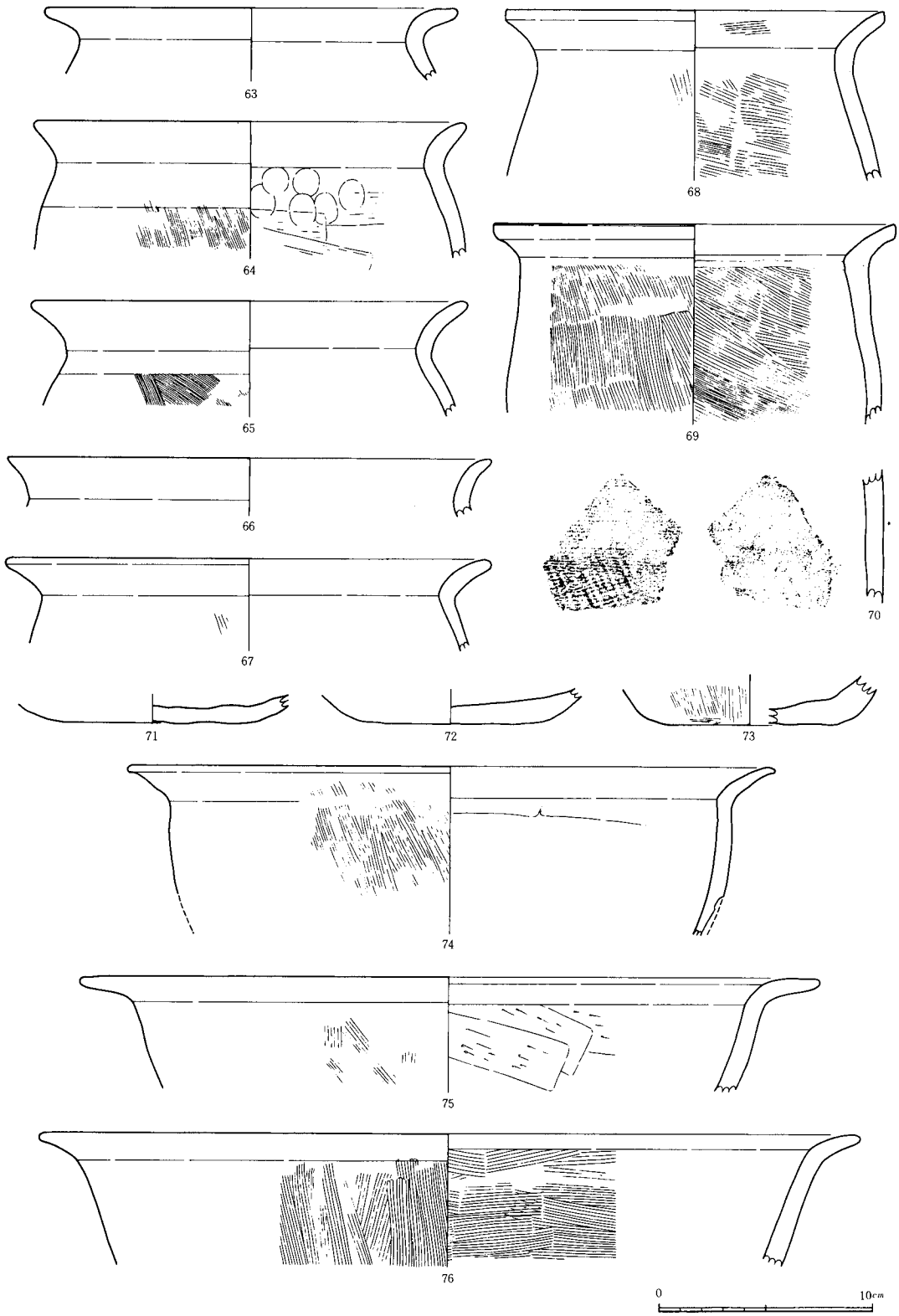
遺物は、13号土坑の炭層中とその直上部に集中して出土している。須恵器では杯蓋、無台杯、椀(有台杯)、高杯がある。杯蓋は天井部外面を回転ヘラケズリし、口縁部内面にかえりを有するもの（39～42）とそれを持たず端部が断面三角形のくちばし状となるもの（43・44）がある。椀ないしは有台杯の49は体部に2条の沈線を持つ。蓋・杯の42・47は砂粒を多く含んだ胎土に特徴があり、焼成・色調も酷似しており、セットとして持ち込まれたものであろう。土師器では甕・堝・甑の煮沸形態土器が卓越し、ほかには杯部内面黒色の高杯（50・51）がある。85は石製支脚である。甕は口縁部がゆるやかに外反し端部を丸くおさめるもの（Ⅰ類―56～67）と垂直に立つ面をもつもの（Ⅱ類―68・69・87）に大別でき、体部調整は前者が外面タテハケで内面ケズリ・ナデ、後者が内外面ともタテ～斜位のハケ、70は口縁形態不明ながら外面下半タタキで上半カキメ、内面無文のアテ具痕の後ナデである。プロポーションはⅠ類が肩に丸みを持つのに対して、Ⅱ類は直線的であり、器高の明確なものはないがⅠ類の大型品とⅡ類はともに長胴となろう。70



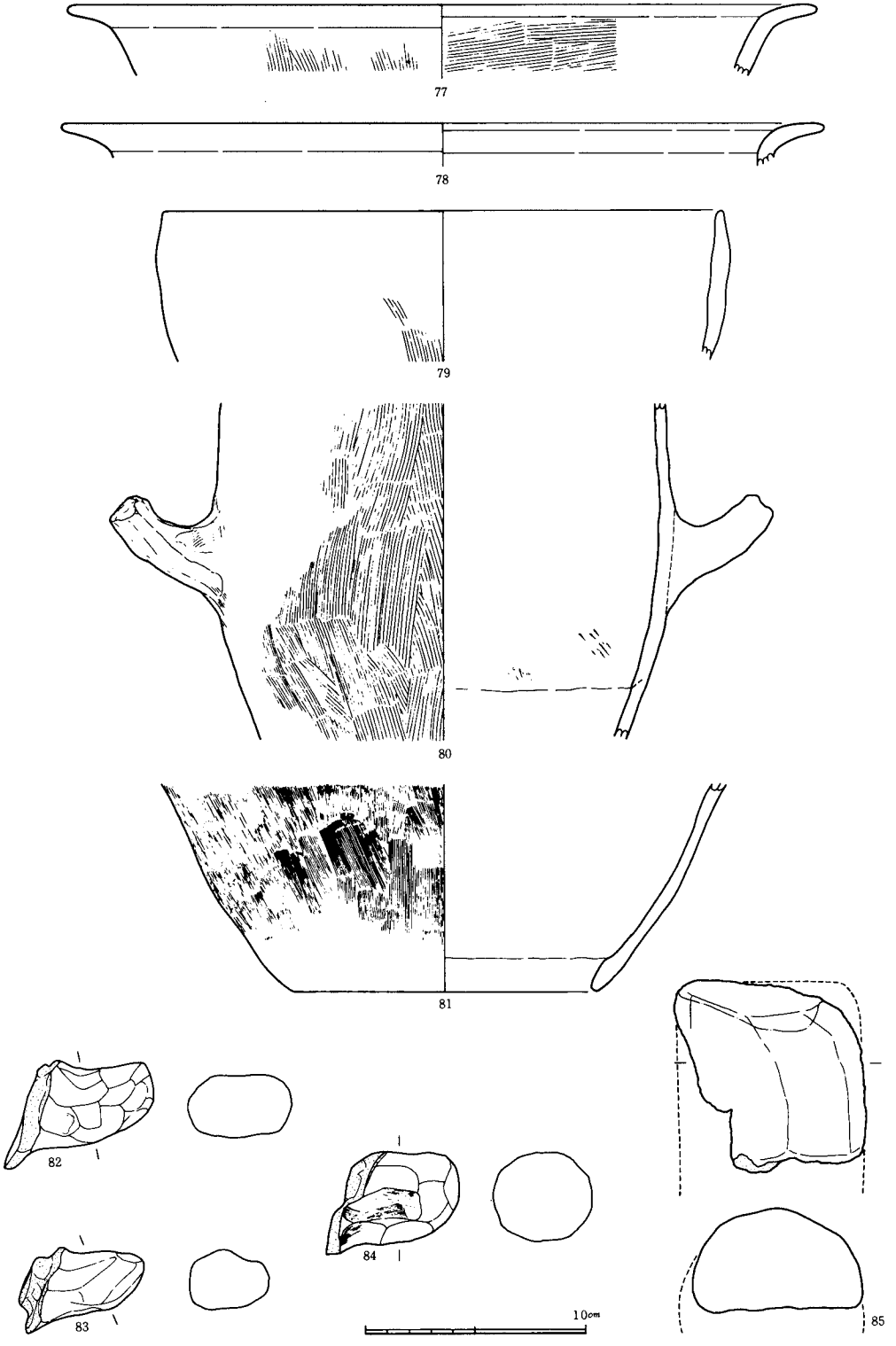
第16図　13・14号土坑平面図、土層図



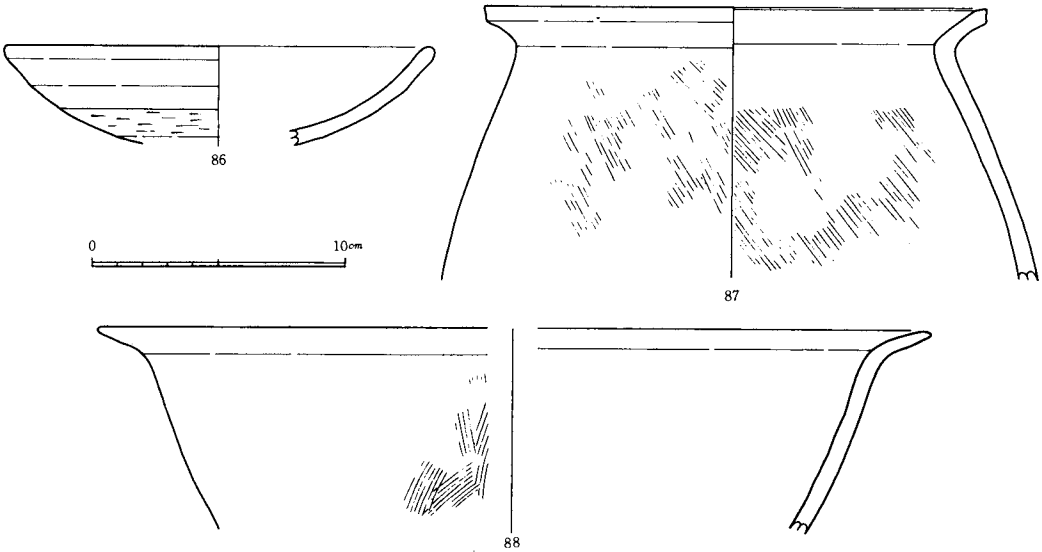
第17図　Ⅰ期の土器 13号土坑(38～62)



第18図　Ⅰ期の土器 13号土坑(63～76)



第19図　Ⅰ期の土器 13号土坑(77～85)

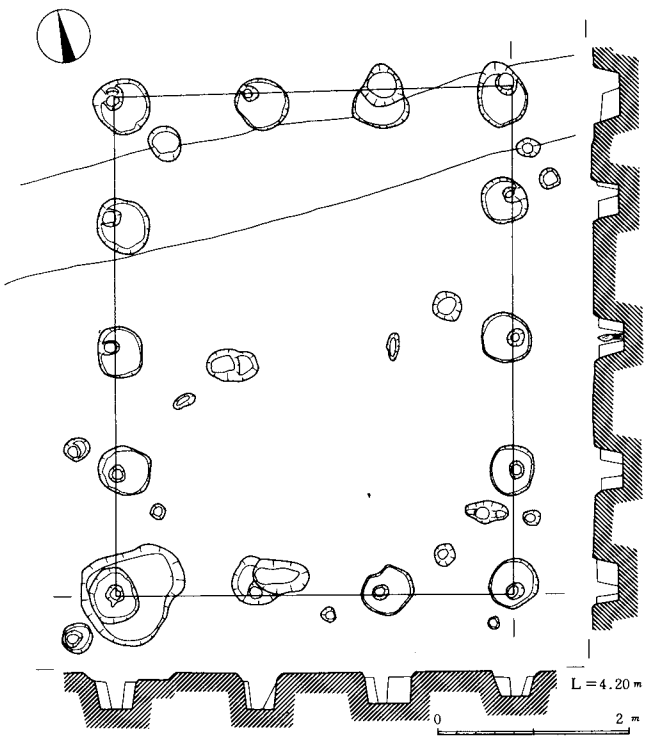


第20図　I期の土器 14号土坑(86～88)

は直線的な体部からII類の口縁形態を持つと思われる。法量は小片から口径を復元したものが多く明確な分化は示していないが、I類は口径14～17 cm前後の小型品と19～22 cm前後の大型品があり、II類は口径16～20 cm前後の大型品のみである。I類、II類の量比は前者が8割以上を占める。堝は口縁部が横方向にのび、端部を丸くおさめる。体部は外面がタテハケで内面はケズリ・ナデによるもの(74・75・88)とヨコハケのもの(76・77)がある。甑は体部外面タテハケで内面はケズリ・ナデによる。

なお、本土坑の性格については、15号土坑と同じ理由で炊事場と理解しておきたい。

1号建物　C－1・2区。4間(5.2 m、5.4 m)×3間(4.2 m)の南北棟(東偏14°)。柱間寸法は桁行が東列に若干ばらつきがあるものの西列は1.3 m等間、梁間が1.4 m等間である。柱穴掘方は径約50 cmの円形、柱痕跡は径15 cm前後、検出面からの深さは30



第21図　1号建物実測図

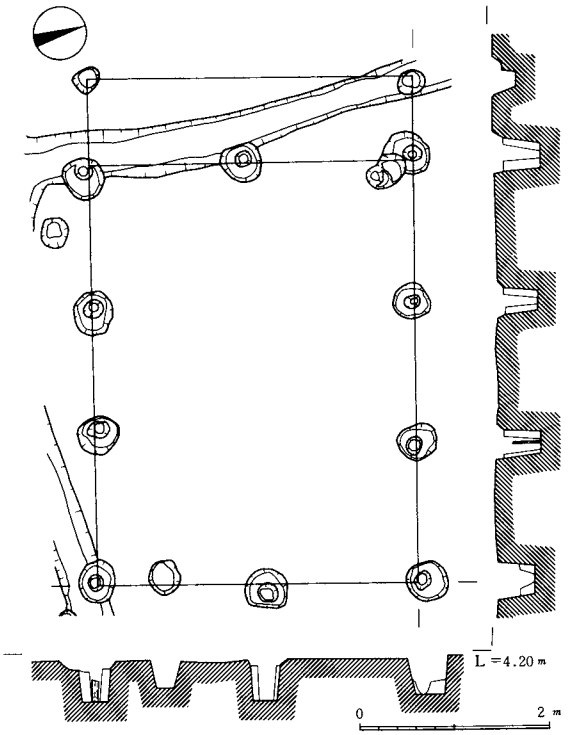
～40 cm である。柱根は桁東柱列北第3柱穴で残存する。柱穴覆土は掘方埋土が地山土を主体に若干の黒褐色土を混じえる濁黄灰色土、柱痕部が黒褐色土である。

6号建物　C－1区。3間（4.4 m、4.5 m）×2間（3.5 m）の東西棟（東偏16°）。柱間寸法はややばらつきがある。柱穴掘方は径約40 cm の円形、柱痕跡は径15 cm 前後、検出面からの深さは40～50 cm 前後である。柱根は桁北柱列東第2柱穴と桁南柱列東第1柱穴に残存している。覆土は1号建物と同様である。南北桁柱列の西側延長線上にはそれぞれ柱穴があり小規模な廂とみられ、28号溝はその雨落溝と考えられる。

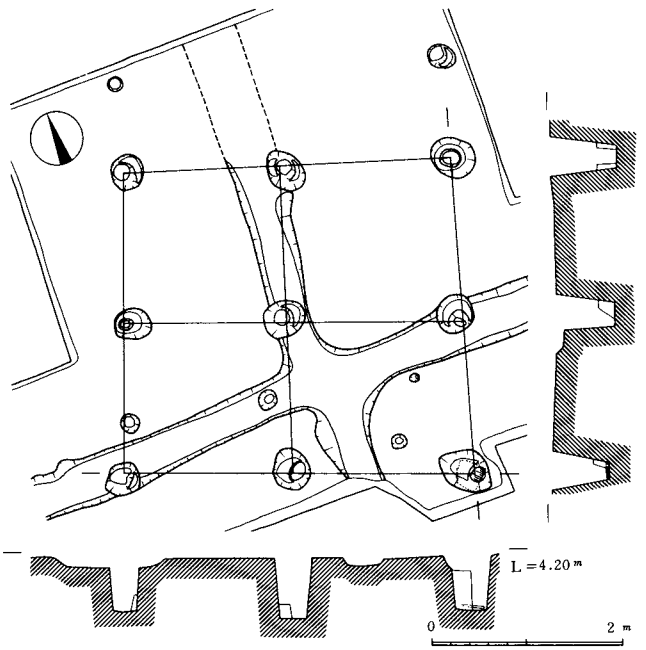
9号建物　B西拡張区。2間×2間の建物（東偏16°）で北列3.5 m、西列3.2 m、南列3.7 m、東列3.4 m とややゆがみがあるが柱筋は揃っている。柱間は各柱列ごとに等間である。柱穴掘方は径40 cm の円形、柱痕跡は20 cm 前後、検出面からの深さは約60～70 cm である。柱根は残存しないが、東南隅の柱穴に礎板が残る。覆土は1、6号建物と同様である。柱穴掘方が径のわりに深く礎板を使用していること、形態等から有床の倉庫と考えられる。北側には6号建物と同様の廂の可能性をもつ柱穴がある。

その他の遺構と遺物

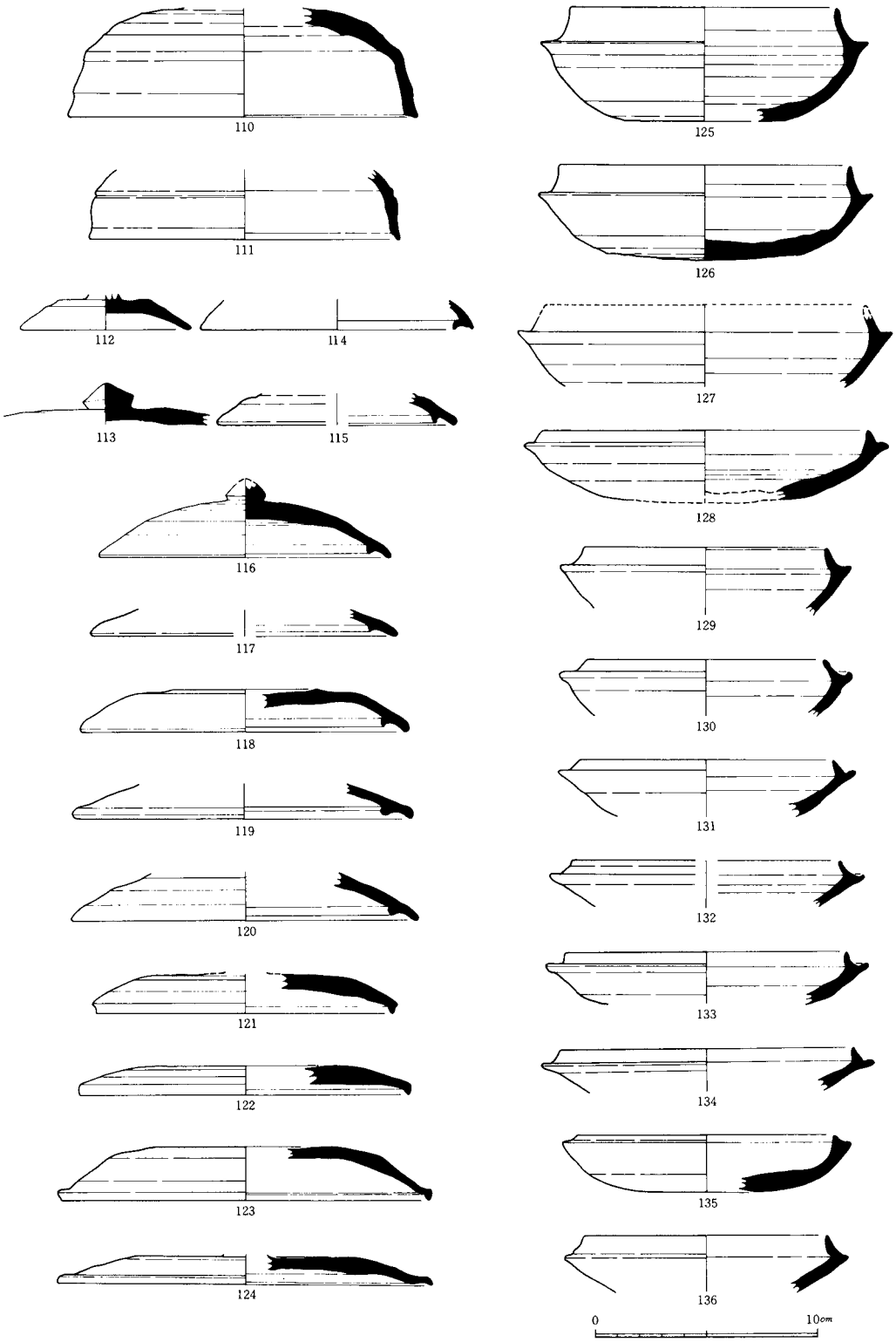
10号土坑　B・C－1区。径約120 cm の略円形、深さ約30 cm、覆土は



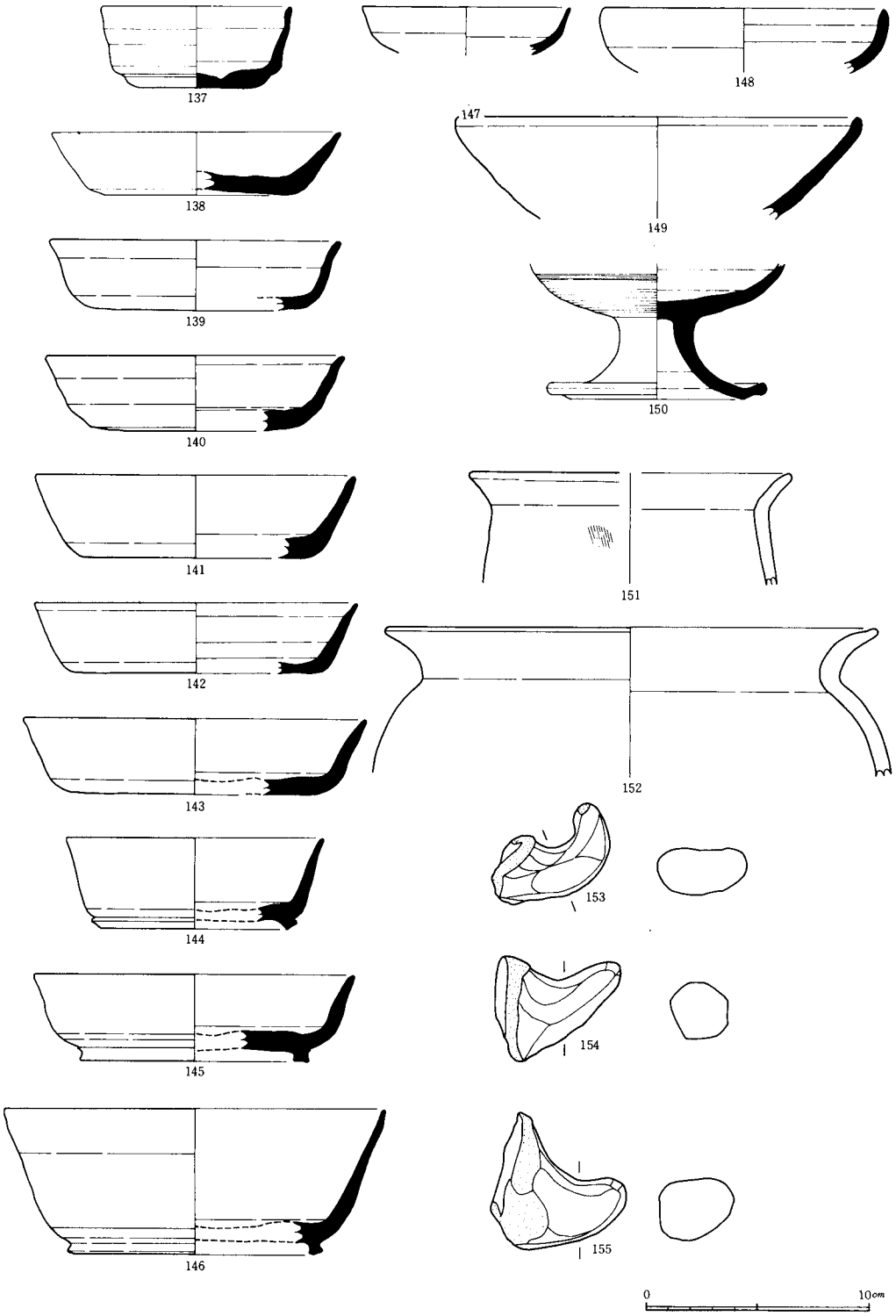
第22図　6号建物実測図



第23図　9号建物実測図



第24図　Ⅰ期の土器(123･124を除く)　包含層(1)



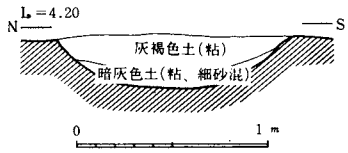
第25図　Ⅰ期の土器 包含層(2)

地山土を主体とした濁黄灰色土でレンズ状に凹んだ中央部は黒色土である。遺物は上層より土師器小片が若干出土したにすぎない。

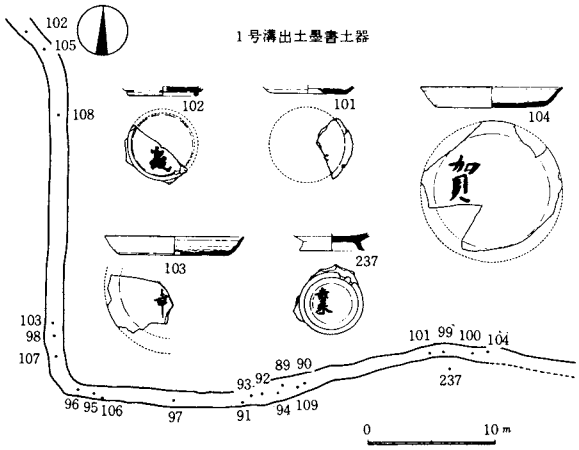
1号柱列　B・C－3区～C－4区。6間（17.5 m）の東西柱列（東偏15°）。柱間寸法は2.8～3.1 m、柱穴掘方は20×35 cm前後の長方形、覆土は黒褐色土である。柱は幅15 cm、厚さ5～10 cm程度の板状材と推定される。

2、3、6号柵　1、6号建物の周囲でそれらと主軸方向を同じくする小柱穴列である。6号柵の柱穴は一辺20 cmの方形を呈する。

遺物　各区の包含層から、7世紀代を中心に6世紀前葉～8世紀前葉の土器が出土している。



第26図　1号溝土層図(D－4区)



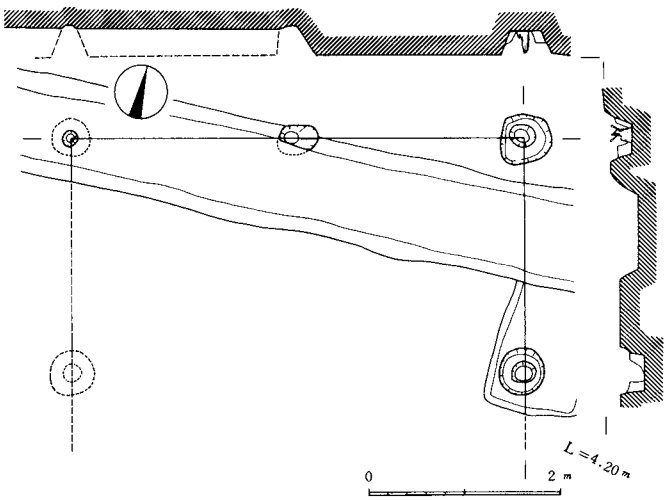
第27図　1号溝遺物出土地点図

第3節　II期の遺構と遺物

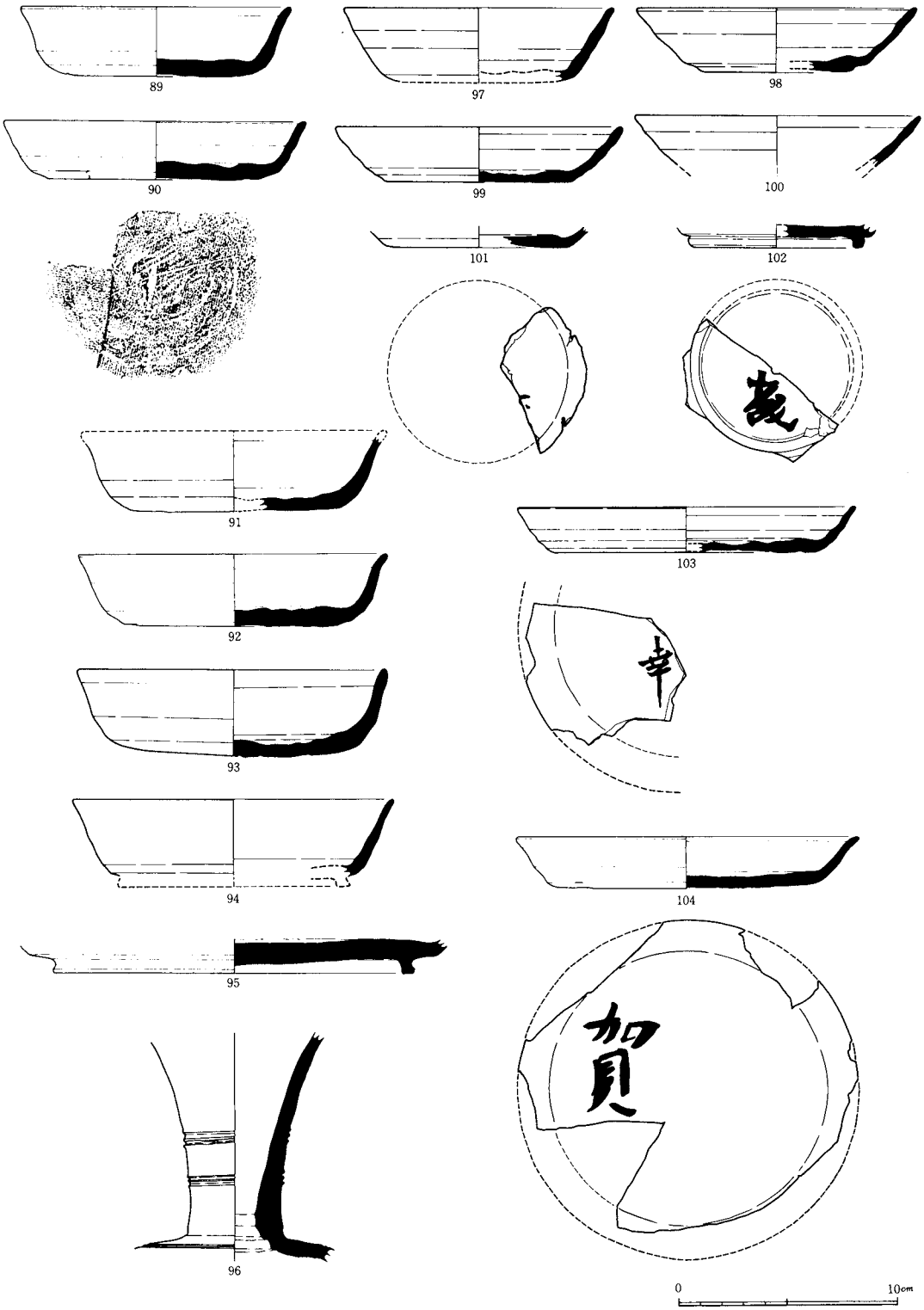
以下に述べるのはII期のものと時期不明ながら柱穴覆土の色調、遺構の切り合い関係などからIII期以前に遡ることの明らかなものである。

1号溝　D－7区から西流し、D－3区で直角に折れ北上してA－3区に至る。幅約1～1.5 m、断面は舟底状を呈する。覆土は下層が細砂混りの暗灰色土、上層が灰褐色土である。東端部は本来さらに東方へ延びていたものであろう。

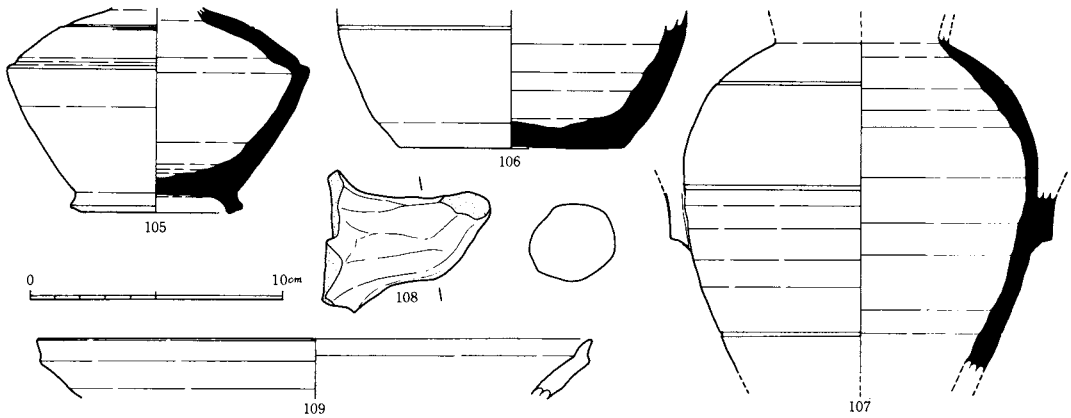
遺物は上下両層から出土したが、層位、地点によって時期差がある。89～96はD－3～5区の下層でも底に貼りついたような状態で、他は分散して上層から出土した。前者は8世紀前葉



第28図　8号建物実測図

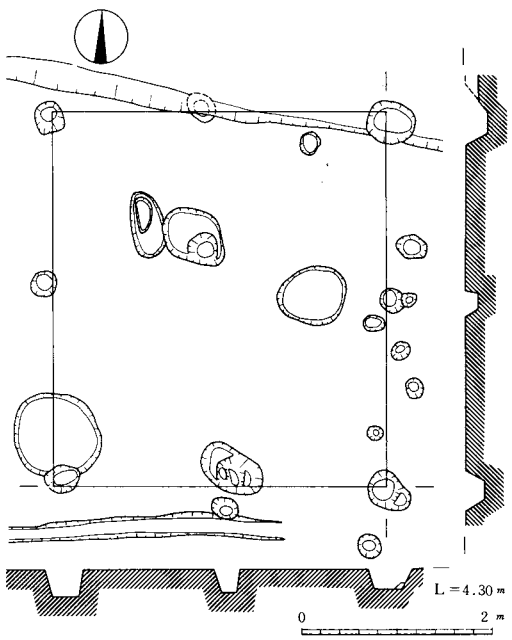


第29図　Ⅰ～Ⅱ期の土器　1号溝(89～104)



第30図　Ⅰ～Ⅱ期の土器 1号溝(105～109)

で当溝の築溝時期を、後者は9世紀後半(Ⅱ期)～10世紀前半(Ⅲ期)でその存続、廃絶時期を示すものと考えられる。墨書土器は溝内から4点(「幸」「賀」ほか)、溝そばから1点(「吉来」)が出土しており、字句は吉祥句とみられるもの、時期はいずれも後者である。築溝後の改修等は明確にできなかったが、同じ位置で200年以上に亘って存在したとみることができ、D－3区で直角に折れる点も方位、地割等に規制を受けたことが窺われ、当溝の性格を暗示しているようである。D－4区～B－3区には溝の北東辺に接して7号柵(Ⅲ期)が存在する。



第31図　10号建物実測図

8号建物　E－4区。1間以上×2間(4.8m)の南北棟(西偏14°)。柱間寸法は桁行2.5m、梁間は2.4m等間である。柱穴掘方は径約50cmの円形、柱痕部は約20cm、検出面からの深さは25～30cmである。柱痕は東南隅柱穴に残存し、径20cmを測る。覆土は掘方埋土が地山土を主体とした濁茶褐色土、柱痕部は暗茶褐色土である。東桁列の延長上北側には小柱穴1がある。

10号建物　B－4・5区。2間(4.0m)×2間(3.5m)の南北棟(西偏1°)。柱間寸法はばらつきがある。柱穴掘方は25～50cmの円形、検出面からの深さは15～30cmである。覆土は黒

褐色～茶褐色土である。全般に柱穴は浅く建物とするには若干疑問が残り、時期についても不明である。

7号柱列　A・B－5区。南北方向（西偏 3°）で4間（9.0 m）を確認している。柱間寸法は北から3.2 m、3.2 m、2.6 m、柱穴掘方は径25～30 cmの円形、検出面からの深さは20～30 cmである。覆土は黒褐色～茶褐色土である。同じ位置で3回の建て替えを行っている。時期は不明。

2号柱列　B－0～2区。6間（13.8 m）以上の東西柱列（西第4柱穴までは西偏8°、以東は西偏12°）で柱間寸法は3.1、3.0、2.7、2.1、1.5、1.4 mである。時期は不明であるが、柱穴の形態、規模、覆土等は1号柱列と同様のものであり、I期の可能性が強い。

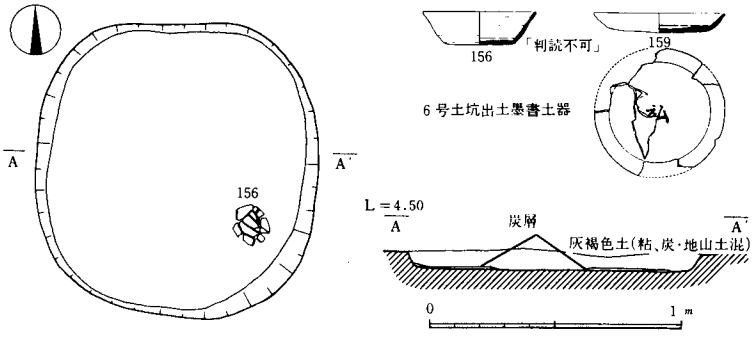
小ピット群　C・D－4～6区には径10～20 cm前後で、深さ10～20 cmの黒褐色～茶褐色土を覆土とする小ピット群が存在する。出土遺物はほとんどなく、配置も無秩序にみえ、柱穴とは考えがたい。覆土が黒っぽい色調を呈するという点でI～II期のものと推定したが、自然の立木群が腐った穴とすれば色調のみから判断することはできず、III期建物群や周辺の付属遺構との配置関係を考えるならばかえってその時期に帰属せしめたほうが良いようにも思われる。

II期の遺物の出土量はさほど多くはないが、1号溝と8号建物の東辺部に散在しており、調査区南側にその中心を持つものであろう。

第4節　III期の遺構と遺物

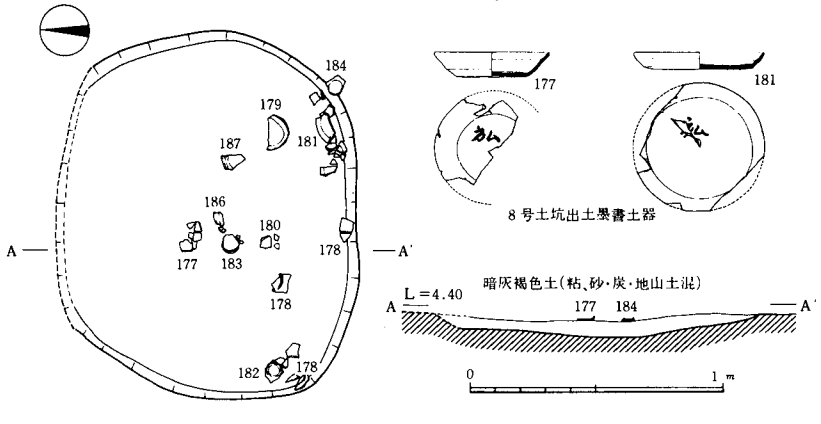
6号土坑　B－5区。一辺115 cmの隅丸方形、検出面からの深さ10 cmを測る。覆土は地山土を主体にした灰褐色土で底に薄く炭層があり、意識的に埋められたものである。

遺物は須恵器杯a（深身のもの）、杯b、盤、椀、土師器有台椀、甕底部片がある。墨書土器は二次焼成を受けた156「判読不可」、内面が墨溜として利用された159「払」が出土している。



第32図　6号土坑平面図、土層図

8号土坑　B－6区。

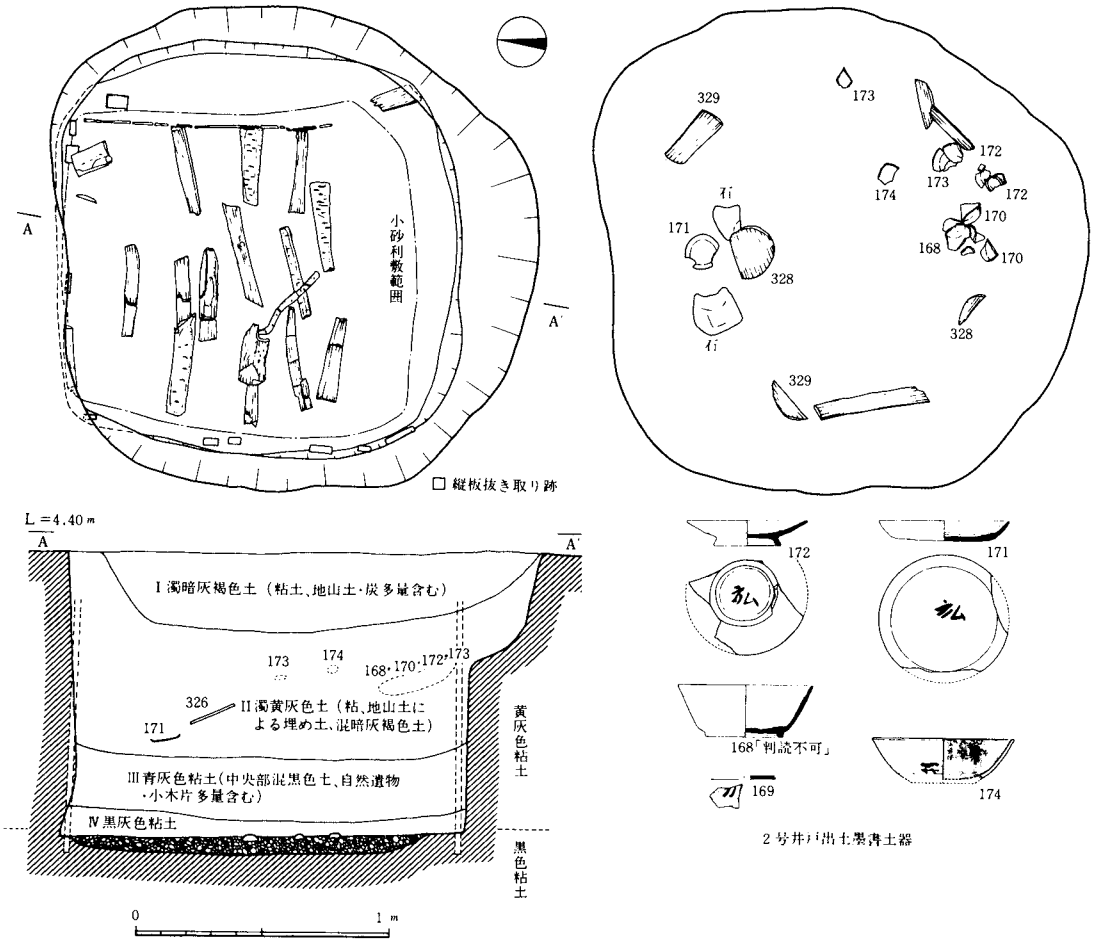


第33図　8号土坑平面図、土層図

150×120 cm の不整楕円形、検出面からの深さ 10 cm を測る。覆土は下層が暗灰褐色土、断面図では削平されているが上層は地山土を主体にした灰褐色土で、６号土坑同様意識的に埋められたものとみられる。

遺物は両層の間で出土し、須恵器蓋、杯ｂ、有台杯、盤、有台皿、土師器椀、黒色土師器有台椀（分類可能）、土師器甕ａ（小型）、甕ｂがある。墨書土器は 177「㐅」、181「㐅」の２点が出土している。

２号井戸　Ｃ－７区。上面は一辺 190 cm の不整隅丸方形、底は一辺 160 cm の隅丸方形を呈する。検出面からの深さは 120 cm を測る。壁は北側で直立し、南側では上位に段をもつ。地山は検出面より 110 cm で黄灰色粘土から黒灰色粘土に変わり、井戸底はそれを若干掘り込んだ程度で砂層にまでは達していない。井側材は東南隅で壁際に縦板１枚が残り、各辺にも壁に沿ってその痕跡が残っている。支柱が存在したかは不明であるが、方形縦板組横桟どめの構造と推定され、140×150 cm を測る。井側材内部の底には、140×130 cm の範囲に厚さ 5 cm 程度に径数cm の小砂利が、炭化した樹皮を残す桜の枝、角材とともに敷きつめられている。これは水の浄化施設と考



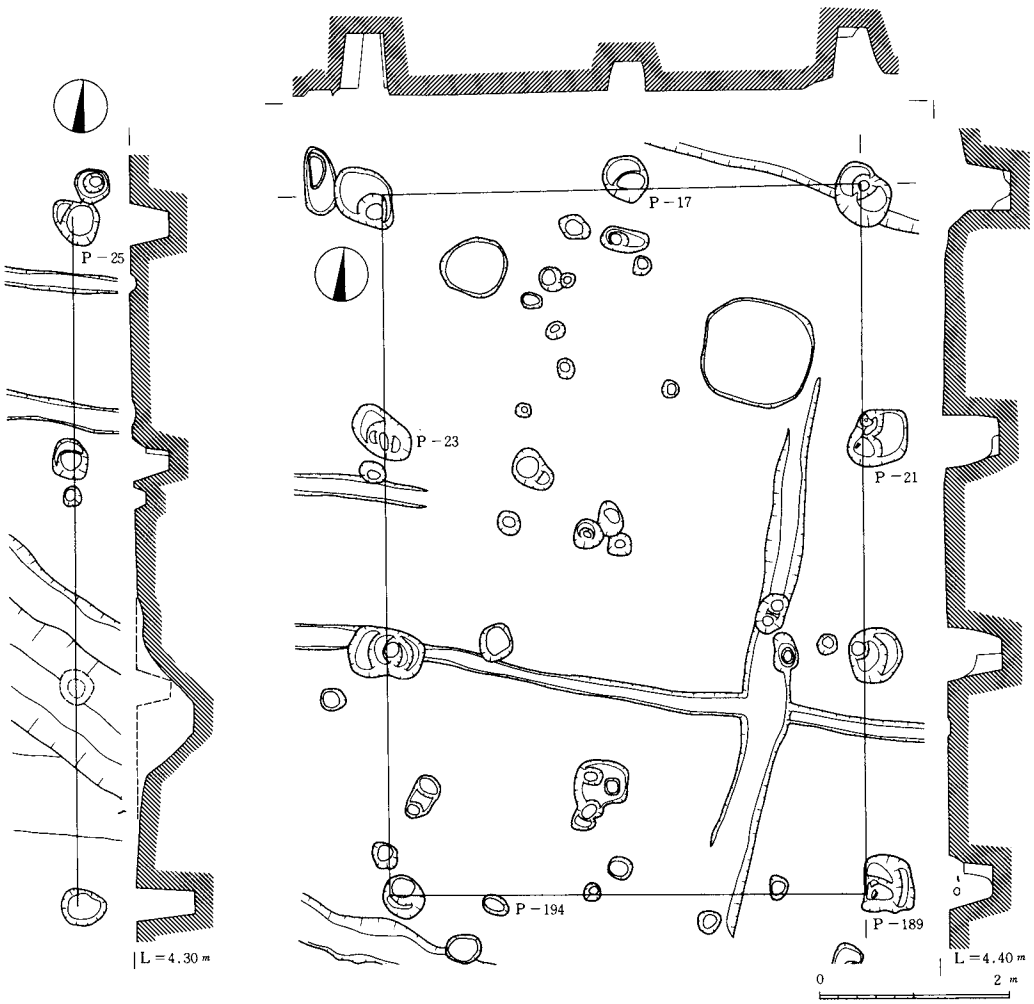
第34図　２号井戸平面図、土層図、遺物出土状態図

えられ、類例は小松市漆町遺跡金屋ヤシキダ地区509号井戸[7]（10世紀前半）にみられる。掘削深度が湧水層に達していないことや底部施設から考えて、溜め井戸的な機能のものと思われる。

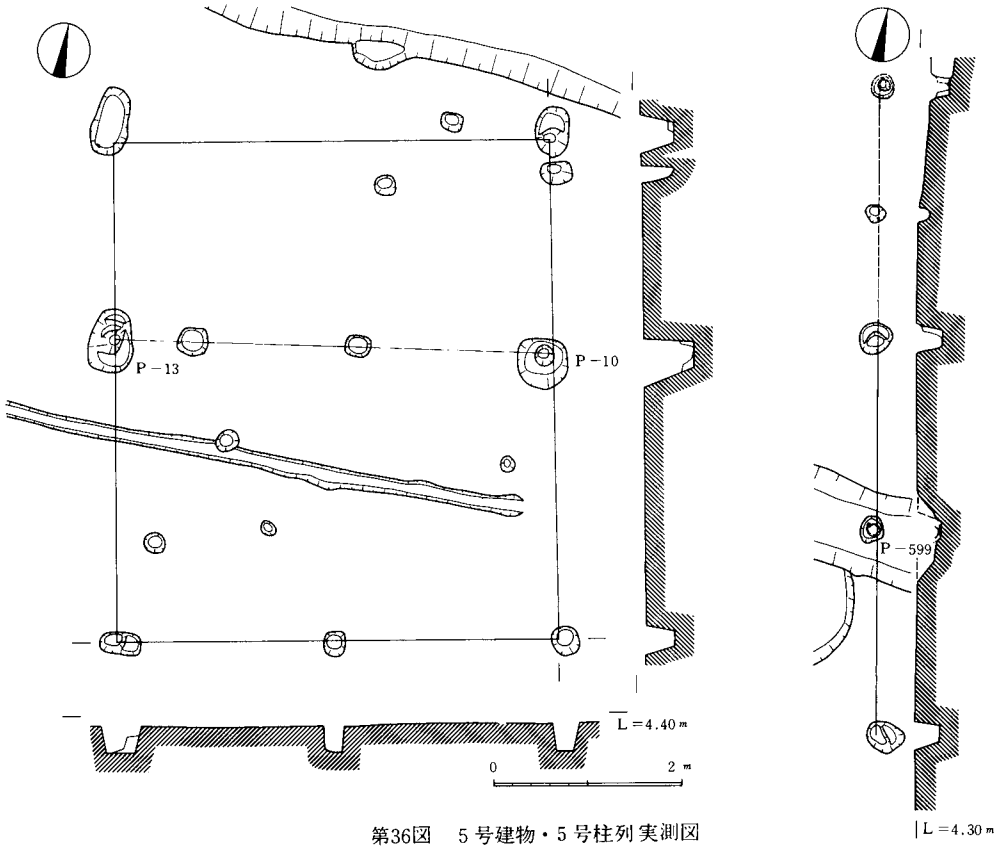
覆土はⅣ層が黒灰色粘土、Ⅲ層が黒灰色粘土混じりで小木片、自然遺物を多く含む青灰色粘土、Ⅱ層が地山土を主体にした濁黄灰色土、Ⅰ層が炭を多量含む濁暗灰褐色土である。Ⅲ・Ⅳ層は使用時の自然堆積、壁の崩落土、Ⅱ層は廃棄時の一括埋土、Ⅰ層はその後の陥没流入土とみられる。

遺物はⅣ層礫上で須恵器蓋（163）、口縁端部外反ぎみとなる黒色土師器椀の破片、Ⅱ層で完形品を中心に一括投棄の状態で出土した須恵器有台杯（168）、盤（170・171）、有台皿（172）、椀（小片）、黒色土師器椀（173・174）、曲物底板（328・329）、人頭大の石2個、Ⅰ層で須恵器蓋（164）、杯b（165～167）、盤（168）、黒色土師器椀（175）などが出土している。墨書土器は168（墨溜のため判読不可）、169「払」、171「払」、172「払」、174「利」がある。

4号建物　B－4・5区。3間（7.2m、7.5m）×2間（5.2m）の南北棟（西偏7°）。南梁列は小柱穴3個を内部におき入口部を想定できる。柱間寸法はばらつきがある。柱穴掘方は50～70

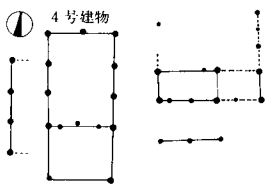


第35図　4号建物・4号柱列 実測図



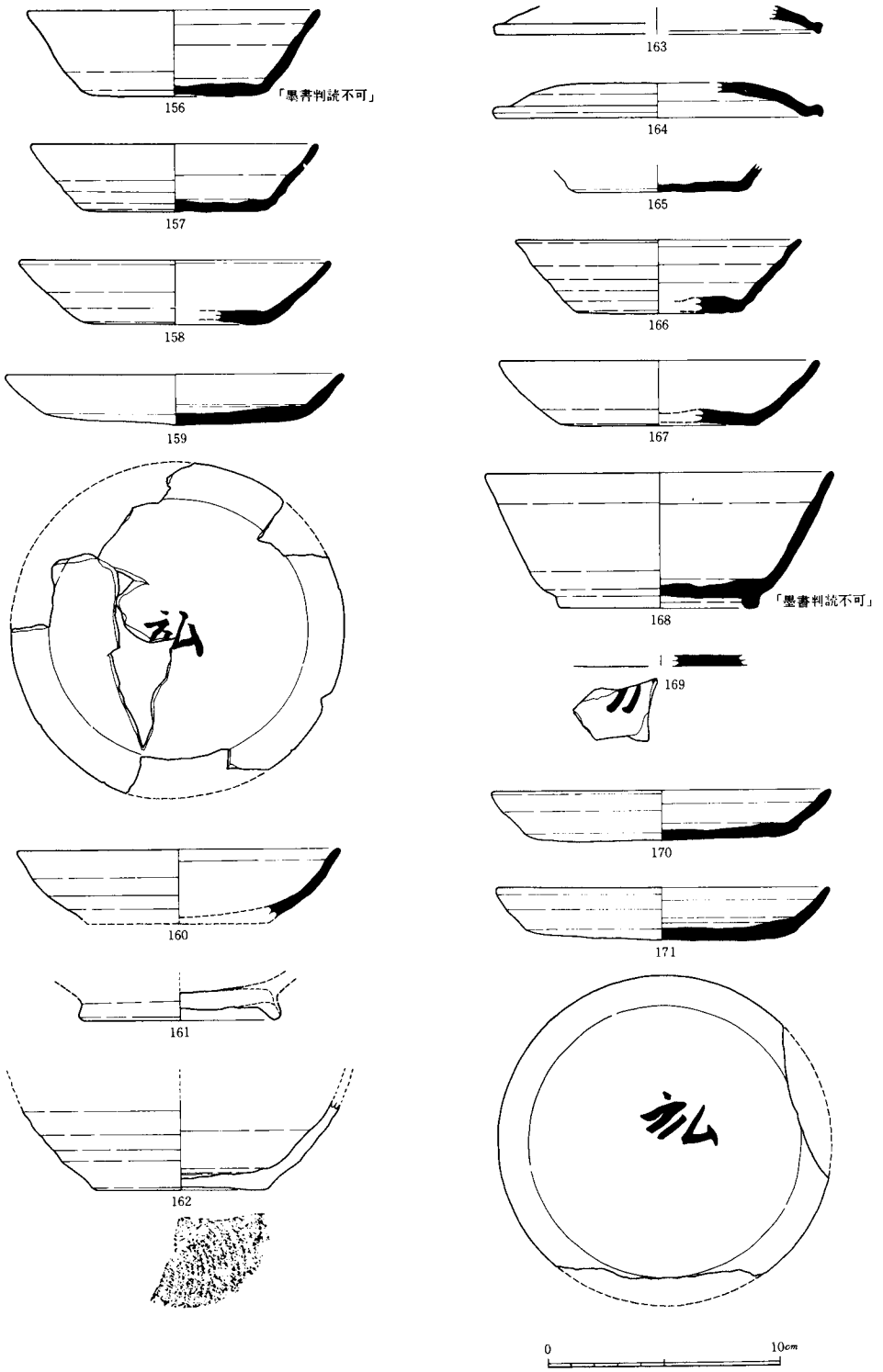
第36図　5号建物・5号柱列実測図

cmの不整形、柱痕跡は径20～30 cm、検出面からの深さは50～60 cmである。覆土は掘方埋土が地山土を主体に茶褐色土を混じえる濁茶灰色土、柱痕部が暗茶灰色土である。柱の抜き取り跡が確認でき、地山土によって埋められている。遺物は柱抜き取り後の暗茶灰色土上位に、埋納したとみられるものがP－189、21、194で出土している。P－21出土の盤小片は6号土坑の159と接合する。

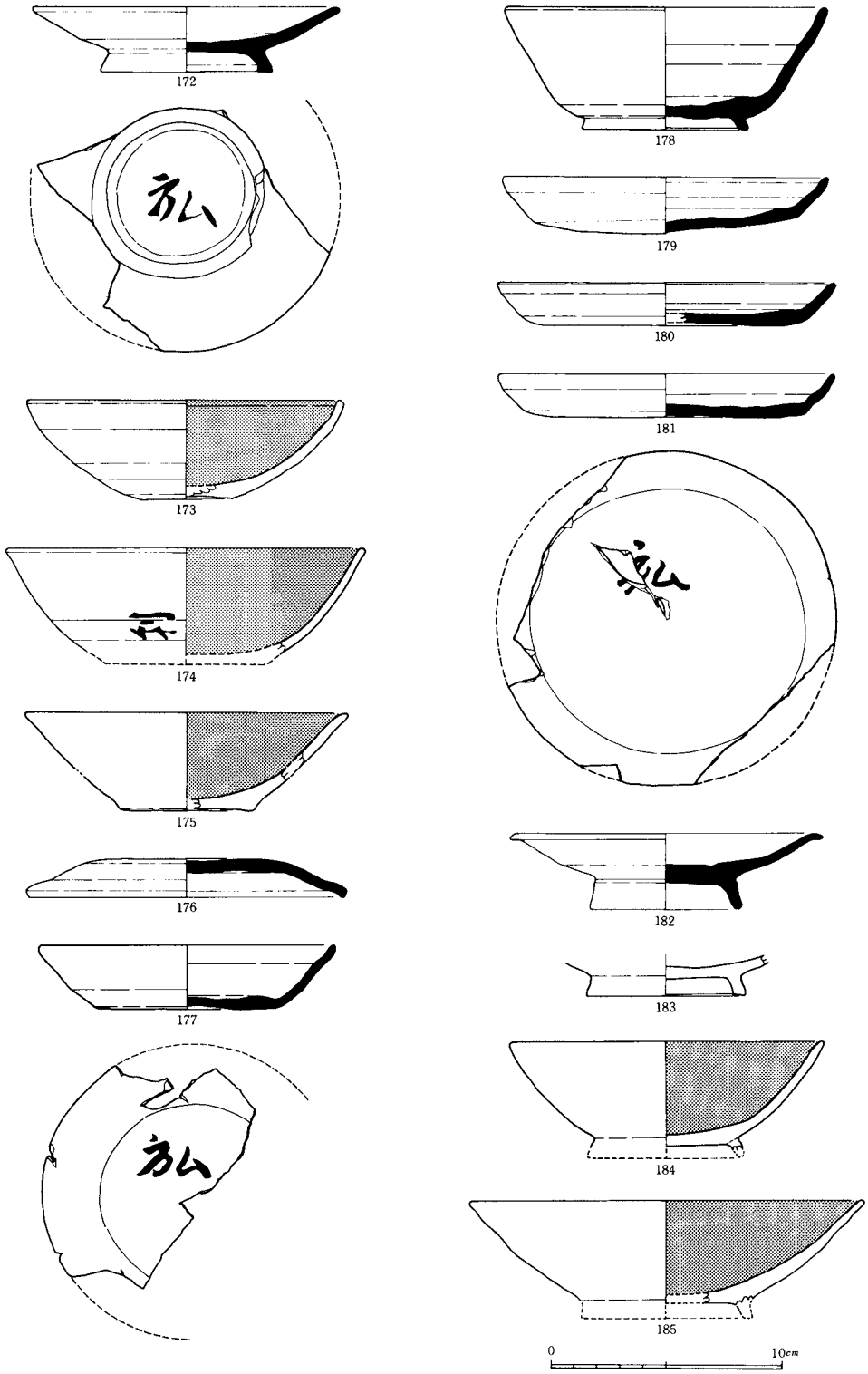


4号柱列　B・C－4区。3間（7.2 m）の南北方向（西偏7°）で柱間寸法はほぼ等間である。柱穴掘方は40～50 cmの不整形、柱痕跡は径約20 cm、検出面からの深さは40～60 cmである。覆土は4号建物柱穴と同じで、柱抜き取り後地山土で埋められている点も同様である。遺物はP－25より墨溜に利用された盤（199）が出土している。当柱列は4号建物の西2.8 mにあり、建物と柱穴位置、主軸を揃えることから、その付属施設と考えられる。

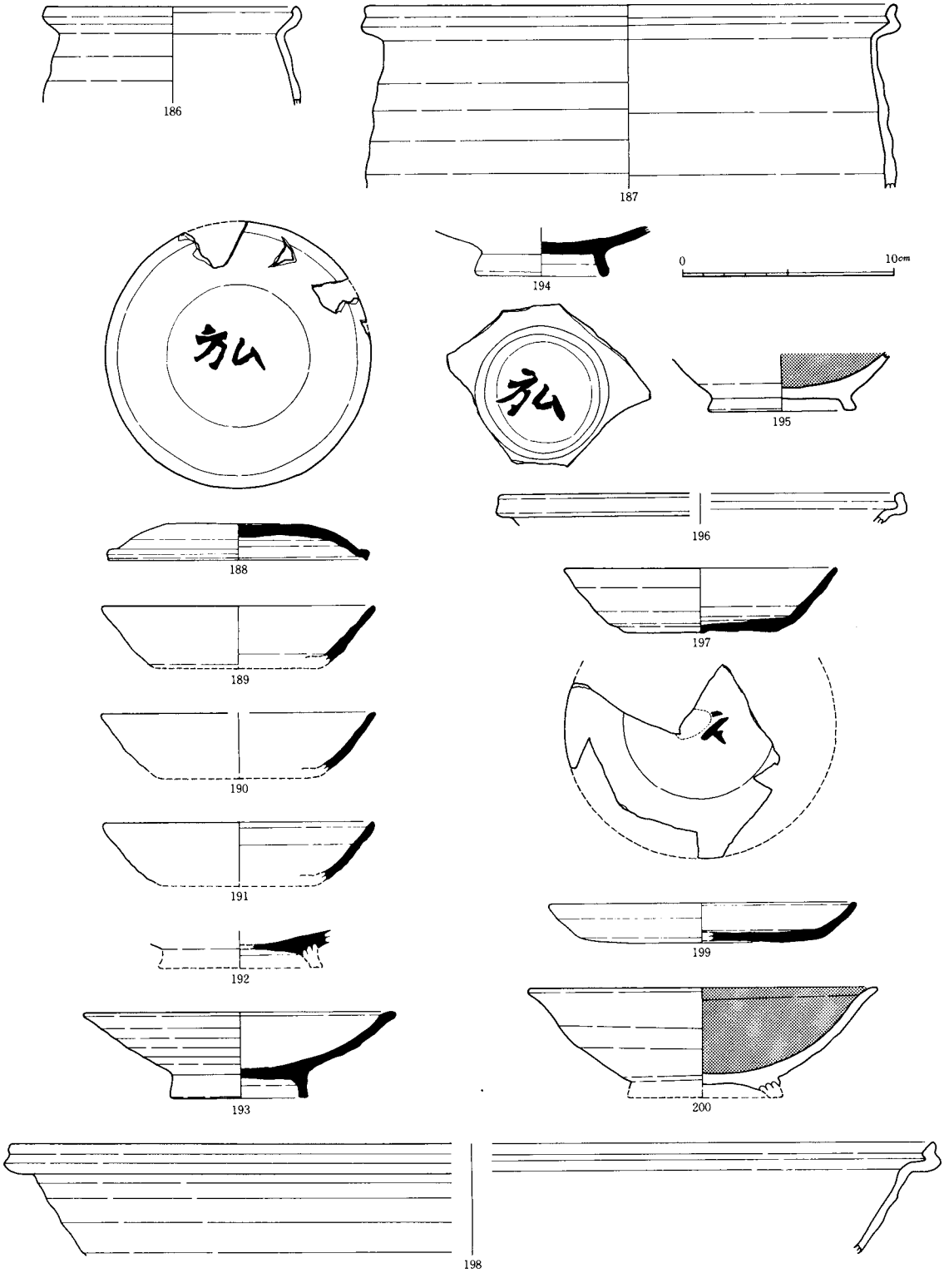
5号建物　B－5・6区。2間（5.3 m）×2間（4.7 m）の南北棟（西偏9°）。柱間寸法はばらつきがある。柱穴掘方は不整形で南梁柱列が20～30 cmと小規模、他は50～70 cm、柱痕部は前者が10～15 cm、後者が15～20 cm、検出面からの深さは前者が25～30 cm、後者が40～60 cmで



第37図　III期の土器　6号土坑(156～162)　2号井戸(163～171)



第38図　Ⅲ期の土器　２号井戸(172～175)　８号土坑(176～185)



第39図　III期の土器　8号土坑(186・187)　4号建物(188～196)
5号建物(197・198)　4号柱列(199)　5号柱列(200)

ある。覆土は4号建物と同様で後者は柱抜き取り後に地山土で埋められている。遺物はP—13で墨書土器杯b（197）が出土している。建物の規模については、南梁柱列の3柱穴が貧弱であることから、2間（4.6m）×1間（2.3m）の東西棟と付属する柵ないしは廂と考えることもでき、その場合南北柱列は4号建物の桁第2・3柱穴と揃うことになる。

5号柱列　B—6区。2間（4.2m）以上の南北方向（西偏11°）で柱間寸法は等間ではない。柱穴掘方は30～35cmの不整形、柱痕部は径10～15cm、検出面からの深さ約30cmである。覆土は4号建物と同様でP—599とその南の柱穴が地山土で埋められている。本柱列は5号建物の東3.4mに位置し、それに付随するものであろうが、両者の柱抜き取り後に埋め戻しを受けた柱穴のみを抽出すれば、8.0m×2.3mの東西に細長い建物を想定することも可能である。遺物はP—599の柱痕部で須恵器甕胴部片（246）とその上に黒色土師器有台椀（200）が出土した。

前後するが4号建物東桁列の南の延長上4.1mにも須恵器甕胴部片（246）を含み埋め戻しを受けた柱穴があり、4・5号建物の構造については柱列の理解とあわせて不確定要素の多いものであることを付記しておく。右図はその参考例である。

その他の遺構

1号柵　B・C—7区。19号溝を南限として南北方向（西偏6°）に延びる（15.5m以上）もので柱穴は一辺約25cmの方形、検出品からの深さは20～30cm、覆土は茶灰色土である。建物群敷地の東辺部を限る柵であろう。

2号柵　A～C—8区。16号溝に東接し南北方向（南半部西偏3°、北半部東偏12°）に延びる（18m以上）もので柱穴規模、覆土とも1号柵と同様である。P—62・65で東西方向の板状柱材（326）が残存する。

7号柵　B～D—3区、D—4区。1号溝に東接して延びる（約26m以上）もので、柱穴は7地点で各1～3個存在し、20～25cmの方形ないしは円形、検出面からの深さは10～20cm、覆土は1号柵と同様である。

1号溝　前述のとおりでIII期まで存続するものである。

19号溝　C—6・7区。2号井戸、1号柵の南で東西方向（東半部西偏約8°～10°）に存在し、幅70cm、検出面からの深さ約5cm前後を測る。覆土は灰褐色土である。出土遺物には須恵器甕胴部片（246）1点などがある。1号溝とともに建物群敷地の南辺部を限るものであろう。

16・18号溝　B～D—8区。ともに幅35～40cm、検出面からの深さ5～10cm、覆土は細砂を含む灰褐色土である。両溝は幅約3mで平行し南北方向（東偏5°）にのびるもので、その間を「道」に想定できる。

1～5号土坑　B・C—4～6区。1.4～1.8m×0.7m前後の長方形、検出面からの深さは5～15cm、覆土は地山土を主体とした灰褐色土である。底が平担で、覆土は埋土とみられる。出土遺物は土師器小片が若干あるにすぎない。4、5号建物の南側縁辺部に存在し、その配置関係から建物群に付属したものと推定できるが性格については不明である。

小ピット群　前述のとおりで、III期建物群と1号溝にはさまれた30×15mほどの空間に、東西

帯状に分布するものである。仮にIII期に帰属するものとした場合には、その「屋敷森」と考えることもできる。

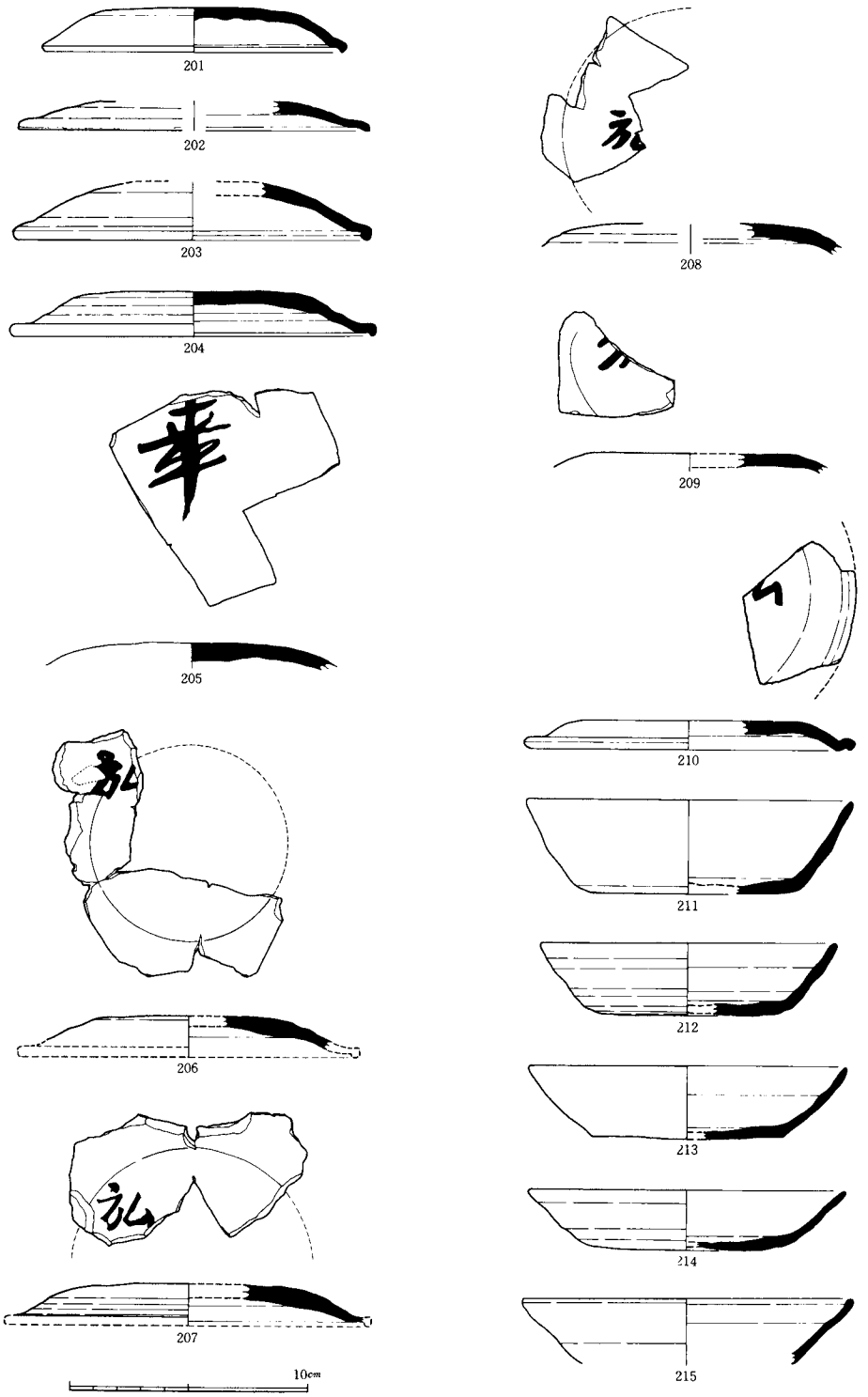
包含層出土土器

III期の遺物はB～D－4～7区を中心に出土しており、なかでもB－5・6区に集中する。それは遺構の分布状況に符合している。

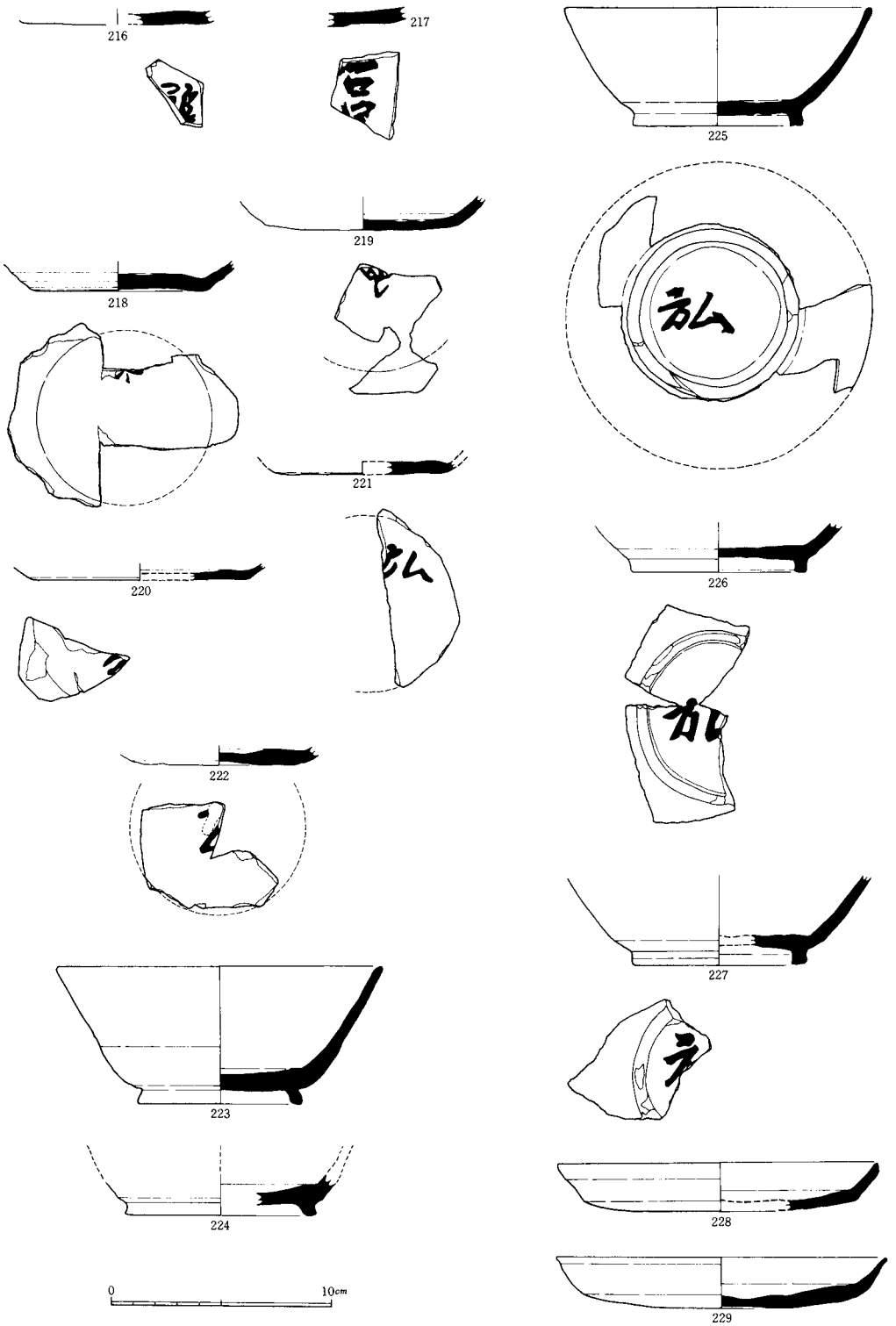
須恵器　器種は蓋、杯、有台杯、盤、椀、有台椀、有台皿、直口壺、小壺、双耳瓶、大甕、鉢がある。蓋はすべてつまみのないもので、口径12.5cm前後の小型品a類（201・210）と14～15cm前後の大型品b類がある。杯は器高の高いa類（211）と低いb類がある。有台杯は体部が直線的にのびるが若干内湾ぎみのもの（225）もある。椀は底部回転糸切りの後に体部下位と底部縁辺を回転ヘラケズリしたもので、体部の器肉は一般に薄手である。有台椀は前記椀の手法に高くふんばった高台を付すa類（223）と回転ヘラケズリを用いず太く低い高台を付し器肉の厚いb類（224・225）がある。有台皿は大きくふんばった高い高台を付し、体部下半の腰に張りを持つものである。245は小片であるが陶硯の一部とみられる。

灰釉陶器　椀の体部片（256）1点がある。

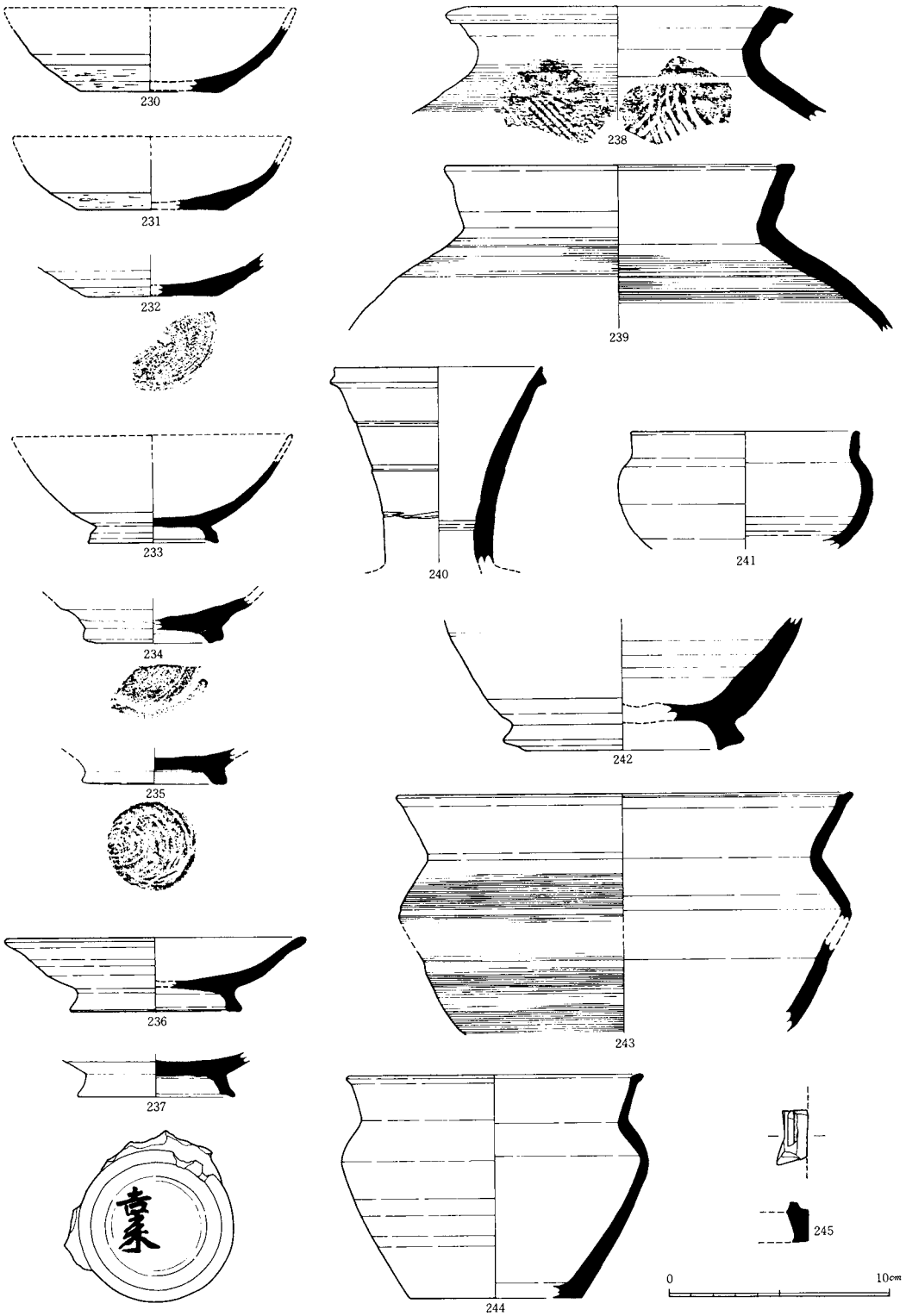
土師器　器種は椀、有台椀、有台皿、甕、堝がある。有台椀・皿（249～251）は高台が概して高くふんばったもので、高台貼り付け前に底体部境に回転ヘラケズリを行っている。内面黒色土師器は椀、有台椀がある。土師器椀皿類は形態にバラエティーがあるものの総量も少なく小片がほとんどのため分類しえない。甕は口縁部が受口状となる小型品a類とS字状の大型品b類(252)がある。堝は内傾した受口状となる口縁端部を強くナデて面をもつもの（253～255）である。



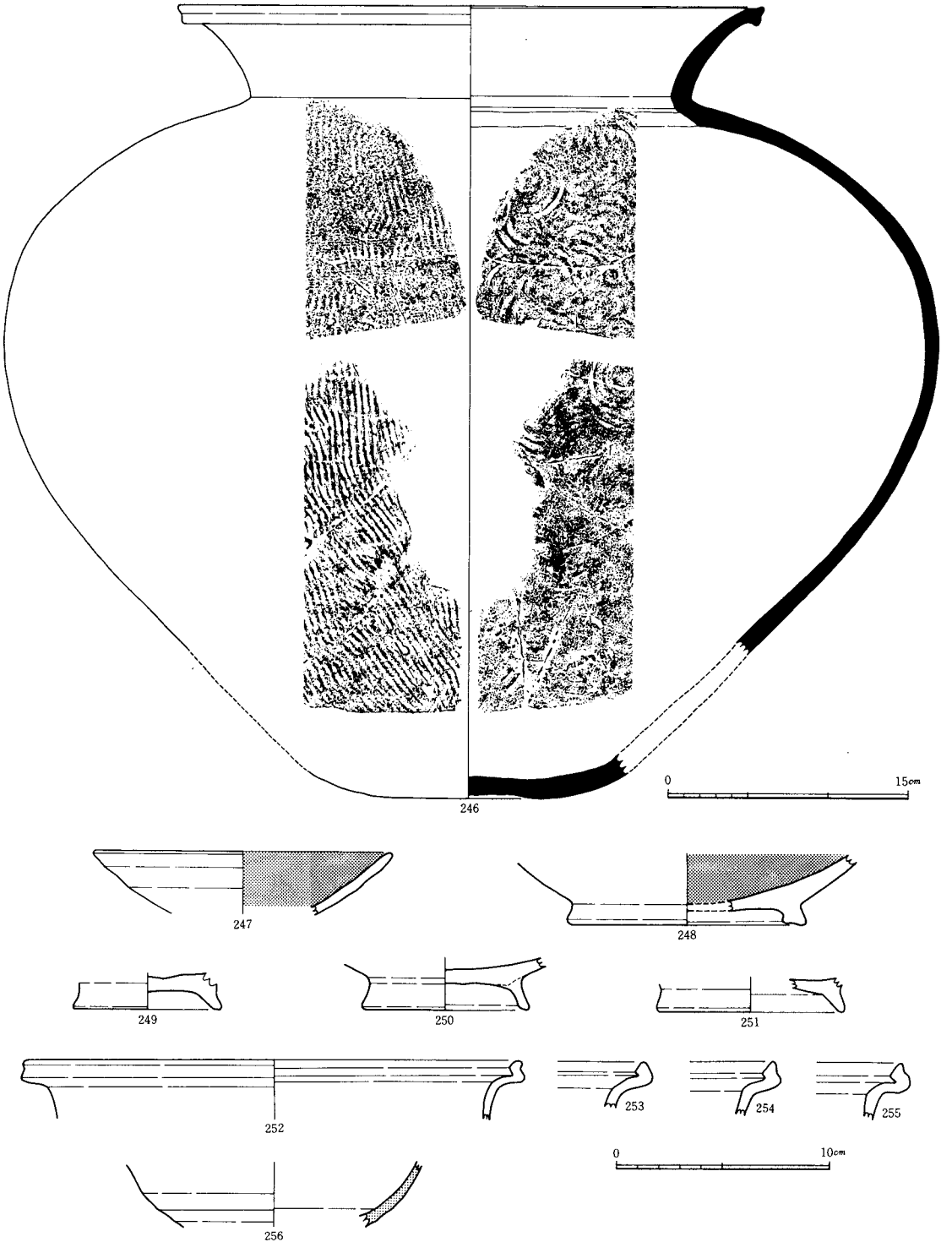
第40図　III期の土器 包含層(1)



第41図　III期の土器 包含層(2)



第42図　III期の土器　包含層(3)



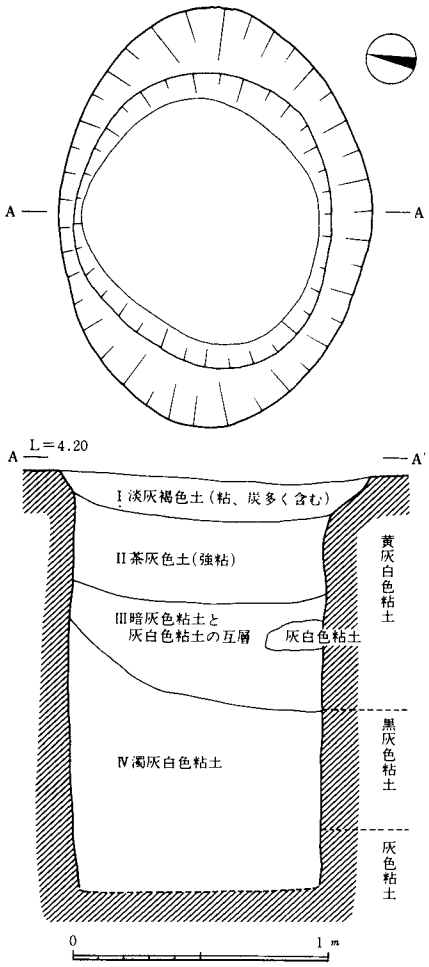
第43図　III期の土器 包含層(4)　246は1/4

第5節　IV期の遺構と遺物

1号井戸　B－2区。上面は165×120 cmの楕円形、内部は径約100 cmの円筒形を呈する。検出面からの深さは165 cm以上を測る。地山は検出面から約90 cmで黄灰白色粘土から黒灰色粘土、約140 cmで灰色粘土に変わっている。掘方は灰色粘土層を掘り込んだ地点まで確認しているが、その下部は壁の崩落の危険性があり、調査できなかった。井側材は残存せず構造については不明である。

覆土はIV層が濁灰白色粘土、III層が暗灰色粘土と灰白色粘土の互層でともに地山土を主体とした埋土である。II層は茶灰色土、I層は炭を多量に含む淡灰褐色土である。

遺物はII層下位で264、265が、III層は木片、自然遺物を多く含み棒状木器、曲物断片、トチの実2点などが出土している。



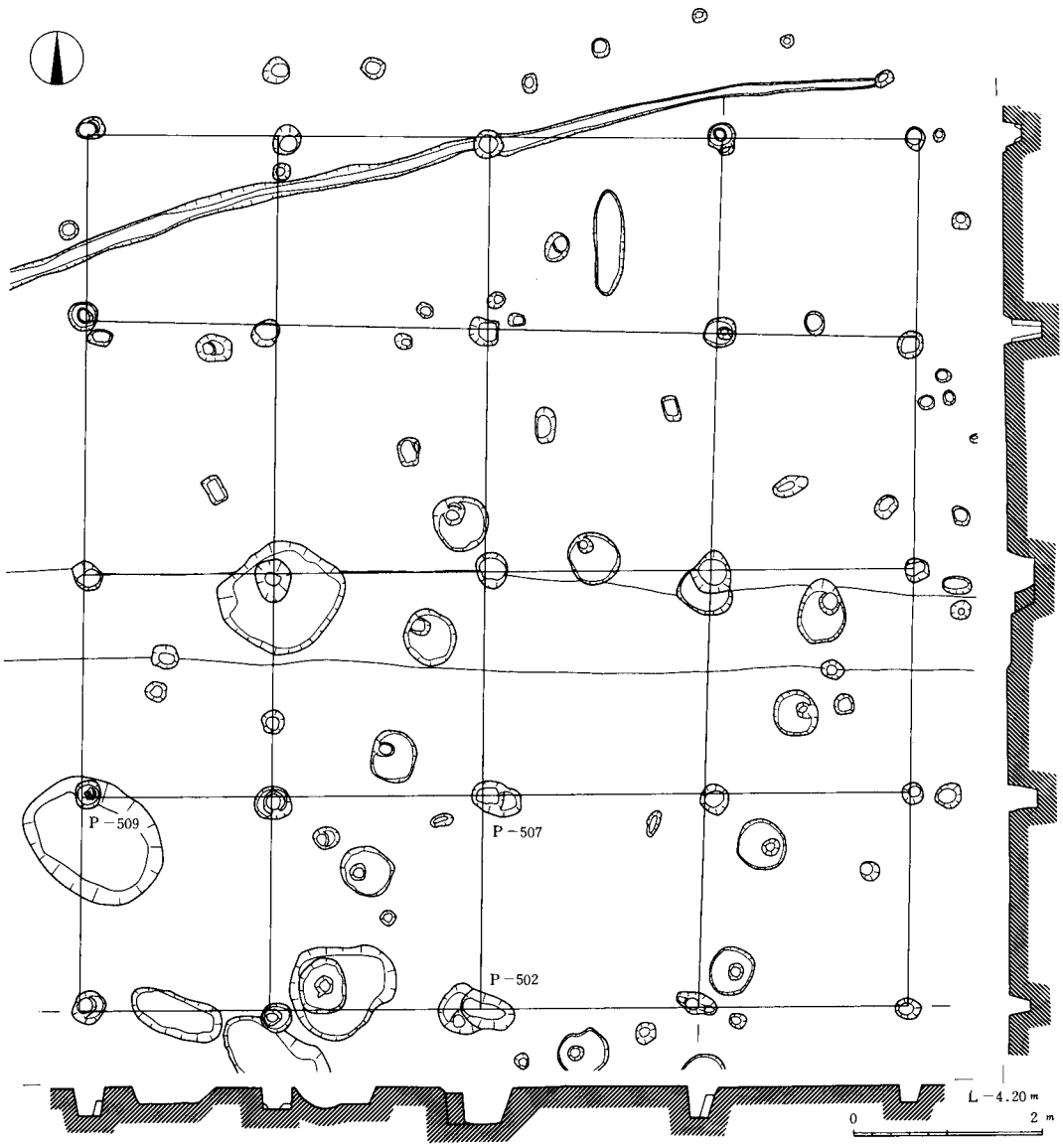
第44図　1号井戸平面図、土層図

区画溝　A～C－3区以西にみられるIV期建物群を区画している溝である。検出面で幅50～80 cm、深さ10～20 cmを測る。覆土は淡灰褐色である。遺物は各溝から土師器小皿等（266～269）が出土している。

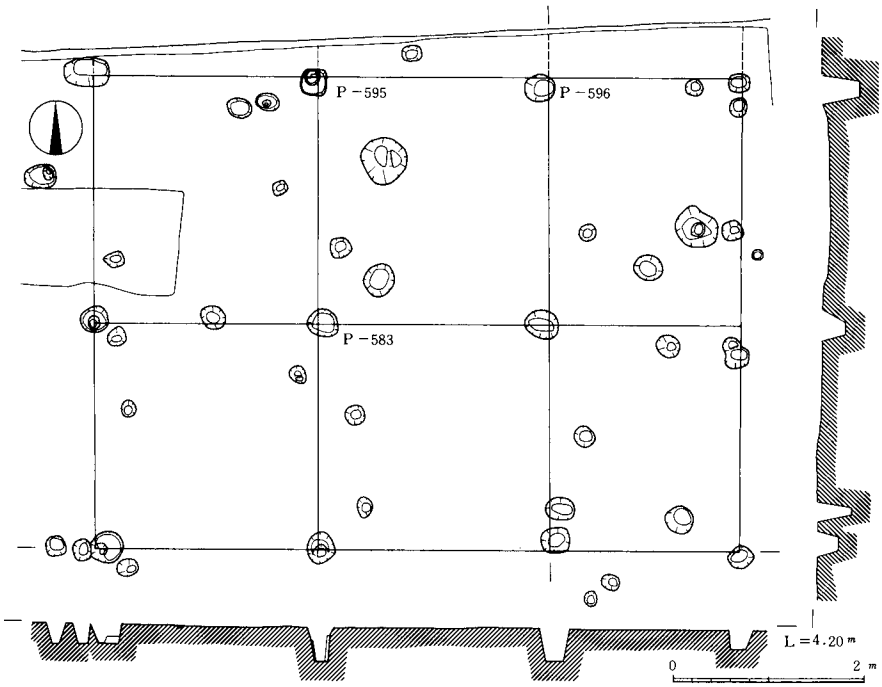
区画溝の広がりは、北方でその範囲確認調査を実施したところ第52図のとおり検出されている。9区画が確認され、その北は復元された条里の坪境（旧農道）に接しており、さらに北は地形的にみて存在の可能性は薄く、西方は27号溝先端部より約30 mの地点で別の区画溝を検出していることから、これらがひとつのまとまりとして把えられる。ただ27号溝先端部は後世の遺構に切られており西端部は確認していない。方位は東偏1°～2°、総敷地規模はA・D・Gの西端が他の区画と同程度の幅を持っていたものと仮定して、約60×49 m＝2940 m²（約2段170歩）である。各区画の規模（距離は溝中央間、面積は小数点以下四捨五入）は、B区が19.6×16.2 m＝318 m²、C区が21.8×17.0 m＝371 m²、E区が19.7×15.8 m＝311 m²、F区が21.7×15.0 m＝326 m²、H区が19.7×15.8 m＝311 m²、I区が21.5×15.8 m＝340 m²である。各区敷地面積の平均は約330 m²（約100段）となる。溝底の標高は、32－4号溝が4.07～4.10 m、24－25号溝が4.03～4.08 m、31号溝西端が4.00 m、26・27号溝境が4.03 m、27号溝西端が4.00 mと西へいくに従い低くなっている。この溝の性格については、内部の建物に規模の差があり、その配置が溝に規制を受けているとみら

れることから、屋敷地を主屋、付属屋、小屋といった機能差に応じ、また畑地等の配置を考慮して分割したものと考えられ、同時に宅地の滞水を防ぐ意味も持っていたと思われる。西方の区画溝はその東南端を検出したのみである。溝の規模、覆土は先のものと同様である。

2号建物　B・C－1・2区。4間（9.3 m）×3間（6.7 m）の南北棟（東偏1°）で東側に廂1面を有する建物。柱間寸法は桁列が北から2.0 m、2.5 m、2.5 m、2.3 m で梁列は西から2.0 m、2.4 m、2.4 m、2.1 m（廂）を測る。柱穴掘方は身舎が径25～40 cm の円形で検出面からの深さ25～40 cm、廂が径20～25 cm の円形で深さ15～25 cm の円形で深さ15～25 cm を測る。柱痕跡は径10～15 cm である。覆土は掘方埋土が地山土を主体とした濁黄灰色土、柱痕部が淡灰褐色土



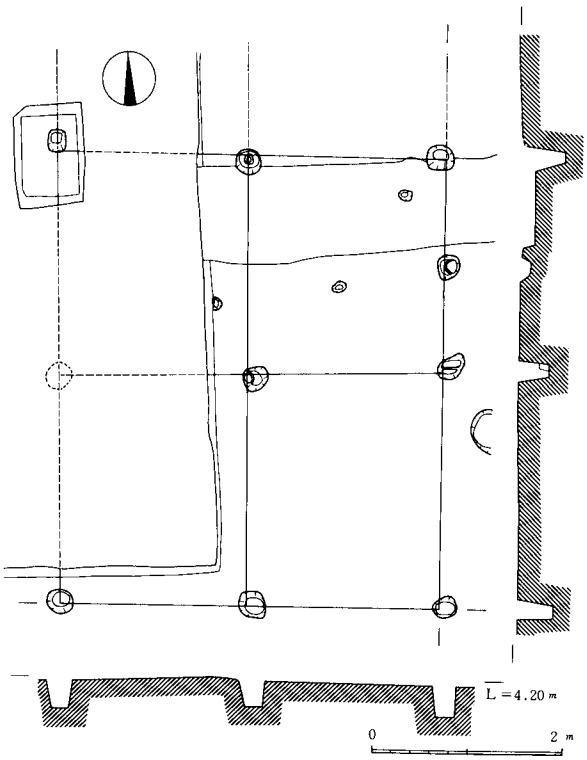
第45図　2号建物実測図



第46図　３号建物実測図

である。遺物はＰ—509で柱抜き取り後に埋納された土師器椀(257)、Ｐ—507で土師器小皿(258)、Ｐ—502でクルミの実２点が出土している。建物の規模については柱穴規模から東側片面廂と推定したが、柱間寸法からみれば、３間×２間の３面廂ないしは２間×２間の４面廂を想定することも可能である。

３号建物　Ａ・Ｂ—１・２区。２間（5.0 m）以上×２間（4.8 m）の南北棟（東偏1°～２°）で東に廂１面を有する建物である。柱間寸法は桁列が北から2.6 m、2.4 mで梁列が西から2.4 m、2.4 m、2.0 m(廂)を測る。柱穴掘方は身舎が径30～45 cmの円形で検出面からの深さ20～40 cm、廂が径20～25 cmの円形で深さ約20 cmを測る。柱痕跡は径10～15 cmである。覆土は



第47図　７号建物実測図

2号建物と同様である。柱根はP—583で遺存し、一辺約10cmの角材とみられる。遺物はP—595で柱抜き取り後に埋納された土師器椀・小皿（259・260・262・263）、P—596で土師器小皿(261)、箸状木器1点が出土している。2号建物との距離は3.8mである。

7号建物　A・B—0・1区。2間（4.8m）以上×2間（4.0m）の南北棟（東偏3°）。柱間寸法は桁列が北から2.3m、2.5mで梁列が西から2.0m、2.0mを測る。柱穴掘方は径20～30cmの円形、検出面からの深さは30～45cmを測る。柱痕跡は径約10cmである。覆土は2・3号建物と同様である。埋納遺物は出土していない。3号建物との距離は3.8mで、2—3号建物間の距離に等しい。

8号柱列　B・C—1区。南北方向（東偏2°）、2間（3.0m）で2号建物の西2.0mに位置する。柱穴掘方は径20～30cmの円形、検出面からの深さは約10cmを測る。覆土は灰褐色土である。2号建物に付属する塀ないしは廂と考えられる。

6号柱列　B西拡張区。東西方向（東偏11°）で6間（9.0m）以上を確認している。柱間寸法は1.5m等間、柱穴掘り方は径10～20cmの円形、検出面からの深さは15～20cmである。覆土は灰褐色土である。

その他の遺構と遺物

上記以外で明確にIV期に帰属する遺構は確認していない。ただ2、3、7号建物の周辺ではそれらと同一覆土を持つピットが若干あり各建物に付属するような小施設があったものと思われる。

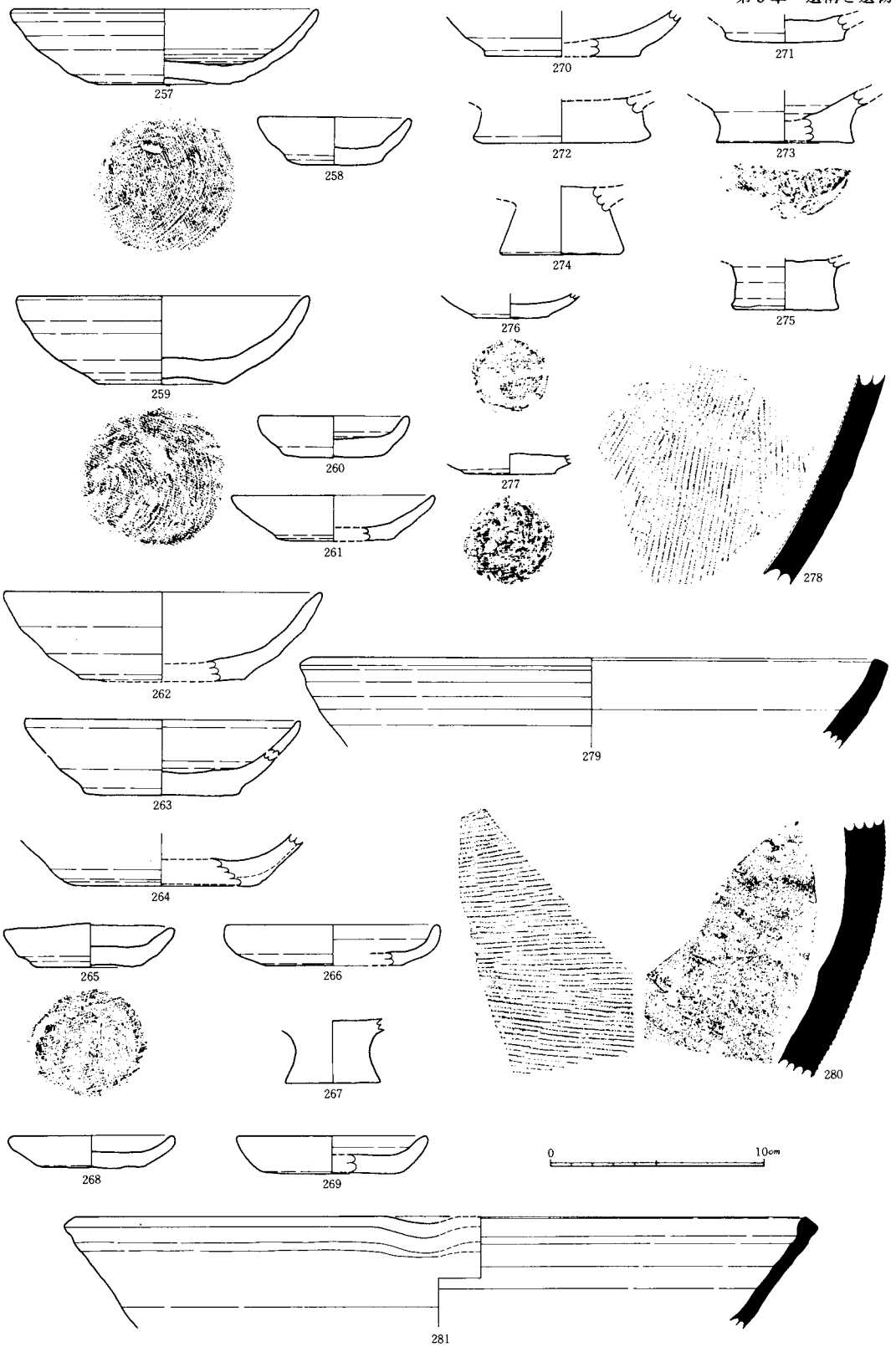
IV期の遺物は遺構出土品を中心とする土師器のほか、須恵器系陶器(278)、珠洲陶器(279～281)、白磁（282～305）、青磁（307）、瀬戸（308・309）がある。

土師器　椀・(皿)・小皿があり、底部はすべて回転糸切り痕を残す。椀は体部が内湾ぎみにたちあがり底部外面中央の凹むa類（257・259）、体部内湾の度合が弱く底部が平担で厚みをもつb類（262～264・270）がある。他に椀か皿か不明ながら底部に高さ1.5cm前後の台部をもつもの（272・273）がある。小皿は椀B類の底部で若干内湾ぎみの短かい体部がつくものが多いが、体部形態、口縁形態ともにバラエティーがある。また径5cm前後で高さ2cm前後の台部を付すものもある。

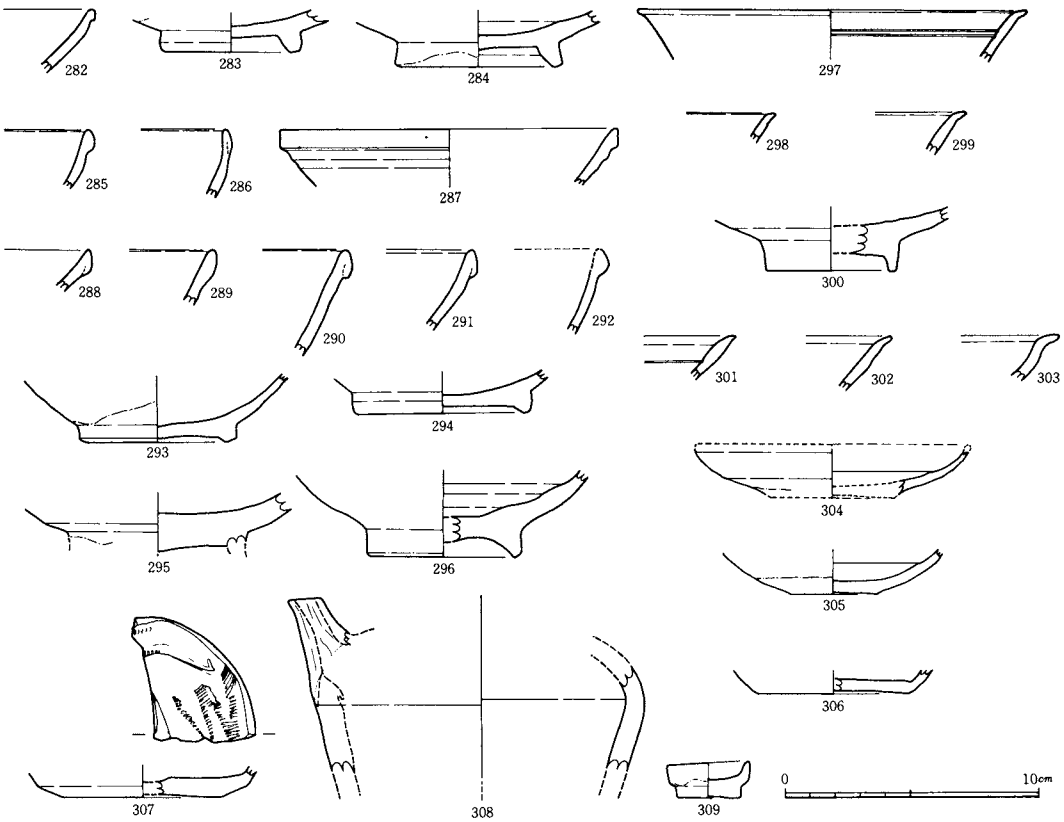
須恵器系陶器　甕の体部片で外面には細かい（4本／1cm）条線のタタキ痕をもつ。内面は剝離のため不明である。胎土は径2mm程度の石英粒を多く含み、鉱物の溶けた黒色粒が目立つ。色調は淡青灰色で、外面は自然釉のため光沢を持った暗灰色を呈する。断面は淡青灰色と淡灰色の不規則な縞状となっている。焼好は良好である。

珠洲陶器　279・281は口縁端部に外傾する面を持つ鉢である。281は端部内面が肥厚し、片口部が遺存する。280は厚手の甕体部片で外面には条線の細かい（4本／1cm）タタキ痕をもつ。

白磁　碗・皿がある。碗口縁部は小型の玉縁a類（282）、大きめの玉縁b類（285～292）、端反りのc類（297～299）があり、底部は比較的高めの高台を付すa類（283・284）、低い高台のb類（293・294）、底部が厚くそれに対して幅の狭い高台を付すc類（300）がある。皿は口縁端部が



第48図　Ⅳ期の土器　２号建物(257･258)　３号建物(259～263)　１号井戸(264･265)
２号溝(266)　３号溝(267･268)　24号溝(269)　包含層(1)



第49図　IV期の土器 包含層(2) 白磁・青磁・瀬戸

外反するａ類（301～303）、内湾ぎみのｂ類（304･305）、口禿げになるとみられるｃ類（306）がある。碗は器形全体を窺えるものはないが口縁形態のａ～ｃの各類が底部形態のａ～ｃ類のそれぞれに対応するものとみられる。

青磁　底部内面に劃花文を有する皿で同安窯系の製品とみられる。

瀬戸　308は灰釉の水注、309は灰釉の入子である。

第６節　IV期以降の遺構と遺物[8]

IV期以降に下る明確な遺構は確認していない。遺物は珠洲陶器、加賀陶器、青磁、白磁、瀬戸などがある（図版22）。Ａ～Ｃ－０～２区、Ａ・Ｂ－７～10区の包含層を中心に出土している。

青磁　碗・皿・香炉・小鉢がある。碗は鎬連弁文の体部片４点、線描き連弁文の体部片１点、雷文と唐草文の体部片１点、玉縁・端反りの口縁片各１点などがある。皿は大型で内底面の釉を丸く削り中央に印花文を持つ。香炉は底部片で高台と三足を付す。小鉢は口縁片で薄手の端反りタイプである。

白磁　306の口禿げ皿がある。

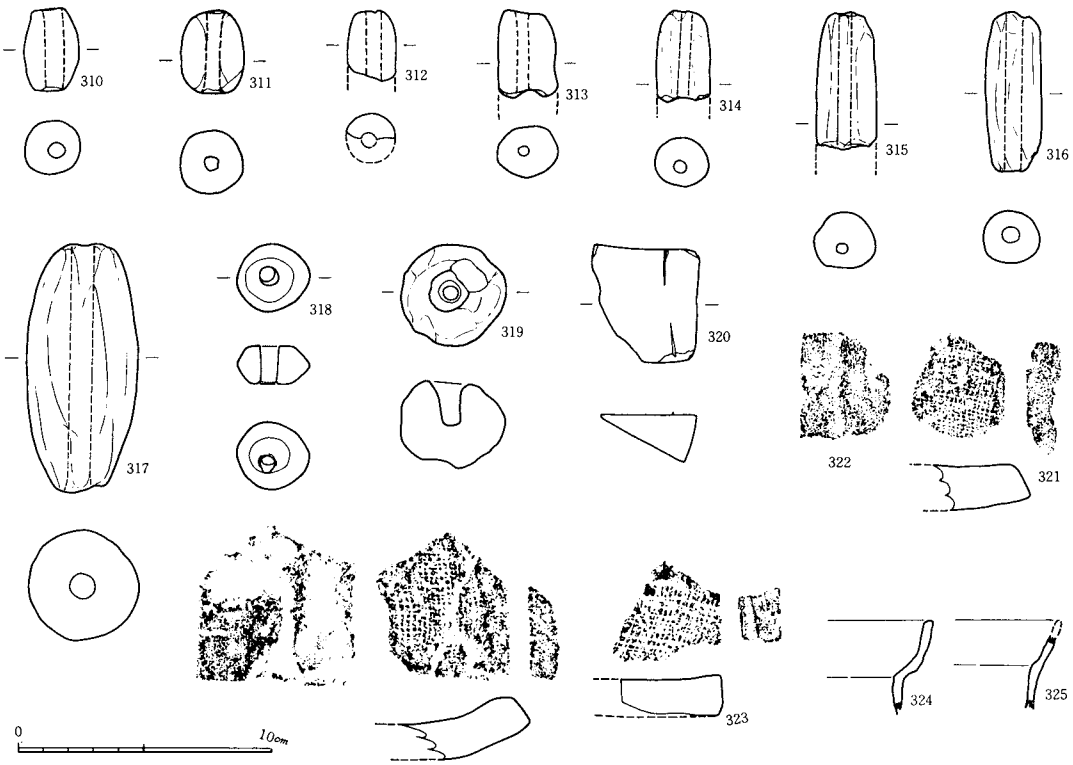
瀬戸　灰釉皿・袋物・おろし皿・香炉・盤・花瓶、鉄釉おろし皿・花瓶、天目碗がある。灰釉皿は体部内湾ぎみで釉は内面～口縁部外面。灰釉袋物は瓶子の肩部片・体部下半片である。灰釉おろし皿は内面体部下半～底部にかけて細かいおろし目を密に入れる。灰釉香炉は体部～底部片で外底にはわずかに糸切り痕がみえる。灰釉盤は底部に三足を持ち、内面には0.5～1cmの粗いおろし目を施す。鉄釉おろし皿は口縁片の片口付近で釉はうすい。鉄釉花瓶は頸部～体部片、天目碗は体部片である。

珠洲・加賀陶器　甕口縁片、体部片が若干量あり、加賀では肩部に押印を持つものがある。

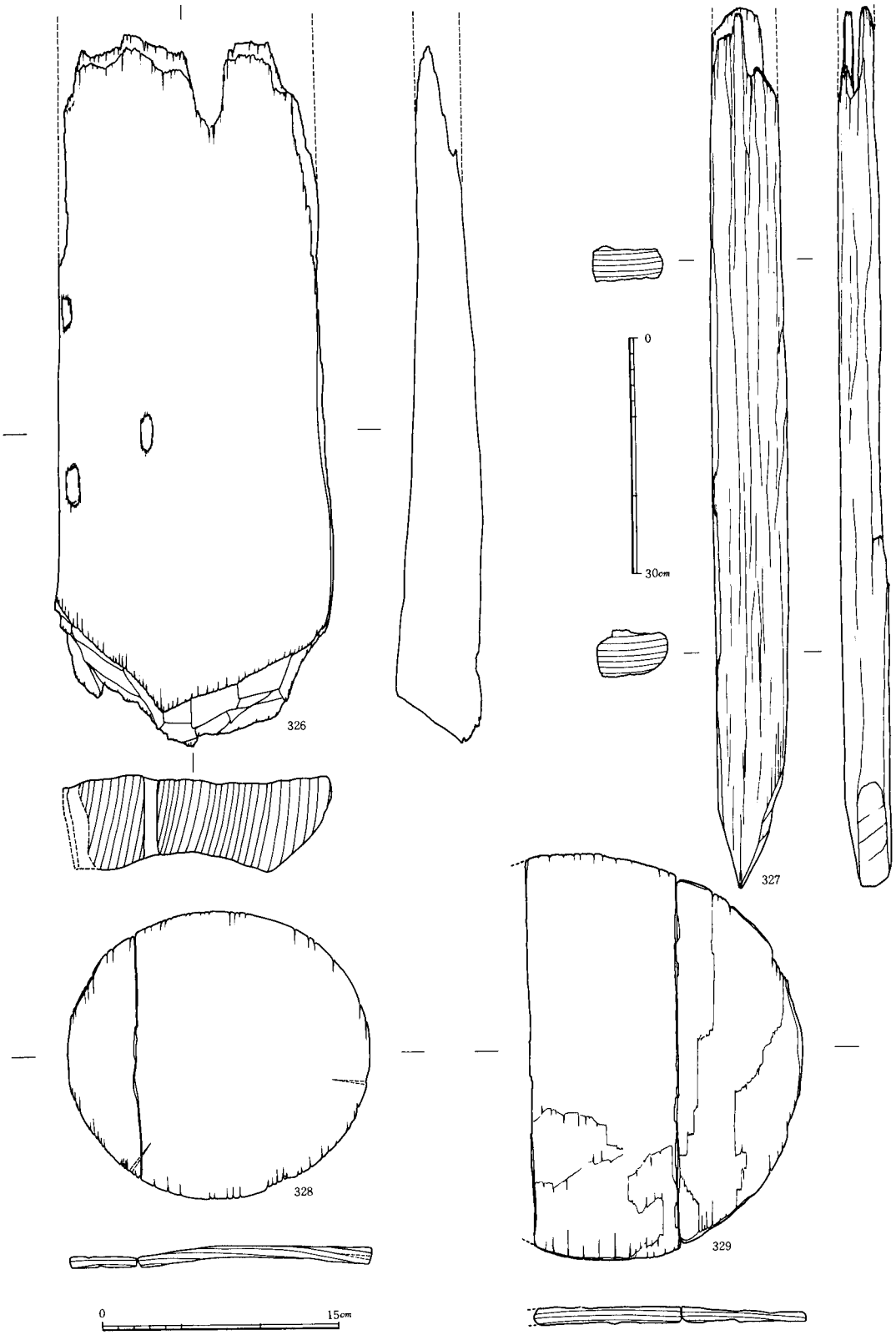
第7節　土製品・石製品・瓦・鉄製品・木器

土製品　管状土錘7点がある。長3.3cm、幅2.5cm前後、重15～20gのa類(310・311)、長6cm前後、幅2.0～2.5cm、重30g前後とa類の約2倍の長さを持つb類(314～316)、長約10cm、重167gの大型のc類(317)がある。b類315は6号溝出土で本遺跡I期、c類317は戸津古窯跡群[9]中の土師器窯に類似品があり、IV期のものと考えられる。

石製品　玉、砥石、用途不明品がある。318はソロバン玉形を呈し、片面穿孔、長石製[10]である。



第50図　土錘・石製品・瓦・鉄製品（318は現寸）



第51図　木器 P－62(326)　6号溝橋脚 杭(327)　2号井戸(328・329)　327は1/8

319はやや扁平な球形を呈し、片側から中位まで穿孔されている。用途は不明である。320はすべての面が研磨された砥石である。319・320の石質同定は行っていない。いずれも時期は不明。

瓦　いずれも細片で321・322は丸瓦片、323は不明である。磨耗がみられることから二次的に移動したものと考えられる。前者は平安中期[11]のものであろう。

鉄製品　鍋の口縁～体部片2点がある。ともにA－5区包含層のIII期建物群の北辺で出土しているが、帰属時期については不明である。IV期ないしはそれ以降と推定される。

木器　326はP－62（2号柵）の柱根である。現存長44.2 cm、幅17.5 cm、厚さ5.7 cmを測る。先端を尖らせ、貫通する孔3を持つ。木取り[12]は本征目材。同様の板状材はP－65（2号柵）にある。327は6号溝橋脚杭で現存長111.4 cm、幅9.5 cm、厚さ6.0 cmを測る。板目材Ⅰ。328・329は2号井戸出土の曲物底板で径18.4 cm・25.9 cmで厚さはともに1.1 cmを測る。板目材Ⅰ。

なお、木器の樹種同定は実施していない。

註(1)　永峯光一　1965　「縄文文化の発展と地域性　中部」『日本の考古学』II　河出書房

(2)　小林秀夫他　1982　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－茅野市　その5－昭和52・53年度』　日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会

(3)　米沢義光氏教示。

(4)　谷内尾晋司　1983　「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』（『石川考古学研究会々誌』第26号）　石川考古学研究会

(5)　註(4)文献

(6)　乾燥し収縮した時点で計測したものである。

(7)　田嶋明人氏教示。田嶋明人他　1982　『漆町遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

(8)　IV期およびIV期以降の陶磁器類については垣内光次郎氏の教示を得た。深謝。

(9)　小村茂　1983　『戸津』　小松市教育委員会
　　望月精司他　1985　『戸津』　小松市教育委員会

(10)　藤則雄氏の教示による。

(11)　木立雅朗氏の教示による。

(12)　木取りの表現は、金原正明・嶋倉巳三郎　1981　『出土木器の樹種と木取り』Ⅰ・II（『布留遺跡研究中間報告』3）による。

第4章　ま　と　め

第1節　遺物・遺構の時期

I期　6・7号溝は出土遺物に1個体の破片を共有する例（11・19・37）のあることから、ほぼ同時期に機能していたものと見なせる。11・12・18・36の甕類や8・9・16の瑳は加賀市分校窯跡群[1]や富山県小杉流通業務団地内遺跡群No. 6・7遺跡[2]に類品があり、田嶋編年[3]III型式、7世紀前半を中心にするものと言える。廃棄の時期は、A－3区両溝の土層観察から7号溝が先行し、6号溝は内面にかえりを有する杯蓋片の形態から7世紀後半代とみられる。11・15号土坑は37の破片が6・7号溝と共有しておりほぼ同時期。I期建物群は、6号建物に付属する28号溝と15号土坑が配置関係から同時期とみられ、そのことから本期に帰属するものと考えた。

13号土坑は、須恵器杯蓋が内面にかえりを有するものとそれが消失し端部が断面三角形のくちばし状となるものが共存しており、辰口町湯屋B－1号窯[4]の段階、7世紀第4四期頃である。

1号溝D－3～5区の下層で検出された一群の須恵器（89～96）は、辰口町来丸サクラマチ1号窯[5]の段階、8世紀前葉である。

II期　1号溝の新相を示す土器群は9世紀後半～10世紀前葉の幅の中で把えられる。墨書土器102～104は9世紀後半のものであろう。8号建物は時期を明確にする遺物はないが、III期建物群に近い方位をとること、1号溝に規制されたとみられること、柱穴覆土・掘方がIII期建物群と異なることなどから、I期のうちの8世紀前葉の可能性も残すが、ここでは9世紀後半のものと考えておきたい。

III期　4・5号建物とその付属施設とみられる2号井戸、6・8号土坑、4・5号柱列は出土遺物からみて、同時期に併存したものと言えよう。各遺構の出土遺物の大部分は、建物群移動の際の一括廃棄（埋納）の所産と考えられ、その時点での同時使用を示したものとすることができる。包含層出土遺物も一部（234・235）を除いてほぼ同時期のものである。

須恵器では杯蓋、杯、有台杯、盤、椀、有台椀、有台皿、鉢、壺・瓶類、大甕がある。杯蓋はいづれもつまみのないものである。杯は深身のもの（156・211）が若干あり、浅いものは器壁が薄くロクロひだが目立つ。盤は口径14.1 cm～14.6 cm。土師器系の椀・皿類は体部下半～底部外縁のロクロケズリが卓越しており、底部中央もロクロナデにより糸切り痕は明瞭でない。有台皿の高台は高くふんばった形状を示す。土師器では椀、有台椀、有台皿、甕、堝がある。椀・皿類は須恵器同様糸切り痕は明瞭ではない。椀では内面黒色処理をしたものが約7割を占める。甕は長甕と小甕があり、前者は口縁部がS字状に屈曲、後者は底部が平底で糸切り痕を残す。堝は口縁端部が内傾した面をもつのが特徴である。6・8号土坑、2号井戸出土遺物中の供膳器における須恵器の比率は約7～8割を占める。以上の諸特徴を示す土器群は、小松市戸津9号窯[6]、同54・45号窯[7]、鶴来町安養寺遺跡群安養寺地区SK 71[8]にあり、10世紀前半[9]に比定できる。

IV期　2・3・7号建物、1号井戸とそれらを囲む区画溝は方位、配置関係、覆土、出土遺物

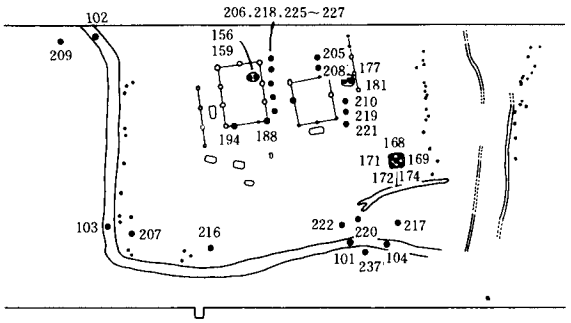
からみて同時期のものと見なせる。

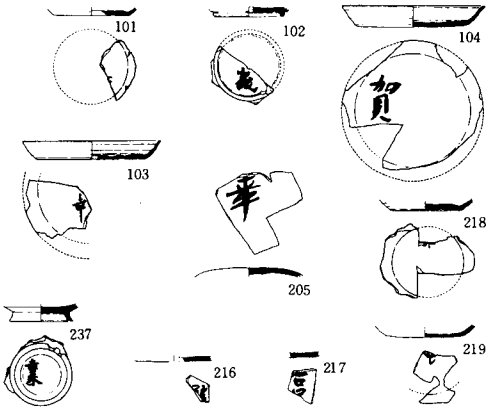
各遺構出土遺物は土師器のみで、椀・皿・小皿があり底部はすべて回転糸切り痕を残す。高台を付すもの、非ロクロ成形品は確認されていない。包含層出土遺物では第3章第5節でふれた白磁、青磁の劃花文皿、瀬戸の水注、須恵器系陶器、珠洲陶器が該期の土師器に近い時期を示すものであろう。土師器は加賀市田尻シンペイダン遺跡[10]に類似形態のものがあるが、本遺跡のものは有台椀がみられないこと、小皿では体部が短く底径の大きいものが目立ち、全体にバラエティーが少ないことなどから、それらよりも若干後出的な様相が窺え、漆町遺跡金屋ヤシキダ4号井戸・同サンバンワリ100号井戸出土品[11]に近く、12世紀中葉[12]頃と考えられる。なお陶磁器類は12世紀後半～13世紀初頭に下るものも含むようである。

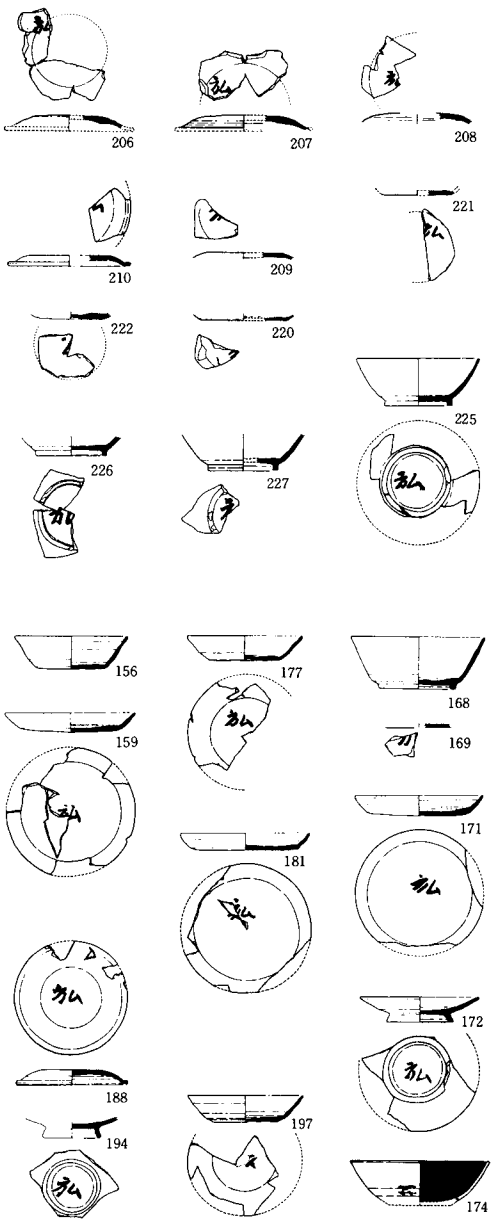
第2節　墨書土器

本遺跡では33点の墨書土器が出土している。時期はII期・III期のものである。II期では「賀」「幸」、III期では「幸」「吉来」「払」「利」があり、字句はいずれも「嘉字・呪字[13]」とみられる。ここでは「払」の集中するIII期の墨書土器について考えてみたい。III期の墨書土器は約30点で、1点以外はすべて須恵器である。全供膳形態土器に占める墨書土器の比率は、算出していないが、他の遺跡に比して高いものと考えられる。遺構内の出土が目立ち、一括投棄の状態で出土した2号井戸では6点中4点が、埋納とみられる4・5号建物では5点中3点が墨書土器と、6割以上の比率を占めている。文字は遺構内の墨書須恵器はすべて「払」であり、包含層を含めても判読可能文字中では約8割以上が「払」と、その集中度が窺える。

墨書土器の性格は、時期、遺跡の性格、出土地点等の様々な状況によって多種多様の理解がなされている[14]。本遺跡の場合を整理すれば、時期は10世紀前半、遺跡の性格は一般村落(村落群内での位置付けは別として)、出土地点は遺構内（土坑・井戸・建物柱穴）と建物群周辺の包含層、特定文字への集中度が極めて高く絶対数も比較的多いと言えよう。その性格については以下のように考えている。建物群周辺の包含層から出土するものは墨書に磨耗のある例が存在することから、日常使用の什器に記された建物群住人にとっての共有の器を示すものであり、2号井戸や4・5号建物柱穴から一括投棄、埋納状態で出土したものはその住人の祭儀にかかるものと理解する。後者について墨書がいつなされたかは、文字の磨耗がほとんどみられないこと、各遺構で墨書土器に混じって墨溜に使用された土器があることなどから、祭時になされた可能性も十分考えなければならない[15]。祭儀においては、日常使用のものを援用する場合も想定し、墨書土器が重要な意味を有していたことは疑いない。本遺跡では居住地の移動（建物群とその付属施設の廃棄）に際して、包含層出土墨書土器にみられる、その住人らが紐帯とした「払」という文字の墨書土器を主体とした祭祀が執行されたものと理解することができる。このような村落祭祀の一類型がどの程度普及していたかは今後の検討課題であるが墨書土器をぬきにして言えば、建物の柱抜き取り後への土器埋納（第5章第2節）や井戸廃棄に伴う土器の一括投棄は比較的多く見受けられる







番号	出土地点	器　種	墨書部位	文字	備　　考
101	1 号 溝	杯	底 部 外 面		
102	〃	有台杯	〃		
103	〃	盤	〃	幸	
104	〃	〃	〃	賀	
156	6 号土坑	杯	〃		
159	〃	盤	〃	㐂	墨溜
168	2 号井戸	有台杯	〃		墨溜、埋納
169	〃	盤	〃	㐂	埋納
171	〃	〃	〃	㐂	埋納
172	〃	有台皿	〃	㐂	埋納
174	〃	椀	体 部 外 面	利	埋納
177	8 号土坑	杯	底 部 外 面	㐂	
181	〃	盤	〃	㐂	
188	4 号建物	蓋	天井部外面	㐂	墨溜、埋納
194	〃	有台皿	底 部 外 面	㐂	埋納
197	5 号建物	杯	〃	㐂	埋納
205	B－5 包	蓋	天井部外面	幸	
206	B－6 包	〃	〃	㐂	
207	B－5 包	〃	〃	㐂	
208	B－6 包	〃	〃	㐂	
209	A－2 包	〃	〃	㐂	
210	B－6 包	〃	〃	㐂	
216	D－4 包	杯	底 部 外 面		
217	D－7 包	〃	〃		
218	B－5 包	〃	〃		
219	B－6 包	〃	〃		
220	〃	〃	〃	㐂	
221	〃	〃	〃	㐂	
222	〃	〃	〃	㐂	
225	B－5 包	有台杯	〃	㐂	
226	〃	〃	〃	㐂	
227	〃	〃	〃	㐂	
237	D－6 包	有台皿	〃	吉来	

第 2 表　墨書土器一覧表

第52図　墨書土器集成図、出土地点図

現象である。ここではふれなかったが、「溝祭祀」などにも墨書土器は重要な位置を占めており、それらも含めた墨書土器祭祀の総合的な検討は他日を期したい[16]。

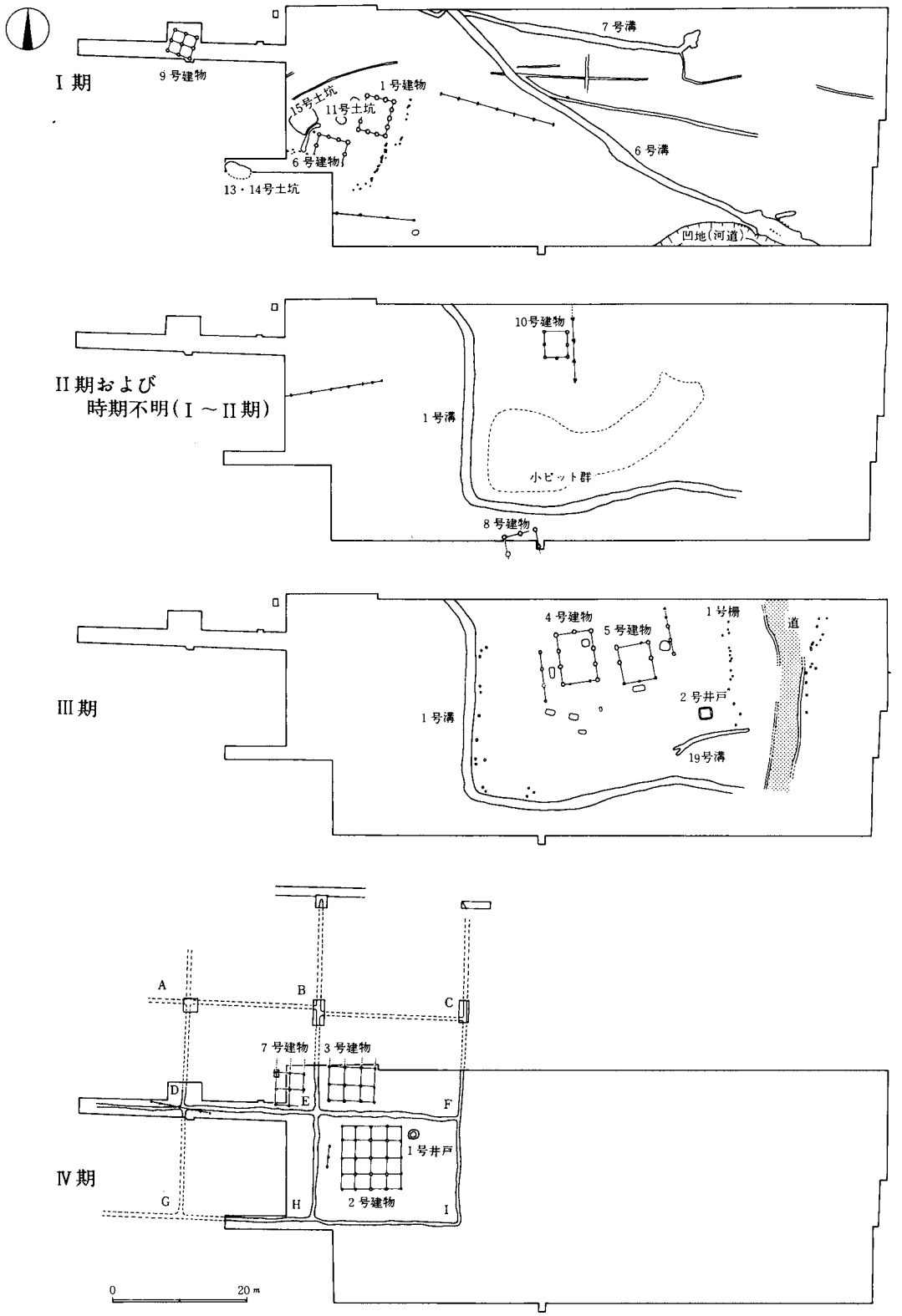
第3節　居住地の変遷

I期　調査区の南側には河道の氾濫原とみられる低地がせまり、そこから北西方向に溝がのびる。建物群や土坑群はその西側にひろがっている。建物群はL字形に配された1・6号建物と西にやや離れて9号建物が存在する。前者は規模の大きい1号建物が主屋、6号建物が付属屋とみられ、その東に接して2・3号柵、西側には土坑群がある。溝との境には1号柱列（柵）がある。後者は倉庫とみられる。限定された調査区からこれら建物群を含む集落の全容は明らかにしがたいが、このような2棟を1単位とする建物小群[17]と倉庫のあり方は、加賀市永町ガマノマガリ遺跡[18]の6～7世紀の集落で確認されており、そこでは倉庫を軸に3つの建物小群が半円形にそれをとり囲むように存在しており、当遺跡の場合も周辺に別の建物小群が存在したことを想定できれば、前記遺跡例とともに該期の集落構造の一端を示すものとして注目される。

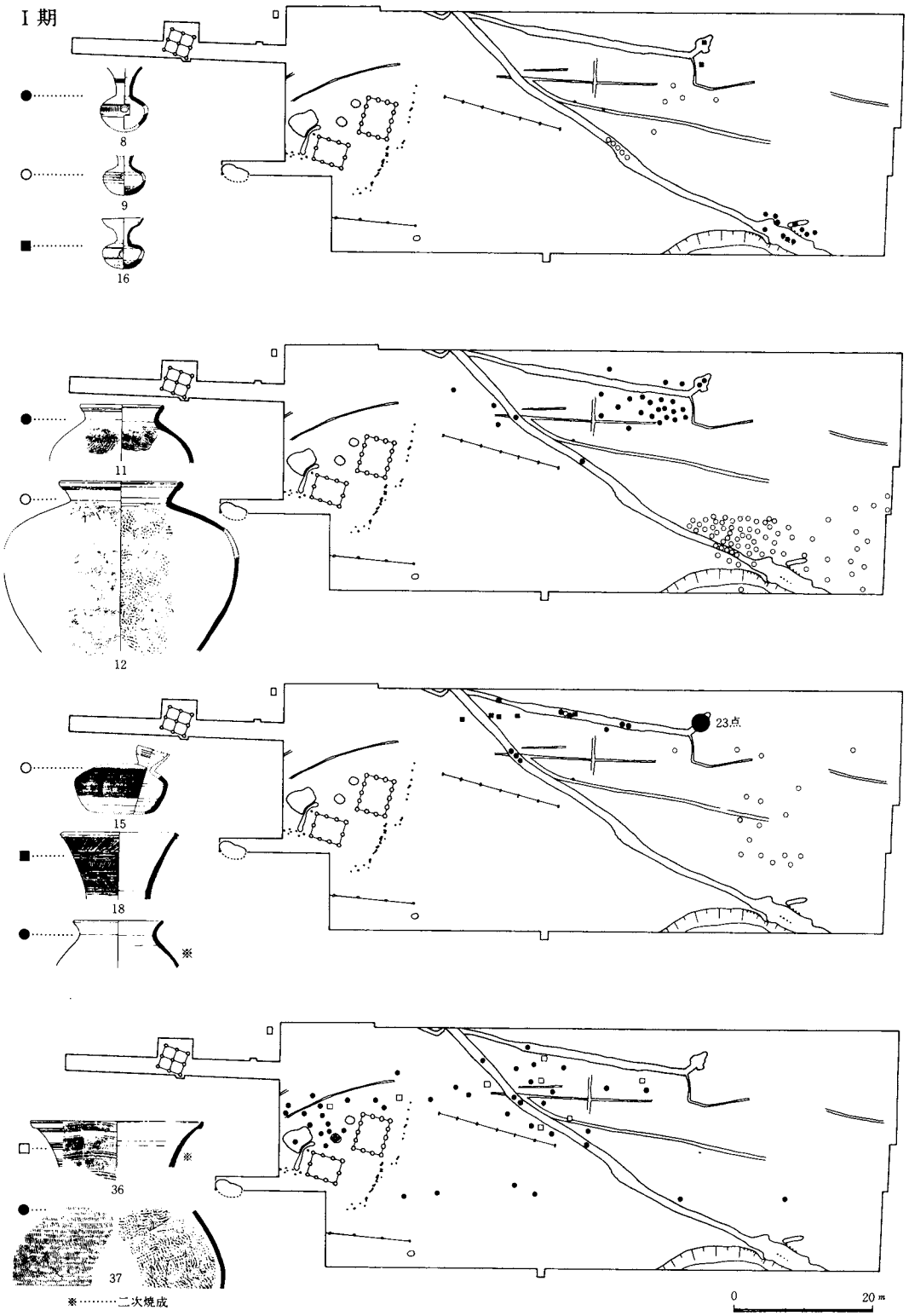
該期の遺物のうち須恵器の瑳や平瓶・甕は第54図のとおり6・7号溝の周辺で出土しており、その使用ないしは廃棄の状況を考える上では示唆的である。同一個体とみられる36･37の甕は建物群の周囲とその北辺から東側にひろがる傾向をみせており、このような破片の分布状況から当時の人間の活動範囲、移動の方向性（道）等の一端を窺うこともできよう。

II期　南側の氾濫原は後退し、中央部では6号溝にかわってL字形の1号溝が存在する。建物は東西方向の1号溝に南接して8号建物があり、その周辺に住居域が形成されたものと推定される。遺物・遺構とも少量で詳細は明らかではない。

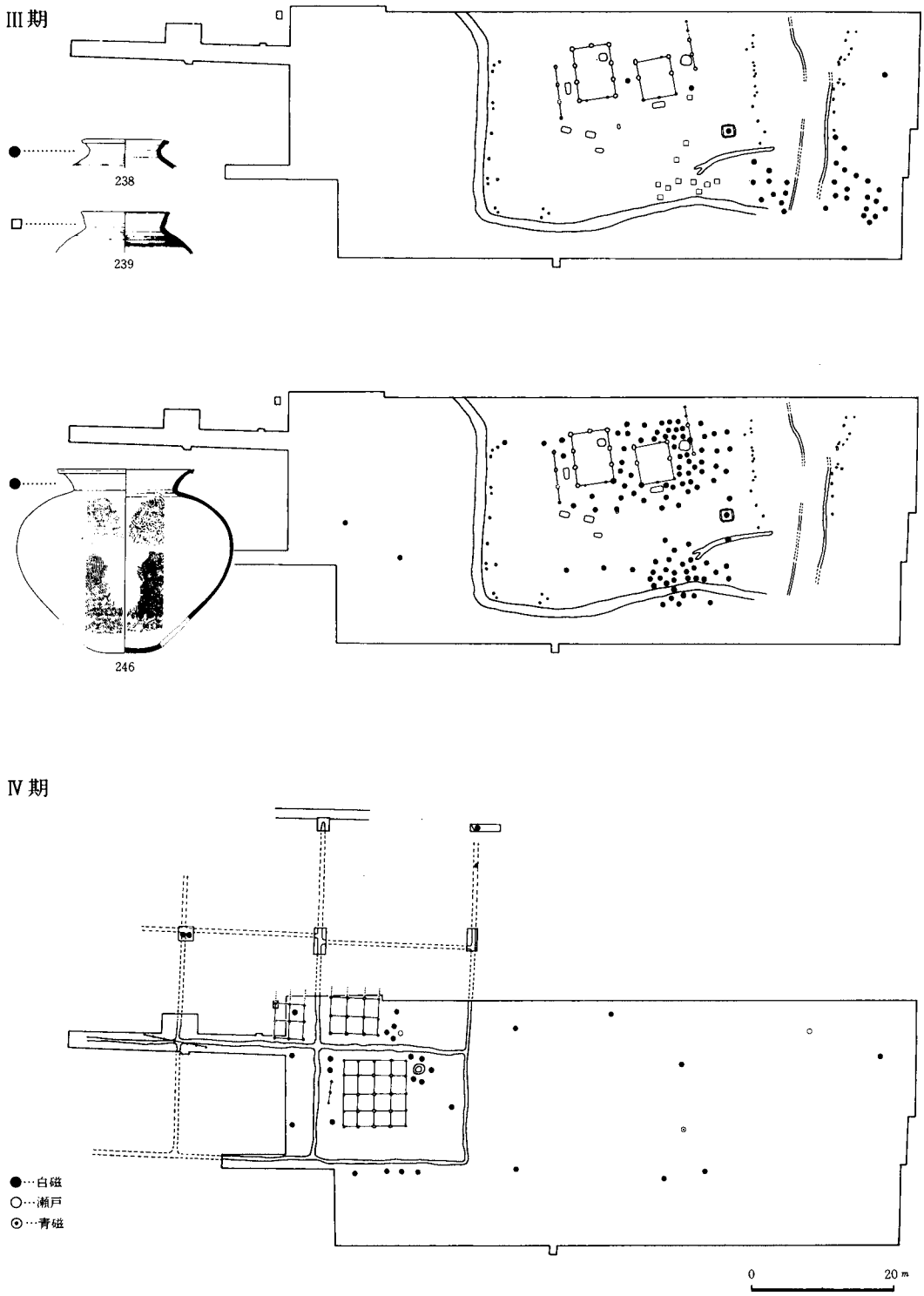
III期　調査区中央部に雁行型配置[19]の4・5号建物がある。この建物群は西辺と南辺を1号溝に、東辺を1号柵、道によって画されており、住居域としての屋敷地を顕在化している。北辺は調査区外となるが条里坪境推定線の旧農道付近とすると、敷地は約1,600 m²～1,800 m²程度と考えることができる。4号建物が主屋、5号建物が付属屋とみられ、ほかに井戸や土坑群が存在し、この屋敷地が消費生活の一単位と考えられる。屋敷地北部の状況は定かでないが、内部に複数の建物小群があったとは考えにくい。だとすれば、I期の、建物小群がさほど敷地を明確化せず、複数の建物小群で倉庫を共有するあり方と比較して、III期には建物小群の自立化[20]がより進行していたとすることができよう。それは以下の点からも肯定できる。当建物群は、本章第2節や第5章第2節でも述べているとおり、その廃棄に際して、建物柱穴への土器埋納[21]、井戸への土器一括投棄といった祭祀を行っている。また建物群個有の墨書「㐅」を保有し、祭祀の執行にあたってはその墨書土器を重用している。このことは祭祀（ここでは住居移動の際の祭祀）の主体が、複数の建物小群からなる集団にあった段階から、個別の建物小群でそれを執行できるまでに成長したと理解できる。該期の遺物の出土は屋敷地内に集中しその外では極めて希薄であり、住居域の外でも広く遺物の分布するI期の状況とは対称的である。


Ⅰ期
9号建物
15号土坑
11号土坑
1号建物
6号建物
13・14号土坑
7号溝
6号溝
凹地(河道)
Ⅱ期および
時期不明(Ⅰ～Ⅱ期)
10号建物
1号溝
小ピット群
8号建物
Ⅲ期
4号建物
5号建物
1号柵
道
2号井戸
1号溝
19号溝
Ⅳ期
A
B
C
7号建物
3号建物
D
E
F
1号井戸
G
H
2号建物
I
0
20m

第53図　各期の遺構



第54図　Ⅰ期の遺物分布図



第55図　III期・IV期の遺物分布図

IV期　調査区西側に溝で区画された2・3・7号建物がある。すべて総柱建物で、2・3号建物は廂をもち、規模の上からは、2号建物が井戸を付設することにも見られるように本群の中では主屋と言える。3号建物が付属屋、7号建物が倉庫ないしは作業小屋的な建物と推定される。この建物群の敷地については、第3章第5節のとおりで、総面積が約3,000 m² 弱、1区画の平均は約330 m² (100段) である。区画溝の性格は、先に、屋敷地内の建物の機能差・土地利用に応じた区割、宅地の滞水防止のためと推定したが、このような建物群と整然とした区画溝のあり方は、管見では確認例がなく、その意義は明らかにしえない。また、この建物群が当時のどのような階層、家族形態に相当するのかについても今後の検討課題である。該期の遺物は建物群周辺のほか、遺構の確認できなかったその東側にも広がっており、当然のことではあるが、より広範な活動の跡が窺える。

註(1)　田嶋明人　1972　『加賀市分校古窯址群調査概報』　加賀市教育委員会、石川県立大聖寺高等学校郷土研究部　1973　「分校窯址発掘調査報告」『郷土』11

(2)　上野章他　1982　『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第3・4次緊急発掘調査概要』　富山県教育委員会

(3)　田嶋明人　1971　「須恵器の編年」『法皇山横穴古墳群』　加賀市教育委員会

(4)　滝上秀明・木立雅朗　1985　『辰口町湯屋古窯跡』　辰口町教育委員会

(5)　高橋裕　1975　『辰口町来丸サクラマチ古窯』　石川県教育委員会

(6)　宮下幸夫　1980　『戸津9号窯』　小松市教育委員会

(7)　望月精司他　1985　『戸津　第4・5次発掘調査概要報告書』　小松市教育委員会

(8)　中島俊一他　1975　『安養寺遺跡群発掘調査概報』　石川県教育委員会

(9)　田嶋明人　1984　「石川県の11・12世紀土器について」(五県会議情報交換資料)

(10)　田嶋明人他　1979　『加賀市田尻シンペイダン遺跡発掘調査報告書』　石川県教育委員会

(11)　田嶋明人　1985　「加賀地域にみる10世紀から13世紀にかけての土師器の変遷」(第4回中世土器研究集会発表資料)

(12)　註(11)文献。

(13)　吉岡康暢　1983　「墨書土器」『東大寺領横江庄遺跡』　松任市教育委員会・石川考古学研究会

(14)　註(13)文献。

(15)　この点を検証するのは極めて困難と思われる。なお、本遺跡出土の墨書「ム」の文字には筆致の細部に差のあることは認められたが、それが複数の書き手によるものかは断定しえなかった。

(16)　ここでは墨書土器が祭祀に用いられている例を強調したが、村落遺跡ではほかに日常使用段階での墨書土器〔属人器、村落（建物群）共有の銘々器、分類記号など―註(13)〕の意義についてもあわせて考えていかなければならない。

(17)　田嶋明人　1983　「奈良・平安時代の建物グループと集落遺跡」『北陸の考古学』(『石川考古学研究会々誌』第26号)　石川考古学研究会

(18)　田嶋明人・越坂一也他　1984　『永町ガマノマガリ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

(19)　黒崎直　「平城京における宅地の構造」『日本古代の都城と国家』　塙書房

(20)　註(17)文献。田嶋氏はその時期を10世紀代としており、当遺跡例も矛盾しない。

(21)　本遺跡では、墨書土器を主体にした供膳器のほかに須恵器大甕(246)の破片を埋納している。大甕破片の出土状況は第55図のとおりであるが、建物群移動の際の祭祀において、それは意識的に破砕された可能性があり、その一部を柱穴内へ他の土器とともに埋納したのであろう。

第5章　考　　察

第1節　加賀における7～8世紀の煮沸形態土師器

これについては、坂井秀弥[1]、岸本雅敏[2]、吉岡康暢[3]の各氏によって整理がなされており、焦点は律令制確立期におけるロクロ土師器の出現と「北陸型[4]」煮沸土師器の成立に関わる須恵器工人と土師器工人の生産組織の評価の問題であると言えよう。ロクロ土師器生産の評価については概ね意見の一致をみており、旧来の土師器生産が須恵器生産組織のなかに再編成された新たな土器生産体制下でなされたものと理解されている。その出現の時期は、3氏ともほぼ8世紀前葉(平城宮Ⅰ[5])で一致しており、木立雅朗氏[6]は加賀で須恵器窯に近接してある小形平窯[7]を「土師器窯」と位置付け、吉岡編年[8]$Ⅰ_1$期から出現するそれがロクロ土師器の出現に深く関わっていると指摘している。普及の時期については、坂井氏の越後、吉岡氏の北陸南西部を対象とした検討により、ともに8世紀後半以降とされている。

本稿では、加賀[9]を中心にロクロ土師器の出現と「北陸型」の成立・普及に関する基本的な点を整理し、先学の意見を検証してみたい。

甕　古墳時代以来の形態、成形・調整のものをA類とし、大型品（長胴）をＡⅠ、中型品（器高に比して口径が大きい）をＡII、小型品をＡIIIとする。把手付のもの（器高に比して口径が大きい)をＢ類とする。本遺跡13号土坑でII類とした口縁端部に面を持つものをＣ類とする。ロクロ成形・調整を伴うものをＤ類とし、大型品（長胴）をＤⅠ、小型品をＤIIとする。

堝　非ロクロ成形・調整のものをＡ類、同様の成形・調整で口縁端部に面をもつものをＢ類、ロクロ成形・調整のものをＣ類とする。

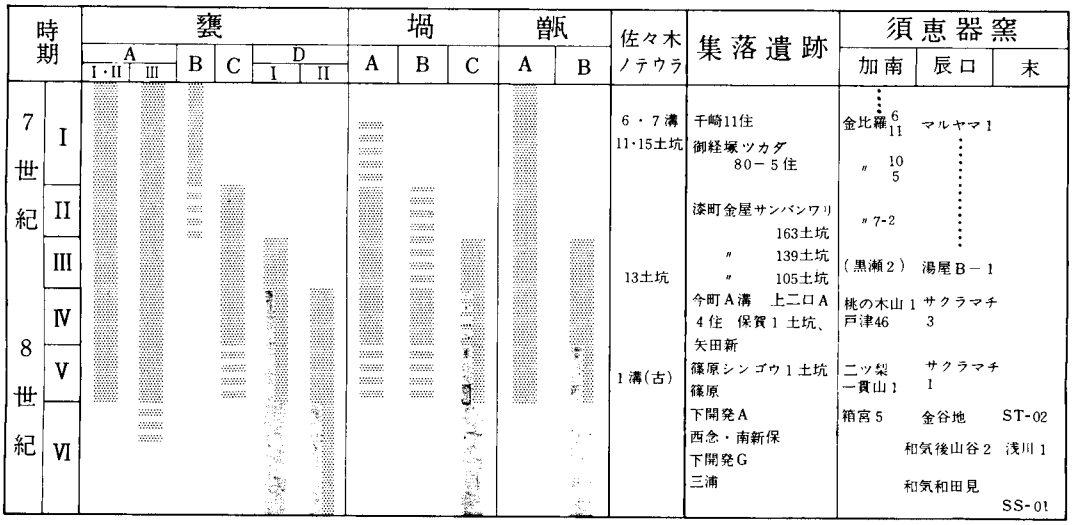
甑　古墳時代以来のものをＡ類、ロクロ成形・調整のものをＢ類[10]とする。

カマド形土器　8世紀前半代までは出土例[11]があるものの、散発的であり、出土しない遺跡のほうがむしろ一般的である。日常の使用に供する普遍的な器種とは言いがたい。

○Ⅰ期　6世紀以来の器種を継承する。基本的なセットは、甕ＡⅠ～ＡIII類、Ｂ類、甑Ａ類。ただし、堝Ａ類は該期に越前での出土例がある[12]ことから加賀においても存在の可能性は残る。該期の資料としては、本遺跡6・7号溝、11・15号土坑、千崎遺跡[13]11号住、御経塚ツカダ遺跡[14]80―5号住の出土品がある。

○II期　甕Ｃ類、堝Ａ類が出現する。該期の集落の調査例はほとんどなく、漆町遺跡[15]に断片的な資料があるにすぎない[16]。甕Ｃ類の口縁部形態は須恵器の手法からなんらかの形で影響を受けた[17]ものとみられる。堝Ｂ類の出現の可能性もある。

○III期　ロクロ土師器甕ＤⅠ類、堝Ｃ類[18]が出現する。甕Ｂ類は堝Ａ類の普及とともに消滅したものとみられる。ロクロ土師器出現の大きな画期であるが、その量比は極めて限られたものであり、基本的なセットはII期を継承している。該期の資料には本遺跡13号土坑出土品がある。



第3表　加賀における煮沸形態土師器の変遷

○IV期　各器種が最もバラエティーを持つ[19]段階で、ロクロ土師器が一定の割合を占めるようになるとともに、「北陸型」甕・堝が出現する。甕DII類も出現する[20]。該期の資料には、今町A遺跡[21]溝状遺構、上二口遺跡[22]A4号住、保賀B遺跡[23]1号土坑出土品などがある。

○V期　IV期と同様、各器種ともバラエティーに富むが、ロクロ製品の比率が5割近くに達し、甑も含めた「北陸型」煮沸土器セットが成立する。非ロクロ製品では、甕が強固に残存するが堝は比較的早くロクロ製品に移行しているようである。IV・V期の非ロクロ土師器とロクロ土師器の比率は遺跡の性格によってばらつきが大きいと予想される。該期の資料には、篠原シンゴウ遺跡[24]1号土坑、篠原遺跡[25]出土品がある。

○VI期　III期以来のロクロ土師器の出現による煮沸土器の混沌とした状況が払拭され、「北陸型」が確立し普遍的にその使用が認められるようになる。わずかに小型甕にAIII類とDII類の不定型なものが残存するにすぎない。本段階の比較的初期の資料は下開発遺跡[26]などで確認されている。

以上、各器種の消長をみてきたが、7～8世紀の加賀における煮沸土師器の変化の画期を整理すれば、II期（7世紀第3四半期）が甕C類の出現にみられる須恵器製作技法とのなんらかの接触、III期（7世紀第4四半期）がロクロ土師器の出現、IV期（8世紀第1四半期）が「北陸型」の出現、V期（8世紀第2四半期）が「北陸型」のセットとしての成立と一定の普及、VI期（8世紀第3四半期以降）が「北陸型」の確立と広範な普及の時期と位置づけられよう。従来の説と対比すれば、少なくとも加賀では、堝A類の出現が7世紀代に遡ること[27]、ロクロ土師器の出現が7世紀第4四半期にあることの2点で相違を見い出せる。「北陸型」普及（ロクロ土師器の普及）の時期の点ではほぼ同一の見解に達した。煮沸土師器の「北陸型」への転換には、吉岡氏が指摘したとおり、「一定の時間的経過」を要しており、律令制下の再編された須恵器工人によるロクロ土師器生産が、ただちに土師器工人を吸収ないしは消滅に追い込んだことは認めえないが、VI期

以後、土師器工人独自の土器生産体制は基本的には解体したものと理解している[28]。

第2節　掘立柱建物の柱穴内土器埋納について

掘立柱建物の柱穴からその建物の時期を決定しうる遺物が出土することは極く少なく、通常は土器少片が数点出土するか、あるいはまったく遺物が出土しない。しかし、完形もしくは完形に近い土器、銭、鉱滓などが出土することもあり、それらは柱穴の掘方部分から出土するものと、柱痕部分から出土するものがある。前者はこれまで地鎮・鎮壇行為を示すものとして注目されてきた[29]が、後者はあまり注目されておらず、漠然と祭祀行為とされたり、偶然の所産と考えられている。本節では本遺跡の2・3・4・5号建物などで確認された柱穴の柱痕部分から完形あるいは完形に近い土器が出土するという出土状態に注目し、これがいかなる意味を持つのかとその解明に向けて、まず石川県内の例を集成しその基本的事実の確認を行おうとするものである。

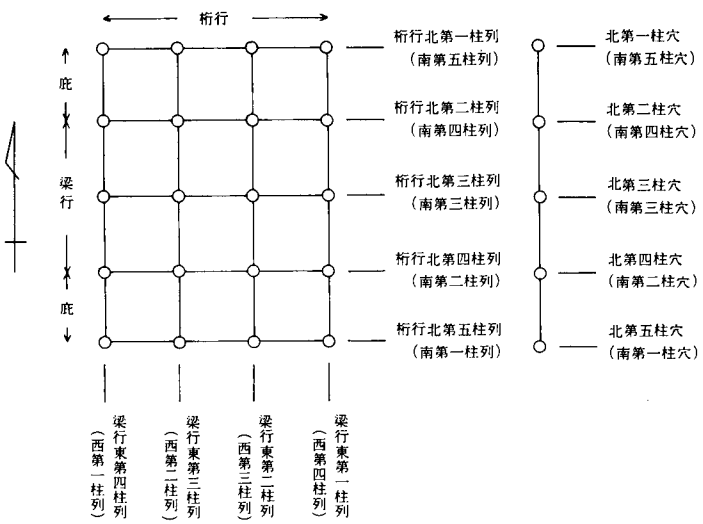
なお今回集成した資料には未発表のものも含まれるが、報告書刊行の予定が近い遺跡は遺構図や遺物実測図を掲載し、報告書刊行の予定が遠い遺跡は文中で触れるのみに留めた。協力していただいた各遺跡の調査担当者に深く感謝する次第である。また挿図中の掘立柱建物の柱穴の呼び方は『中島町小牧・外遺跡[30]』の報文を基本として第56図のように行ない、P—125のように柱穴番号のあるものはそれも併用した。

(1)　小松市佐々木ノテウラ遺跡（第57図、第58図）

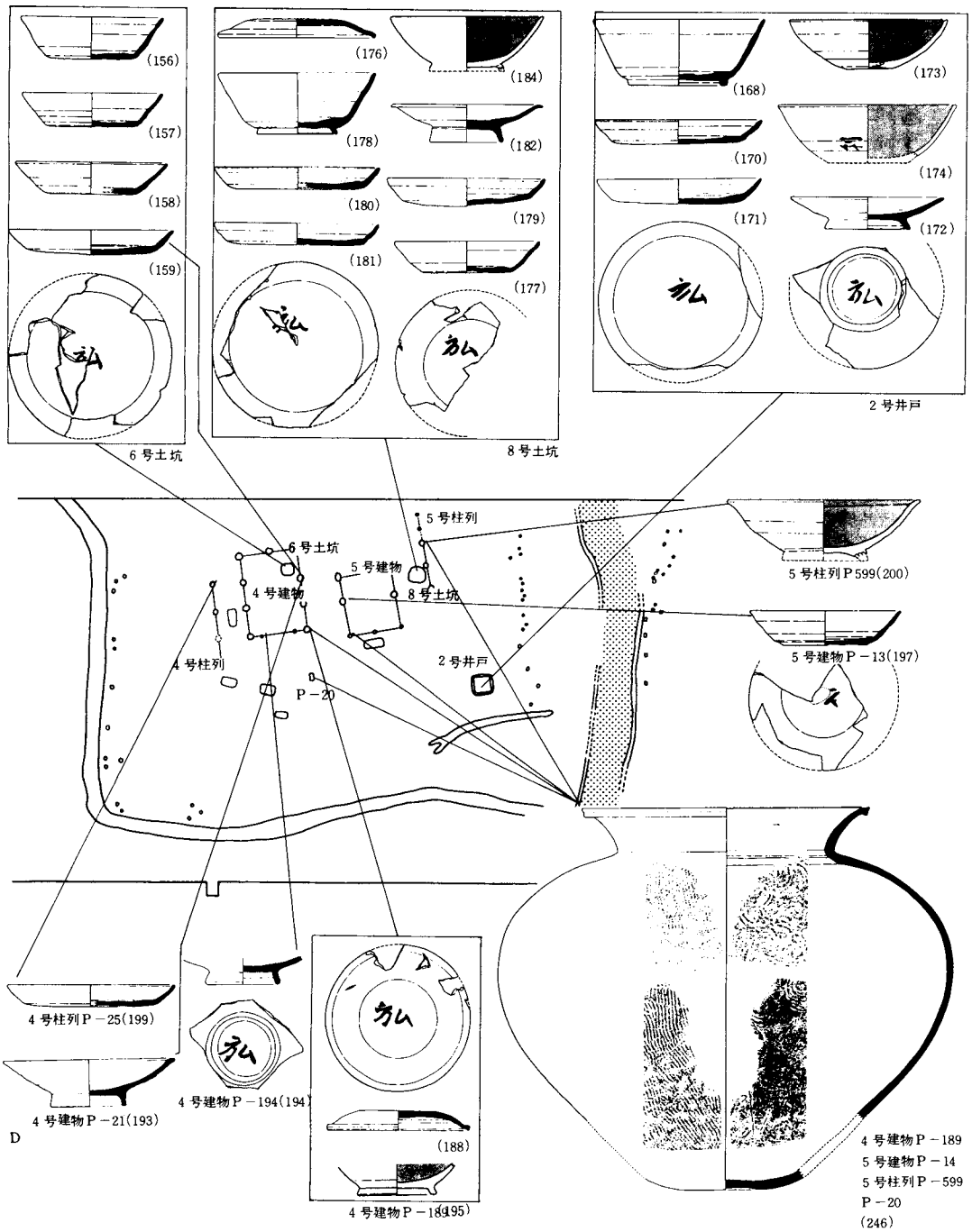
本遺跡では第III期とされた10世紀前半の掘立柱建物と第IV期とされた12世紀中葉～後半の掘立柱建物の中で柱穴の柱痕部分から完形に近い土器を出土するものが確認された。これらについては第3章で詳しく述べられているのでここではそこで触れられなかった部分について述べてみたい。

まず第III期のものについてである。（第57図）

4号建物は3間×2間の南北棟で柱はすべて抜き取られている。遺物は梁行南第1柱列東第2第3柱穴を除くすべての柱穴から出土している。その内桁行東第一柱列のP—21、P—189から完形に近い土器が出土している。これらの柱穴からは他に土器小片も出土して



第56図　掘立柱建物模式図(1)



いるがそれらも含め遺物は柱穴抜き取り後埋め戻された土層の上位に混在した状態で出土している。ただし完形に近い土器は正位でやや水平に近い状態で出土している。第56図193はP－21出土の須恵器有台皿で口縁の一部を欠損しており、また口縁端部内側にタール状のものが付着

している。188はP—189出土の須恵器杯蓋で口縁の一部を欠いている。外面には「㐅」の墨書があり、内面は墨溜として利用された痕跡がある。墨書土器はこの他にP—194から出土した須恵器有台杯底部があり、同じ「㐅」が書かれている。

5号建物は2間×2間の南北棟で4号建物の東に位置する。梁行南第一柱列東第1、第2柱穴と桁行東第1柱列北第1柱穴を除くすべての柱穴から遺物が出土している。197はP—13から出土した須恵器杯で底部に墨書が確認できる(判読不可能)。4号建物同様柱抜き取り後埋め戻された土層中からの出土である。

4号柱列は4号建物の西に位置する。残っている柱穴のすべてから遺物が出土している。199はP—25から出土した須恵器杯で内面が墨溜として利用されている。これも柱抜き取り後埋め戻された土層からの出土である。

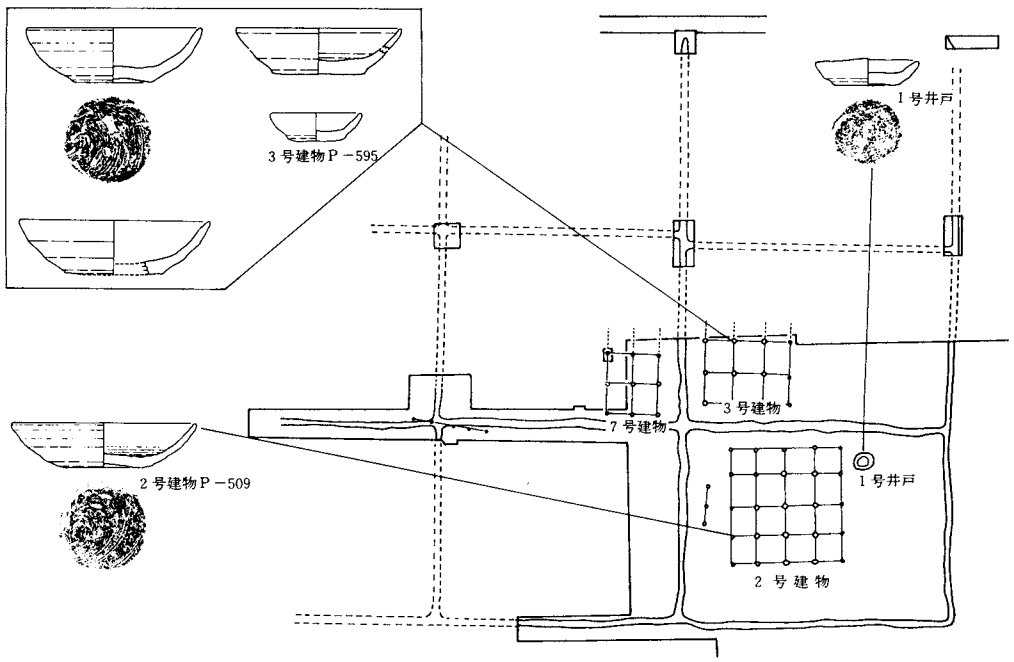
5号柱列は5号建物の東に位置する。柱列南第1、第2、第3柱穴から遺物が出土している。200はP—599から出土した土師器内黒椀である。これと246の須恵器大形甕の胴部大形破片が、246を下に200を上に重ねた状態で柱抜き取り後埋め戻された土層の最下位から出土している。

さて55図にはこれらと1つの屋敷を構成すると思われる6、8号土坑、2号井戸とその主な遺物を載せておいた。159、171、172、177、181のような4号建物の墨書土器と同じ「㐅」の字を持つものがある。また159、168は墨溜として利用された痕跡がある。159は4号建物P—21から出土した小片と接合している。これらは遺構を埋め戻した土層下部から出土している。

246は須恵器大形甕である。この胴部大形破片が4号建物P—189、4号建物東第一柱列の南延長上にあるP—20、5号建物P—14、5号柱列P—599から出土している。これらは5号建物P—14を除いて柱抜き取り後埋め戻された土層中の出土である。

以上佐々木ノテウラ遺跡第III期の例を見てきた。掘立柱建物、柱列の柱はすべて抜き取られ、5号建物梁行南第一柱列と5号柱列の一部の柱穴を除いた掘立柱建物、柱列の柱穴と、6、8号土坑、2号井戸で埋め戻しが確認されている。これらの遺構に伴う遺物の多くはこの埋め戻しの際一括して廃棄されたものと考えられる。この内5号柱列P—599は土師器内黒椀と須恵器大甕胴部大形破片が重ねられた状態で柱抜き取り後埋め戻された土層の最下位から出土していることにより、柱抜き取り直後に土器を埋納したと考えられる。他の遺構は埋め戻しがある程度進んだ段階で廃棄していると考えられるが、完形に近い土器が多く、墨書土器と墨溜に利用された土器が目立つ。墨書土器は遺跡全出土点数の約1/3がこれらの遺構から出土しており、書かれた字は2号井戸出土の「利」と5号建物出土の判読不可能なものを除いてすべて「㐅」である。また墨溜に利用された土器は遺跡全体で5点出土しているが4点がこれらの遺構出土である。墨書土器と墨溜に利用された土器が同時に廃棄されていることから、これら遺構出土の墨書土器は廃棄の際に書かれた可能性がある。また書かれないとしても意識的に墨書土器、墨溜に利用された土器を選んでいると考えられる。とすればP—599以外のものもやはり何らかの意図のもとに柱穴に入れられたものと思われこれらも埋納と言えるのではないだろうか。

つまり佐々ノテウラ遺跡の第III期の例は、屋敷の廃棄にあたって建物の柱を抜き取り主要遺構



第58図　佐々木ノテウラ遺跡(2)

を埋め戻すという行為が行なわれ、それに伴う土器廃棄の際に建物の柱穴に土器を埋納するという行為を行なったものと言える。

次に第IV期の例である。(第58図)

2号建物は4間×3間の南北棟で東側に庇を持つ総柱の建物である。柱はすべて抜き取られており、遺物は7つの柱穴から出土している。桁行西第1柱列のP—509から完形に近い土師器椀が柱痕部分の穴底に近い部分から逆位の状態で出土している。

3号建物は2号建物の北に位置する2間以上×2間の南北棟で東側に庇を持つ総柱の建物である。柱は梁行南第2柱列西第2柱穴にのみ残在し、他は抜き取られていた。土器は2つの柱穴から出土している。梁行南第3柱列のP—595の柱痕部分から土師器椀3、土師器小皿1が重ねられ正位でやや傾いた状態で出土している。

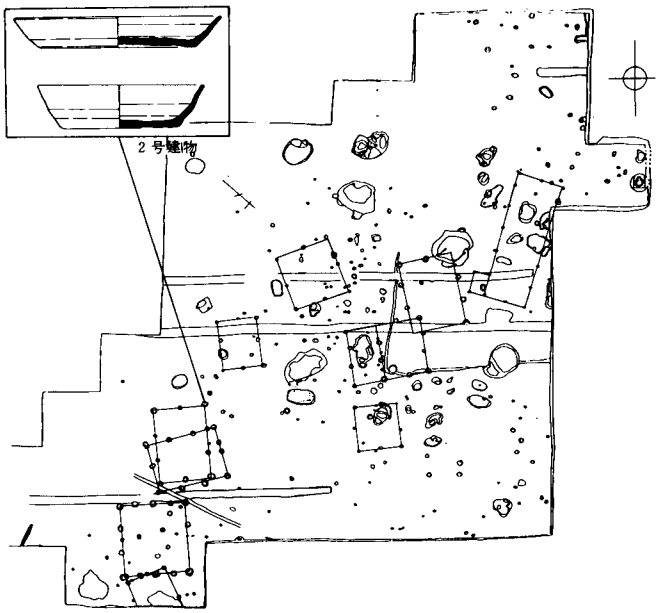
これらと1つの屋敷を構成すると考えられる7号建物では完形に近い土器の出土はないが、1号井戸から完形の土師器小皿が埋め戻しの土層中より出土している。

これらの遺構は1号井戸以外埋め戻しが確認出来なかった。しかし、2号建物P—509、3号建物P—595とも柱痕部分から出土していることにより廃棄段階以後のものと考えられる。3号建物P—595では土器が重ねられた状態であり、また、2号建物P—509の周辺からの土器の出土は少なく、偶然の流入とは考えにくい。以上の点よりこれらの柱穴は廃棄にあたって土器埋納行為が第III期のものとやや異なった状況の下で行なわれたと考えられる。

(2)　輪島市三井小泉遺跡[31]（第59図）

昭和60年に石川県立埋蔵文化財センターによって調査された遺跡で、標高110m前後の台地上に位置し、10棟の掘立柱建物が検出されている。これらの建物の内2号建物の柱穴から完形の土器が出土している。

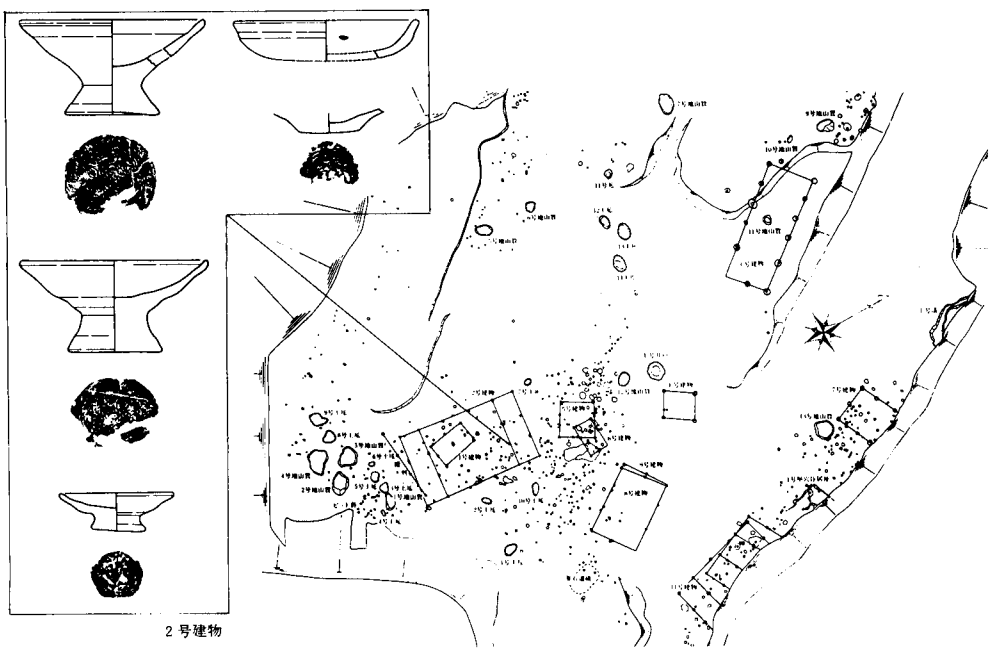
2号建物は3間×2間で主軸をN—45°—Eにとる。5つの柱穴から建物が出土しているが、桁行東柱列北第1柱穴から完形の土器が2個体出土している。1つは須恵器無台杯で1つは須恵器無台盤である。柱を抜き取り後の穴底中央部から、盤を上に杯を下にして正位で重ね、杯—蓋の関係のような状態で出土しており、廃棄に伴う埋納行為と考えられる。建物の時期はこれらの土器により9世紀前半と考えられる。屋敷構成、集落構成は不明である。



第59図　輪島市三井小泉遺跡

(3)　**鹿島郡中島町外遺跡**[32]（第60図）

昭和54年から55年にかけて中島町教育委員会（調査担当・石川県立埋蔵文化財センター）に



第60図　中島町外遺跡

よって調査された遺跡で、標高15～30m前後の海岸段丘およびこれに続く緩傾斜面上に位置し、12棟の掘立柱建物が検出されている。この内完形に近い形の土器が出土したのは2号建物の柱穴である。

2号建物は3間×3間の南北棟で南、北側の2面に庇を持つ総柱の建物である。完形に近い土器が出土したのは梁行北第2柱列東第2柱穴で、柱状の高台の付く土師器椀2、柱状の高台の付く土師器小皿1、土師器小皿2が重ねられた状態で出土しており、建物の廃棄の際に埋納されたものと報告されている。2号建物の時期はこれらの土器より13世紀前後と考えられるが、これも三井小泉遺跡同様、屋敷構成、集落構成は不明である。

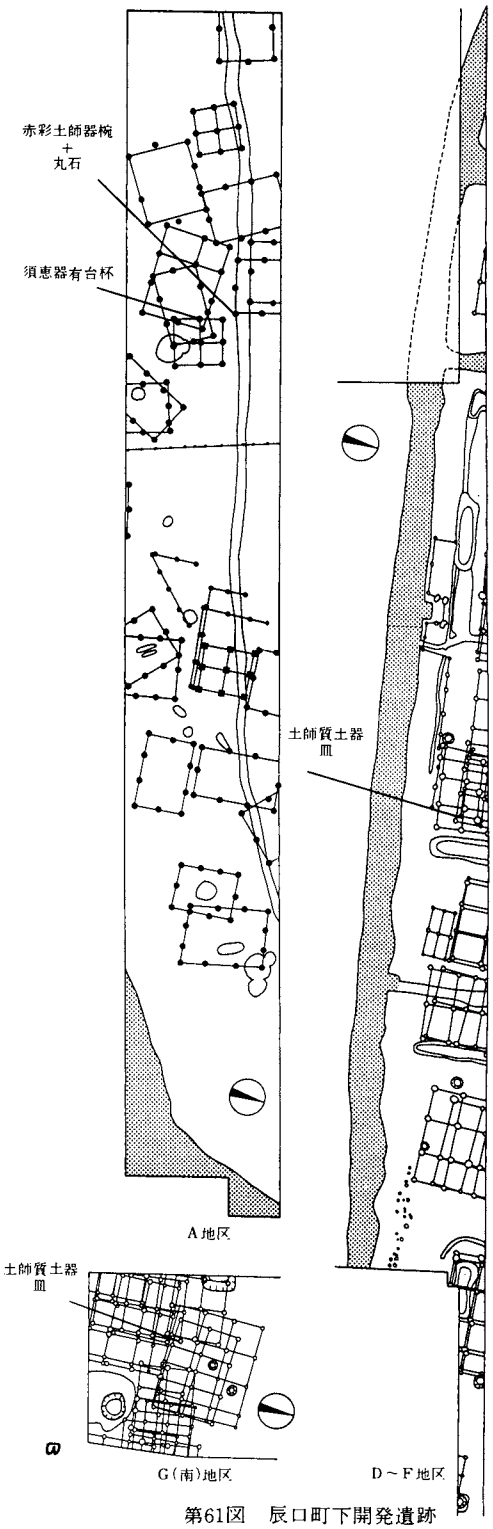
(4)　能美郡辰口町下開発遺跡[33]（第61図）

昭和57年から58年にかけて石川県立埋蔵文化財センターによって調査されている。遺跡は手取川左岸の扇状地上、扇側部に位置し、辰口西部遺跡群の1つとして捉えられている。整理作業の途中であるため掘立柱建物の棟数や集落構成などは不明であるが、A地区、D～F地区、G地区の掘立柱建物の中に柱穴から完形あるいは完形に近い土器の出土したものがある。

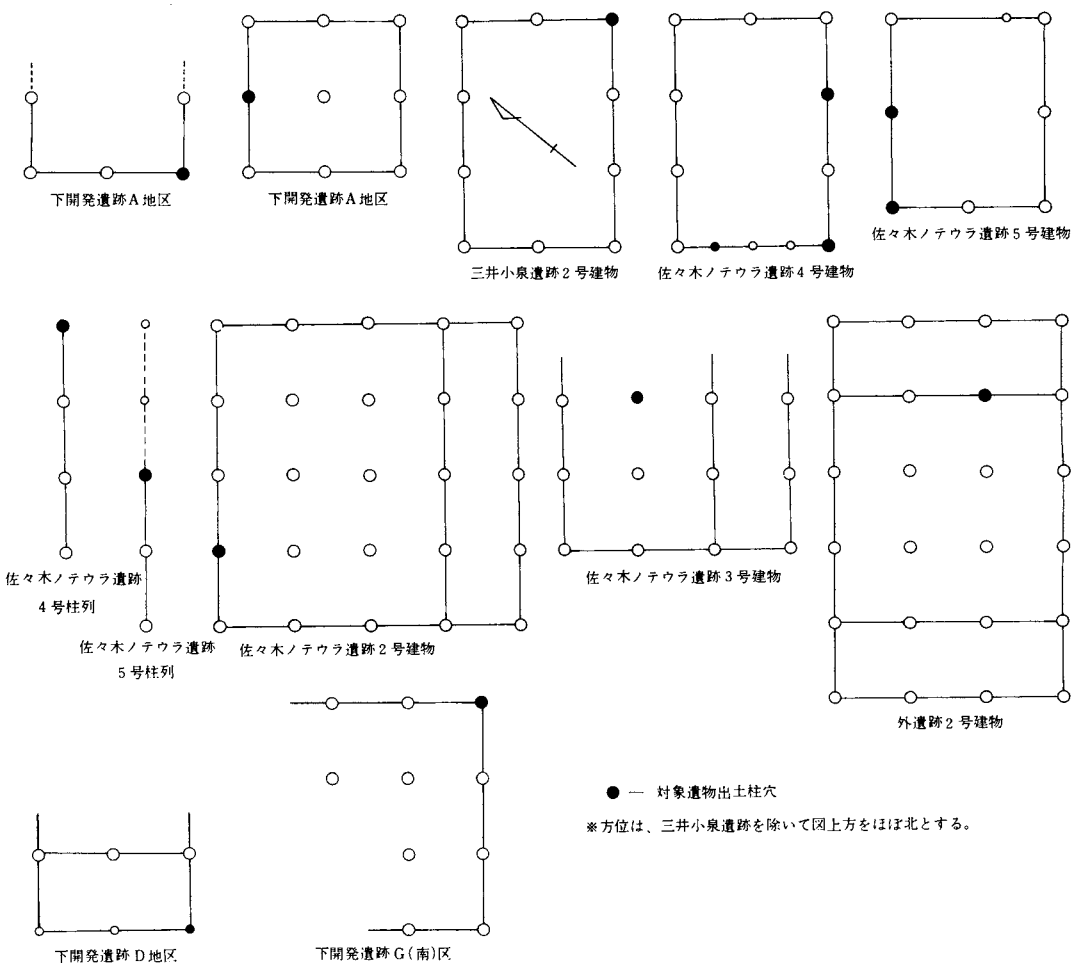
A地区では2棟の建物に例がある。1棟は2間以上×2間の南北棟で柱根は残っていない。完形に近い形の土器が出土したのは梁行南第一柱列東第1柱穴で、赤彩土師器椀の中に丸く磨かれた石がいれられた状態で柱穴の柱痕部分上位から出土している。

もう一棟は2間×2間の総柱の建物である。桁行西第1柱列北第2柱穴の柱根部分から須恵器有台杯の底部が出土している。この2棟は主軸をそろえることから同時存在した可能性がある。建物の時期はこれらの土器より8世紀の第3四半期と考えられる。

D～F地区では1棟の建物に例がある。この建物は1間以上×2間の建物で南面に庇を持つ。柱は



第61図　辰口町下開発遺跡



第62図　掘立柱建物模式図(2)

残っていない。完形の土師質土器皿が梁行南第1柱 列東第1柱穴の柱痕部分下位から出土している。建 物の時期はこの土器から14世紀前後と考えられて いる。

G地区では1棟の建物に例がある。この建物は3間×2間以上の建物で、梁行北第1柱列東第1柱穴の柱痕部分から完形に近い土質質土器皿が出土している。建物の時期はこの土器から14世紀前後と考えられている。

(5) 能美郡辰口町岩内遺跡テラダ地区[34]

昭和60年に石川県立埋蔵文化財センターによって調査された遺跡で、扇状地扇側部の島状地帯に位置する。整理作業の途中で掘立柱建物の規模や棟数、集落構成などは不明である。2つの柱穴から完形に近い土器が出土している。

1つは柱穴の柱痕部分上部から、1つは柱痕部分最下位から出土している。前者は須恵器杯で外底面に「石井」の墨書があり、後者は須恵器盤で内面が転用硯として利用され、外底面に墨書

（判読不可能）がある。

(6)　その他

これら5遺跡の他にも小松市漆町遺跡[35]、金沢市戸水C遺跡[36]、穴水町西川島遺跡[37]などで掘立柱建物の柱穴から完形あるいは完形に近い土器が出土している。これらの中には墨書土器、墨溜として利用されたものが出土した柱穴もあるが詳細は不明である。

以上7遺跡において掘立柱建物の柱穴柱痕部分から完形あるいは完形に近い土器が出土するという例のあることが確認できた。これらの内、漆町遺跡、戸水C遺跡を除く5遺跡は土器の出土が柱の残っていない柱穴の柱痕部分からの出土が確認出き、建物廃棄後、土器埋納行為が行われたと考えられる。しかしわずか5遺跡14例ながらいくつかのバリエーションが存在する。

この土器埋納行為は現在のところ下開発遺跡A地区の8世紀第2四半期の例がもっとも古く、下開発遺跡D～F地区、G地区の14世紀前後の例がもっとも新しい。この間は、三井小泉遺跡、岩内遺跡テラダ地区の9世紀前半、佐々木ノテウラ遺跡第III期の10世紀前葉、外遺跡、佐々木ノテウラ遺跡第IV期の12世紀中葉～後半と連続して見られるようである。

1遺跡内では、佐々木ノテウラ遺跡第III期のように多くの掘立柱建物、柱列で確認されたものもあるが、1遺跡内1、2例のものが多い。

第62図は遺構図の掲載出来た4遺跡12遺構について、1遺構内での土器埋納行為の行なわれた柱穴の位置を示したものである。佐々木ノテウラ遺跡第III期の建物のように1遺構内で2例以上確認出来るものもあるが、通常は1遺構内1例に限られるようである。位置については取り立てて言うほどの規則性が見られるわけではないが、総柱の建物は庇部分か側柱列部分に位置するものが多い。

柱穴柱痕部分のどのレベルから出土するかという点では2種類の例が見られる。1種は三井小泉遺跡2号建物などのように最下位付近から出土するもので、もう1種は佐々木ノテウラ遺跡4号建物のように上位から出土するものである。

埋納される土器は供膳形態のものが殆どであるが、佐々木ノテウラ遺跡5号柱列では須恵器甕の胴部大形破片が埋納されていた。埋納される土器数は1個体のものもあるが、三井小泉遺跡のように杯―蓋のような関係で埋納されたもの、外遺跡2号建物、佐々木ノテウラ遺跡2号建物、5号柱列のように2～数個体が重ねられて埋納されたもの、下開発A地区の丸石を椀の中に入れたものがある。

これら建物廃棄段階土器埋納行為が何を意味するのかは現在の所不明であると言わざるを得ない。建物建立前の埋納行為が地鎮、鎮壇をあらわすものとされていることから、建物廃棄段階土器埋納行為も何らかのまじない行為と考えられないこともない。廃棄に関する呪儀行為としては井戸について中・近世のものがある[38]が、建物についても呪儀行為があってよいと思われる。この意味の問題を含め、建物廃棄段階土器埋納行為全体について語るには本集成ぐらいではあまりに少ない。今後の資料の増加と全国レベルの集成が必要であろう。これは今後の課題としたい。

第3節　加賀における奈良・平安時代遺跡の動態

—加賀国府の所在地をめぐって—

加賀国は弘仁14（823）年、越前国より江沼・加賀の2郡を割いて立国した。その国府が、この年6月に江沼郡を割いて建てられた能美郡にあったということはもはや通説となった感がある。それは、各国の国府の所在地を示す基準史料として知られ、10世紀前半代に成立したとされる『和名類聚抄』（以下、『和名抄』）の国郡部の記載による。また中世の古辞書、『伊呂波字類抄』や『拾芥抄』にも同様の記載が見られる。従来の文献史学や歴史地理学的研究の成果は、加賀国府が小松市古府町（旧能美郡国府村）、梯川右岸の台地上にあったという点では異論を見ない。

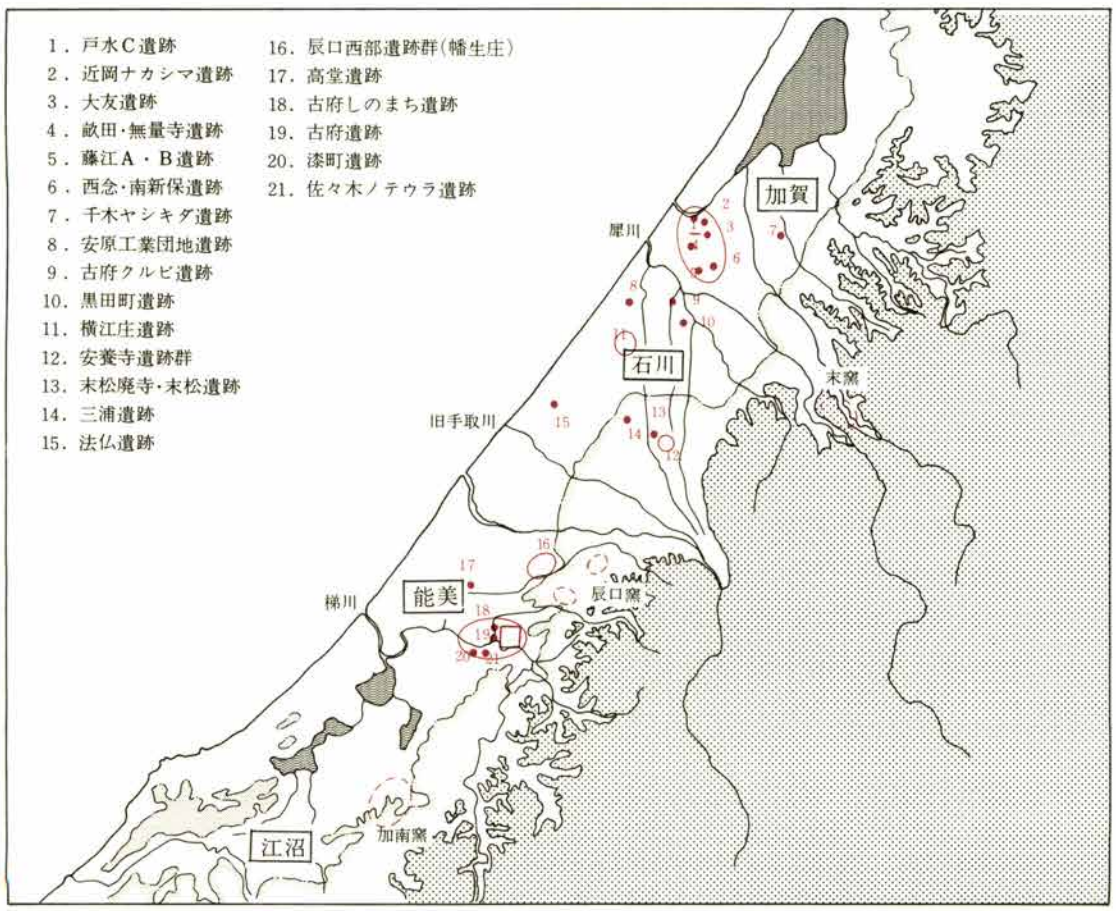
しかし近年、大東急記念文庫本『和名抄』（以下、大東急本）が紹介されるに至り、加賀国の国府の所在地については、その移転の可能性が問題となっている。弥永貞三氏[39]は、大東急本のほうが流布本よりもより原撰本の体裁を残したものとし、国名肩書註の記載は『和名抄』成立以前の貞観・元慶期を上限とする9世紀後半の状況を反映したもので、郡名下註のそれは肩書註より古い時期のものと推定した。すなわち加賀国に照らして言えば、立国後、9世紀前半代は加賀郡に国府が所在し、9世紀後半には能美郡へ移転したということになる。一方、木下良氏[40]は、「郡名註の国府をそれ以前にさかのぼらせることは、加賀国の場合考えられない」とし、大東急本の国府所在に関して矛盾のある他の5国についても、「全体を通じて考えると、肩註を前として郡名註を後とする方が適当」として、弥永氏とは逆の見解を提示している。また、『色葉字類抄』（前田本・黒川本）の国府所在の記載についてはその成立時の12世紀中頃の状態を示している可能性が強いとして、これと密接な関係にある大東急本『和名抄』の郡名下註の国府記載もそれと近い時期のものと考えた。それにしたがって氏は、加賀では平安時代後期に能美郡から加賀郡へ国府が移転したとする仮説を立て、加賀郡の国府候補地としては金沢市古府（古保）に注目している。しかしこの点については、吉岡康暢氏[41]が『源平盛衰記』などの史料から考定したように「11～12世紀代には、加賀国府—府南社—国分寺—中宮八院が相互に近接して」古府台地とその周辺に所在したことは疑いない。ただ木下氏が摂津国の例と『色葉字類抄』の出羽・越中・備前・大隅の諸国でその可能性を考えた、「国府」と「府」の併置という現象が実在し、加賀の場合でもそれが考えられるのなら問題は残る。

本稿では当初、加賀国府の所在地・移転の問題を考古学的な面からアプローチすることを目的としたが、資料的制約や筆者の力量不足から断念せざるを得なくなった。そこで、二・三の気づいた点を記して将来への問題提起としたい。

加賀国府として従来から認められてきた古府台地周辺の考古学的な調査はさほど多くはない。台地上は過去の土地改良事業等によって十分な調査を経ないまま削平され、現在では地山が露呈し遺物の散布も認められない。僅かに部分的な調査が実施された古府廃寺（十九塔山）では10世紀中頃の瓦が出土しており、吉岡氏は同廃寺を山岳仏教系寺院とし、平安時代中期の加賀国分寺に想定している[42]。台地周辺部の遺跡としては、古府しのまち遺跡[43]、古府遺跡[44]、梯川を挟んで対岸の左岸一帯では、漆町遺跡[45]、佐々木アサバタケ遺跡[46]、本遺跡などが発掘調査されてお

第4表　諸古辞書に見る国府所在郡の異同（木下1982、一部加筆）

国名	和名類聚抄 流布本 国名下註	和名類聚抄 流布本 郡名下註	和名類聚抄 大東急本 国名肩註	和名類聚抄 大東急本 郡名下註	色葉字類抄 郡名下註		伊呂波字類抄 郡名下註	拾芥抄 郡名下註	
加賀	**能美**	**能美**	**能美**	**加賀**	**加賀府**		**能美府**	**能美府**	
越中	射水	—	射水	礪波	礪波国府	射水府	射水府	射水府	
志摩	英虞		英虞	答志	答志府		英虞府	英虞府	
飛騨	大野	—	大野	益田	益田国府		大野府	大原府	
出羽	平鹿	出羽	平鹿	出羽	平鹿府	出羽府	平鹿府	出羽府	
備前	御野	—	美能	上道	上道国府	御野府	御野府	御野府	
肥前	—	小城	—	小城	佐嘉国府		佐嘉国府	—	
肥後	—	益城	—	益城	飽田国府		飽田府	飽田府	益城府
大隅	—	桑原	—	桑原	桑原国府	曽於府	—	贈於府	
摂津	保安元年（1120）「摂津国大計帳案」西生府　住吉国府								



第63図　加賀中央部における奈良・平安期の主要遺跡（S＝1/400,000）

り、それらの調査成果と台地上で採集された遺物[47]から加賀国府想定地の梯川中流域の遺跡群の動向をみると、8世紀後半はもとより9世紀前葉～中葉の状況が著しく貧弱なことに気がつく。9世紀後葉に至って徐々に遺跡は増加するが、それは小規模なもので、飛躍的な発展を遂げるのは10世紀前葉～同中葉である。この頃、漆町遺跡では多量の緑・灰釉陶器や11点にも及ぶ石帯が出土し、「国衙機構に連らなった有力農民層の存在を示す[48]」とされるように、また、古府台地に瓦葺き建物が登場することや窯業生産地―戸津窯跡群の急激な生産拡大などに見られるように、国府所在地に相応しい状況を呈している。以後遺跡は一時衰退するが、12世紀になって再び活発な展開をみせる[49]ようになる。

一方、加賀郡の状況はどうであろうか。当地では、金沢平野の北西部、犀川・大野川・浅野川に挟まれた強粘性灰色低地土壌の地域に律令期の遺跡が密集する[50]。8世紀後半代には、西念・南新保遺跡[51]や藤江B遺跡[52]で「庄」の墨書土器が出土したように、庄園経営を契機として開発が始まったとみられ、9世紀前半にも、いわゆる大型建物を含む畝田・無量寺遺跡[53]、千木ヤシキダ遺跡[54]が存在する。9世紀後半～10世紀前葉に遺跡群はピークを向え、官衙級遺跡とされる戸水C遺跡[55]、藤江A遺跡[56]、近岡ナカシマ遺跡[57]、安原工業団地遺跡[58]で大型建物が検出されている。このような遺跡群のあり方を国衙に付随する「曹司」地区的なものとして把える意見も出されている[59]。また千木ヤシキダ遺跡では11世紀の9間以上×2間で両面廂、大規模な柱穴掘り方をもつ建物が検出されており、10世紀中葉以降急速に衰退する当地の遺跡群のなかでは、官衙級遺跡として注目される。古府町周辺では、古府クルビ遺跡[60]、黒田町遺跡[61]で奈良時代の屋瓦が出土し、後者の遺跡で9世紀後半～10世紀前葉の遺物が出土したほかは顕著な遺跡は調査されていない。加賀郡に国府の所在を求めれば、遺跡群の動態からみて可能性のあるのは9世紀前半～10世紀前葉、11世紀の2時期であろう。

以上、梯川中流域と金沢平野北西部の遺跡群の動態を大まかに対比してみたが、その変遷には微妙なズレのあることは確かである。なかでも、加賀立国当初の9世紀前半～中葉の時期に前者の地域で顕著な遺跡が認められないのは不可解な感を与えている。もとより、遺跡の動態を扱う際には未発見のものを考慮せねばならないことは言うまでもないし、個々の遺跡の性格を吟味して比較せねばならないものも当然である。能美郡の国府想定地の遺構確認が不可能に近い現在、考古学の面から国府の所在地・移転の問題に迫るには、先の点をふまえて、各想定地とその周辺を含めた広い地域の遺跡の総合的な検討作業を地道に行っていくしかない。ここでは、単に問題提起に終ったがその作業は今後の課題としたい。加賀立国当初の国府所在地については再検討の必要があるように思えてならない。

註(1) 坂井秀弥 1983 a 「越後における七・八世紀の土器様相と画期について」『信濃』第35巻第4号 信濃史学会、同 1983 b 『栗原遺跡第6次発掘調査概報』 新潟県教育委員会

(2) 岸本雅敏 1982 「東江上遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町土器・石器編』 上市町教育委員会

(3) 吉岡康暢 1983 「奈良平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』 松任市教育委員会・石川考古学研究会

(4)　註(2)(3)文献。ここではVI期以降に斉一化される甕D類、堝C類、甑B類を「北陸型」煮沸土器セットと呼称しておく。なお甑は9世紀代の例が不明確なものの、8世紀後半代には口縁部断面がB字状となり直線的な体部に底端部が内側に張り出すタイプが主流になるとみられ、形態に差はあれ、甕DⅠ類「北陸型」に準じた成形・調整法のもの甑B類の「北陸型」と把えておく。

(5)　小笠原好彦・西弘海　1976　「平城宮Ⅰ～Ⅶの大別」『平城宮発掘調査報告』Ⅶ　奈良国立文化財研究所

(6)　木立雅朗　1985　「能美窯跡群の須恵器編年　(1)北群」『辰口町湯屋古窯跡』　辰口町教育委員会

(7)　小松市桃の木山窯跡群、同湯屋窯跡群、高松町八野窯跡群などで検出されている8世紀第1四半期頃の小形平窯については、同期に出現する赤彩土師器の生産を主目的とした窯と考えられる。煮沸形態ロクロ土師器は、坂井氏の指摘するように（坂井1983ａ）、須恵器窯内で酸化焔焼成されたもので、窯体内・灰原から出土する還元化したものは、須恵器として焼成された（岸本1982）のではなく、不良品として廃棄されたものと考えうる。なお、10世紀段階の戸津窯跡群の土師器平窯では甕の生産が行われている。

(8)　註(3)文献

(9)　奈良時代の須恵器、土師器の機能分化（吉岡1979「北陸の須恵器」『世界陶磁全集』2　日本古代　小学館）やロクロ土師器甕の存在（坂井1983ａ）は、越後も含めた汎北陸的な政治色の濃い現象と理解できるが、ここではロクロ土師器の出現・普及には若干の地域差も存在するという見通しから加賀地方に限定した。第3表では加賀中部へも多量の製品を供給したとみられる高松町～押水町の河北窯も考慮すべきであったが、その変遷が整理されていないので今回は除外した。

(10)　B類は註(4)で述べたもののほかバラエティーがあり、口縁形態では端部はいづれも面をなすが、直立するもの、くの字状のもの、断面D字状のものがあり、底部形態では内湾しながら終るもの、外へ水平～ハの字状に開くものがある。

(11)　カマド形土器は、5世紀後半代のものが富来町高田遺跡、志賀町中村畑遺跡、7世紀～8世紀のものが七尾市細口源田山遺跡、穴水町曽福遺跡、中島町外遺跡、七尾市古府タブノキダ遺跡、羽咋市寺家遺跡、鹿島町徳前C遺跡で出土しており、能登に多いのが大きな特長となっている。

(12)　坂井町長屋遺跡、山口充氏の好意により実見。

(13)　四柳嘉章・高橋裕　1972　『加賀市千崎・大畠遺跡』　石川県教育委員会

(14)　吉田淳　1984　『御経塚ツカダ遺跡発掘調査報告書』Ⅰ　石川県野々市町教育委員会

(15)　田嶋明人他　1982　『漆町遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

(16)　田嶋明人氏教示。同遺跡金屋サンバンワリ地区163号土坑。

(17)　該期の羽咋市柳田タンワリ1号窯では、叩打・ケズリ・カキメ技法を伴う土師器長胴甕の形態に類似した土師質の甕が灰原から出土している。甕C類の出現とともに須恵器工人が土師器製作に関与する前段階の様相として興味深い。

(18)　堝C類の集落での出土例は現在のところ未確認だが、辰口町湯屋窯跡群内の製品集積地で須恵質のものが出土しており、土師器の製品も存在した可能性が強い。同窯跡群の中では若干後出的なＡⅠ支群からは内面にカキメ調整を施す土師器堝が表採されている。

(19)　Ⅳ・Ⅴ期は煮沸土師器の非ロクロからロクロ製品への転換期で最も複雑な様相を呈する。Ⅳ期の須恵器窯のほとんどで煮沸土師器の生産が開始されていたとみられるが、依然として旧来の土師器生産体制による製品の供給が存続したためこのような状況を呈したと考えられる。なお該期には、保賀B遺跡1号土坑出土品にあるような外面ケズリ調整の甕が存在する。

(20)　小松市桃の木山1号窯の窯体内で出土している。

(21)　橋本澄夫　1982　『石川県金沢市今町A遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

(22)　中島俊一　1982　『松任市上二口遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

(23)　石川県立大聖寺高等学校郷土研究部　1969　「加賀市保賀B地点遺跡の調査」『石川考古学研究会々誌』第12号　石川考古学研究会

(24)　田嶋正和他　1983　『篠原シンゴウ遺跡発掘調査報告』　加賀市教育委員会

(25)　1980年度、石川県立埋蔵文化財センター調査。該期の良好な土坑資料がある。報告書近刊予定。

(26)　1982年度、石川県立埋蔵文化財センター調査。

(27)　吉岡氏は註(3)文献でその出現を氏の編年$Ⅰ_1$期においているが、その後の調査資料から本稿Ⅱ期に遡ること

は明らかである。

(28) 吉岡氏が註(3)文献で、II期（8世紀後半）には「甕類は、伝統的な紐巻き上げ成形、刷毛目調整の個体は激減し」として、「なお8世紀代を通して旧来の紐巻き上げ品が併存する」とした点については、その根拠とされる三浦遺跡中層出土資料の評価にかかるが、もし仮にその資料を認めえたとしても、土師器工人の存続を示しうるだけの量比はこの段階では持たないと考えられる。8世紀後半代の調査資料の蓄積を待ちたい。

供膳形態土師器については、赤彩土師器は9世紀前半代まで一定の比率を占めて存続するが、器種等から考えてその生産は8世紀初頭以来、一貫して須恵器工人組織下にあったとみられる。黒色土師器は、その技法自体は伝統的なものであるが、非ロクロ煮沸土師器と同様に8世紀後半にはほとんどみられなくなる。9世紀前半のある段階に再び出現し量を増す黒色土師器は新器種の椀・皿であって、多くが外面を赤彩としたいわゆる赤彩黒色土師器であることから、これも赤彩土師器と同じ生産体制のなかで産み出されたものと把えられる。8世紀後半代までは、供膳形態土師器の主体はあくまでも赤彩土師器であったと言える。黒色土師器主体に転換するのは9世紀半ば頃であろう。

9世紀後半のある段階（給分小袋窯期）から急激にその量を増す供膳形態土師器は、黒色土師器も含め、その器形は新器種の椀・皿であって8世紀～9世紀前半代までの赤彩土師器を主体とした供膳器の系譜に連なるものではない。この段階は律令期土器生産体制第2の大きな画期と位置付けられており（坂井秀弥 1984「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器」『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告』I　新潟県教育委員会。田嶋明人 1985「加賀地域にみる10世紀～13世紀にかけての土師器の変遷」（「第4回中世土器研究会集会発表資料」、近刊予定の漆町遺跡の調査報告書参照）、従来の供膳器―須恵器主体のあり方が大きく転換する時期である。その背景には、この段階の施釉陶器の多量の流入といった現象も一つの大きな要因と考えられるが、少なくとも従来の供膳形態土師器の流れの範疇で把えられるものではない。この時期に土器生産体制がどのように変容したかは今のところ定かでないが、供膳形態土師器も他の土器とともに、この時点で変容をみた新たな土器生産体制の中で生産されたものであろう。以後、積極的に須恵器の中にその器種が取り込まれていったのも、そのような事情を反映したものと受けとれ、奈良時代以降の一元的な生産体制を継承すると推察している。

以上、冗長な補足説明となったが、課題は7世紀末ないし8世紀初頭に再編成されたと考えられる「律令的土器生産体制」（岸本 1982）の内容、すなわち、再編の主体であったとみられる在地支配機構との関わりやより具体的に旧来の須恵器工人集団と土師器生産者の実体を明らかにし再編の過程を跡付けることであろう。

土器生産体制の問題を論じる際に、三辻利一氏や吉岡・木立氏が述べる（註3、6文献）ように、胎土分析の成果は重要な意味を持つと口える。本稿III～V期のロクロ土師器と須恵器、ロクロ土師器と非ロクロ土師器の生産地の問題について、古墳時代以来の非ロクロ土師器が集落近隣から採土したものによると仮定し、また江沼盆地と小松丘陵の胎土に差があると仮定した場合、例えば、保賀B遺跡や篠原遺跡の非ロクロ土器師甕・ロクロ土師器甕・須恵器の胎土分析を実施することによって多くの示唆に富んだ結果が得られよう。ただ胎土分析等の自然科学的な調査の成果を援用する場合には、それ以前に考古学的な方法による資料的裏付けが不可欠なことは言うまでもない。

本稿は土器生産体制の問題を論じることが主目的ではないので、その点については別稿に譲ることとしたい。

(29) 元興寺文化財研究所　1984　「特集　地鎮・鎮壇」『古代研究』28・29

(30) 谷内尾晋司・米沢義光・浜野伸雄他　1981　「遺構」『中島町小牧・外遺跡』　中島町教育委員会

(31) 報告書近刊。

(32) 註(30)文献

(33) 報告書近刊。概要は北野博司　1985　「徳久・荒屋遺跡」『昭和59年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』　石川県立埋蔵文化財センターを参照。

(34) 報告書近刊。山本直人　1986　「辰口町岩内遺跡テラダ地区出土の墨書土器」『拓影』第20号（『石川県立埋蔵文化財センター所報』）

(35) 註(15)文献

(36) 戸澗幹夫他　1983　『金沢市戸水C遺跡(6)』　石川県教育委員会

(37) 四柳嘉章他　1980　『西川島・I』　穴水町教育委員会

(38) 水野正好　1985　「招福・除災―その考古学―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集, 国立歴史民俗博物館

(39)　弥永貞三　1977　「大東急記念文庫本『和名類聚抄』の国郡部記載について」『歴史地理』　93巻1号　日本歴史地理学会
(40)　木下良　1982　「大東急記念文庫本『和名題聚抄』と前田本・黒川本『色葉字類抄』に見る加賀国府と越中国府」『北陸都市史学会報』No.4　北陸都市史学会
(41)　吉岡康暢　1976　「平安前期の地方政治と国分寺（上）―加賀国分寺をめぐる問題」『金沢大学日本海域研究報告』第8号　金沢大学日本海域研究所
(42)　註(41)文献
(43)　橋本澄夫・小村茂　1974　『古府しのまち遺跡』　石川県教育委員会
(44)　米沢義光　1985　「古府遺跡」『昭和59年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』　石川県立埋蔵文化財センター
(45)　註(15)文献
(46)　米沢義光　1985　「佐々木A（アサバタケ）遺跡」『昭和59年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』　石川県立埋蔵文化財センター
(47)　註(41)文献
(48)　註(15)文献
(49)　漆町遺跡、古府遺跡、本遺跡などで掘立柱建物群や顕著な遺物の出土がみられる。
(50)　出越茂和　1983　「金沢市内における律令時代の遺跡」『金沢市畝田・無量寺遺跡』　金沢市・金沢市教育委員会
(51)　宮本哲郎他　1983　『金沢市西念・南新保遺跡』　金沢市・金沢市教育委員会
(52)　四柳嘉章　1976　「金沢市藤江A・B遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』III　石川県教育委員会・石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団
(53)　出越茂和他　1983　『金沢市畝田・無量寺遺跡』　金沢市・金沢市教育委員会
(54)　1984年度、金沢市教育委員会調査。調査担当出越茂和氏教示。
(55)　註(36)文献
(56)　註(52)文献
(57)　1984年度、金沢市教育委員会調査。調査担当出越茂和氏教示。
(58)　宮本哲郎　1977　『金沢市安原工業団地遺跡』　金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会
(59)　戸澗幹夫、出越茂和氏教示。
(60)　橋本澄夫他　1976　「金沢市古府クルビ遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』III　石川県教育委員会・石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団
(61)　南久和他　1979　『金沢市黒田町遺跡調査報告書』　金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会

遺物観察表

番号 出土地点	器種	法量 (cm)	色調	胎土／焼成	備考
第6図					
1 落ち込み D－6区	浅鉢		茶褐	粗砂多／良	
2 落ち込み D－9区	甕	口径18.0	灰褐	粗砂多／良	
3 包含層 C－9区	甕		淡黄灰	粗砂多／良	
4 包含層 D－7区 D－8区	壺		(外)淡黄褐(内)暗灰褐	粗砂多／良	
5 包含層 D－7区	甑		(外)淡灰(内)黒	粗砂多／良	穴8～9
第9図					
6 6号溝 D－7区	蓋	口径12.5 器高 (4.9)	暗青灰	並／良	他D7－包
7 6号溝 C－5区	蓋	口径 (11.8) 器高 (3.2)	青灰	並／良	
8 6号溝 D－7区	甕		淡灰	並／良	他D8－落、D7－包、D8－12土坑
9 6号溝 C－5区	甕		淡青灰	並／やや不良	他B6・7、C6－包
10 6号溝 A－3区	高杯		淡青灰	並／良	
11 6号溝 B－4区 C－5区	甕	口径15.2	青灰	並／やや不良	他B6－7溝東端部、A5、B3・5・6－包
12 6号溝 D－7区	甕	口径22.0	淡灰	並／やや不良	他C9・C10、D6・7・8・9、E－7包 肩部に沈線
13 6号溝 B－4区	椀		茶褐	並／良	
14 6号溝 C－4区	高杯		淡灰褐	粗砂多／やや不良	杯部内面黒色
第12図					
15 7号溝 A－4区	平瓶	口径 (6.0) 器高 (13.1)	青灰	並／良	他C8－16溝、B6・7・9、C7・8、D7・8－包
16 7号溝 東端部 B－6区	甕	口径7.7 器高9.9	淡灰	細砂多／良	他B6－包
17 7号溝 B－6区	台付壺		淡灰	並／良	他B6－包
18 7号溝 B－5区	甕	口径20.6	暗青灰	細砂多／良	他B2・3－包、D3－1溝
19 7号溝 B－5区	甕	口径16.2	灰白	並／2次焼成	他7溝東端部に破片多数
20 7号溝 B－6区 東端部	甕	口径 (13.1)	淡茶褐	細砂多／良	
21 7号溝 B－5区	甕	口径13.6	淡橙褐	並／良	
22 7号溝 B－6区	甕		淡灰褐	細砂多／良	
23 7号溝 B－5区	甕		淡黄褐	並／良	
24 7号溝 B－5区	小型土器	口径6.8 器高5.4	淡灰褐	粗砂多／良	他A5－攪乱土
25 7号溝 B－6区	甕	口径23.9 器高 (22.5)	(外)淡灰褐(内)淡褐	細砂多／良	
26 7号溝 B－6区	甑 (把手)		淡黄灰	粗砂多／良	
27 7号溝 B－5区	甑 (把手)		淡茶褐	粗砂多／良	
第15図					
28 11号土坑 C－1区	高杯 (無蓋)	口径15.8	淡灰	並／やや不良	
29 11号土坑 C－1区	高杯		淡灰褐	並／良	
30 11号土坑 C－1区	甕	口径19.0 器高24.0	淡茶褐	細砂多／良	
31 15号土坑 C－1区	椀 (蓋)	口径13.0 器高 (3.8)	(外)暗灰(内)淡灰	並／良	
32 15号土坑 C－1区	椀	口径12.2 器高4.6	淡灰褐	粗砂多／良	
33 15号土坑 C－1区	甕		淡橙褐	並／良	
34 15号土坑 C－1区	甕	口径22.0	淡黄褐	細砂多／良	
35 15号土坑 C－1区	甕	口径 (16.3)	橙褐	粗砂多／良	
36 P－327 B－5区	甕	口径32.0	(外)淡灰(内)暗灰	並／2次焼成	他A4、B3・4・6、C4－包
•37 11号土坑 C－1区	甕		(外)淡灰(内)黒灰	並／2次焼成	他15土坑、1溝、3溝、4溝、6溝、7溝、24溝、P－22、B0・2・3・4・5・6、C4、D2・3・4・6・8－包 36と同一個体
第17図					
38 13号土坑 C－0区	蓋		淡黄灰	並／2次焼成	
39 13号土坑 C－0区	蓋	口径10.8	淡灰	並／良	
40 13号土坑 C－0区	蓋	口径11.2 器高 (2.5)	淡灰	並／良	
41 13号土坑 C－0区	蓋	口径13.8	青灰	細砂多／良	
42 13号土坑 C－0区	蓋	口径12.7 器高3.0	淡灰	細砂多／良	47とセット
43 13号土坑 C－0区	蓋	口径14.2	淡黄灰	並／2次焼成	

番号 出土地点	器種	法量 (cm)	色調	胎土 焼成	備考
44 13号土坑 C－0区	蓋	口径13.9	(外)淡灰褐(内)暗灰	並／良	
45 13号土坑 C－0区	杯		暗青灰	並／良	
46 13号土坑 C－0区	杯	口径10.4 器高 3.3	青灰	並／良	他C 0－包
47 13号土坑 C－0区	杯	口径12.2 器高 4.0	淡灰	細砂多／良	他C 0－14土坑、42とセット
48 13号土坑 C－0区	高杯	口径15.1	淡灰	並／良	他C 0－包
49 13号土坑 C－0区	椀 (有台杯)	口径17.1	灰	並／良	体部に二条の沈線
50 13号土坑 C－0区	高杯 (杯部)	口径15.6	(外)淡茶褐(内)黒	並／良	
51 13号土坑 C－0区	高杯 (脚部)		淡黄褐	細砂多／良	
52 13号土坑 C－0区	高杯 (脚部)		淡褐	細砂多／良	
53 13号土坑 C－0区	高杯 (裾部)		淡橙褐	並／良	
54 13号土坑 C－0区	高杯 (裾部)		淡橙褐	並／良	
55 13号土坑 C－0区		口径17.5	茶褐	並／良	
56 13号土坑 C－0区	甕	口径14.0	(外)淡橙褐(内)茶褐	細砂多／良	I_1類
57 13号土坑 C－0区	甕	口径15.8	橙褐	並／良	〃
58 13号土坑 C－0区	甕	口径 (15.8)	淡橙褐	並／良	〃
59 13号土坑 C－0区	甕	口径16.6	茶褐	並／良	〃
60 13号土坑 C－0区	甕	口径17.1	淡黄褐	並／良	〃
61 13号土坑 C－0区	甕	口径17.2	茶褐	並／良	〃
62 13号土坑 C－0区	甕	口径17.2	淡橙褐	並／良	〃

第18図

63 13号土坑 C－0区	甕	口径19.2	淡茶褐	細砂多／良	I_2類
64 13号土坑 C－0区	甕	口径20.3	淡橙褐	並／良	〃
65 13号土坑 C－0区	甕	口径20.4	淡橙褐	並／良	〃
66 13号土坑 C－0区	甕	口径22.8	灰褐	並／良	〃
67 13号土坑 C－0区	甕	口径22.4	淡黄褐	並／良	〃
68 13号土坑 C－0区	甕	口径17.8	橙褐	並／良	II類

番号 出土地点	器種	法量 (cm)	色調	胎土 焼成	備考
69 13号土坑 C－0区	甕	口径16.0 以上	灰褐	並／良	〃
70 13号土坑 C－0区	甕		淡褐	並／良	III類
71 13号土坑 C－0区	底部		淡茶褐	細砂多／良	
72 13号土坑 C－0区	底部		淡橙褐	並／良	
73 13号土坑 C－0区	底部		淡茶褐	並／良	
74 13号土坑 C－0区	堝	口径30.0	橙褐	並／良	
75 13号土坑 C－0区	堝	口径34.7	(外)淡灰褐(内)淡橙褐	並／良	
76 13号土坑 C－0区	堝	口径38.3	暗茶褐	並／良	

第19図

77 13号土坑 C－0区	堝	口径33.0	淡茶褐	並／良	
78 13号土坑 C－0区	堝	口径34.0	淡橙褐	並／良	
79 13号土坑 C－0区	甑	口径25.0	淡灰褐	並／良	
80 13号土坑 C－0区	甑		淡灰褐	並／良	
81 13号土坑 C－0区	甑		淡灰褐	並／良	
82 13号土坑 C－0区	甑 (把手)		茶褐	並／良	
83 13号土坑 C－0区	甑 (把手)		淡茶褐	粗砂多／良	
84 13号土坑 C－0区	甑 (把手)		淡灰褐	並／良	
85 13号土坑 C－0区	支脚 (石製)		淡黄褐	2次焼成	

第20図

86 14号土坑 C－0区	高杯 (杯部)	口径16.9	(外)淡橙褐(内)淡灰褐	細砂多／良	
87 14号土坑 C－0区	甕	口径19.9	淡橙褐	粗砂多／良	II類
88 14号土坑 C－0区	堝	口径 (33.0)	淡黄褐	細砂多／良	

第29図

89 1号溝 D－5区	杯	口径12.3 器高3.25	青灰	並／良	
90 1号溝 D－5区	杯	口径13.7 器高 2.7	淡灰	並／やや不良	ヘラ記号あり
91 1号溝 D－5区	杯	口径 (13.9) 器高 (3.7)	淡青灰	並／良	

番号 出土地点	器種	法量 (cm)	色調	胎土 焼成	備考
92 1号溝 D－3区 D－5区	杯	口径14.1 器高3.35	青灰	並／良	
93 1号溝 D－5区	杯	口径14.2 器高 4.4	(外)赤灰 (内)暗灰	並／良	
94 1号溝 D－5区	有台杯	口径14.8 器高 (4.1)	(外)暗灰 (内)淡青灰	並／良	
95 1号溝 D－3区	有台盤		淡青灰	並／良	
96 1号溝 D－3区	長頸瓶		灰	並／良	
97 1号溝 D－4区	杯	口径12.4 器高 (3.4)	青灰	並／良	
98 1号溝 D－3区	杯	口径12.7 器高 3.0	(外)青灰 (内)暗灰	粗砂多／良	他C1－包
99 1号溝 D－6区	杯	口径13.3 器高2.55	青灰	細砂多／良	
100 1号溝 D－6区	椀 (杯？)	口径13.0	青灰	並／良	
101 1号溝 D－6区	杯		淡灰	並／良	墨書
102 1号溝 A－3区	有台杯		淡灰	並／良	墨書
103 1号溝 D－3区	盤	口径15.9 器高 2.1	暗青灰	並／良	他D6－包 墨書「幸」
104 1号溝 D－6区	盤	口径15.7 器高 2.4	青灰	並／良	他D7－包 墨書「賀」

第30図

105 1号溝 A－3区	瓶		淡青灰	並／良	
106 1号溝 D－3区	双耳瓶 ？		淡灰	砂粒少／良	
107 1号溝 D－3区	双耳瓶		淡灰	細砂多／良	他B5・6、D5－包
108 1号溝 B－3区	甑 (把手)		淡橙褐	並／良	
109 1号溝 D－5区	甕	口径22.0	(外)茶褐 (内)淡茶褐	粗砂多／良	他D5－包

第24図

110 包含層 B－9区	蓋？	口径14.1 器高 (4.0)	淡灰	並／良	他A4、B4－包
111 包含層 C－2区 C－3区	蓋	口径14.1	淡灰	並／良	
112 包含層 C－0区	蓋	口径7.6	青灰	並／良	
113 包含層 C－0区	蓋		淡灰	並／良	
114 包含層 B－5区	蓋	口径12.4	青灰	並／良	
115 包含層 A－2区	蓋	口径 (10.7)	暗青灰	並／良	

番号 出土地点	器種	法量 (cm)	色調	胎土 焼成	備考
116 包含層 B－6区	蓋	口径13.2 器高 (3.6)	淡灰	並／良	
117 包含層 C－2・3区	蓋	口径 (13.7)	淡灰	並／良	
118 包含層 D－5区 D－6区	蓋	口径14.8	淡灰	並／良	
119 包含層 B－6区	蓋	口径15.1	淡灰	並／良	
120 表採	蓋	口径15.6	(外)淡青灰(内)淡黄褐	並／良	
121 包含層 D－7区	蓋	口径13.5	青灰	並／良	
122 包含層 D－6区	蓋	口径15.0	淡青灰	並／良	
123 包含層 D－7区	蓋	口径16.8	青灰	並／良	
124 包含層 C－6区	蓋	口径17.0	青灰	並／良	
125 包含層 C－8区	杯	口径12.0 器高 5.2	淡灰	並／良	
126 包含層 A－8区 B－8区 D－9区	杯	口径13.1 器高4.35	青灰	砂粒少／良	
127 包含層 B－8区	杯	口径 (14.4)	淡灰	並／良	
128 包含層 A－8区	杯	口径14.6 器高 (3.1)	茶灰	並／不良	
129 包含層 C－1区	杯	口径11.0	淡青灰	並／良	
130 包含層 D－1区	杯	口径10.8	淡青灰	並／良	
131 包含層 B－4区 B－5区	杯	口径11.4	淡青灰	並／良	
132 包含層 D－2区	杯	口径 (12.0)	淡青灰	砂粒少／良	
133 包含層 D－8区	杯	口径12.6	(外)暗灰 (内)淡灰	並／良	
134 包含層 B－8区 D－8区	杯	口径13.2	淡灰	並／やや不良	
135 包含層 D－7区	杯	口径11.5 器高 2.6	青灰	並／良	
136 包含層 D－3区	杯	口径10.9	青灰	並／良	

第25図

137 包含層 C－7区 D－7区	杯	口径 8.4 器高 3.7	青灰	並／良	
138 包含層 D－4区	杯	口径13.0 器高2.85	淡青灰	並／良	

番号 出土地点	器種	法量(cm)	色調	胎土 焼成	備考
139 包含層 B－3区	杯	口径12.8 器高 3.2	淡灰	並／良	
140 包含層 D－7区	杯	口径13.4 器高 3.4	青灰	並／良	
141 包含層 D－4区	杯	口径14.4 器高3.75	青灰	並／良	
142 包含層 D－7区	杯	口径 7.3 器高 3.2	淡青灰	並／良	
143 落ち込み D－8区	杯	口径15.4 器高3.45	淡青灰	細砂多／良	
144 包含層 D－7区	有台杯	口径11.6 器高 4.1	青灰	砂粒少／良	
145 包含層 D－8区	有台杯	口径14.6 器高3.95	淡灰	並／良	
146 包含層 D－9区	有台杯	口径17.2 器高 6.6	(外)暗灰 (内)淡灰	並／良	
147 包含層 C－8区		口径 9.4	青灰	砂粒少／良	
148 包含層 C－1区		口径12.6	淡黄灰	並／良	
149 包含層 D－3区		口径18.0	黒灰	粗砂多／良	
150 包含層 B－5区 B－6区	高杯		(外)暗灰 (内)淡灰	細砂多／良	他A－5包
151 包含層 A－4区 B－4区	甕	口径 (14.4)	淡橙褐	並／良	I_1類
152 包含層 A－5区	甕	口径22.0	淡黄褐	並／良	I_2類
153 包含層 B－2区 B－3区	甑 (把手)		淡黄褐	粗砂多／良	
154 包含層 B－2区	甑 (把手)		淡黄褐	並／良	
155 包含層 A～E －3区	甑 (把手)		淡黄褐	並／良	

第37図

156 6号土坑 B－5区	杯	口径12.6 器高 3.7	淡灰	細砂多／不良	墨書
157 6号土坑 B－5区	杯	口径12.2 器高 3.0	淡青灰	並／良	他A5－攪乱土
158 6号土坑 B－5区	杯	口径13.2 器高 2.8	青灰	並／良	
159 6号土坑 B－5区	盤	口径14.4 甑 2.2	青灰	並／良	他4号建物P21、墨書「払」、墨溜
160 6号土坑 B－5区	椀	口径13.8 器高 (3.2)	青灰	並／良	
161 6号土坑 B－5区	有台椀		淡茶褐	並／良	
162 6号土坑 B－5区	甕 (底部)		(外)暗褐 (内)茶褐	並／良	底外面回転糸切り痕

番号 出土地点	器種	法量(cm)	色調	胎土 焼成	備考
163 2号井戸 C－7区	蓋	口径 (13.9)	青灰	並／良	
164 2号井戸 C－7区	蓋	口径14.0 器高 1.5	青灰	並／良	
165 2号井戸 C－7区	杯		灰褐	並／良	
166 2号井戸 C－7区	杯	口径12.2 器高 3.2	青灰	並／良	
167 2号井戸 C－7区	杯	口径13.5 器高 2.8	青灰	並／良	タール状のもの付着、灯明によるものか
168 2号井戸 C－7区	有台杯	口径14.9 器高 5.9	淡青灰	細砂多／良	墨書、墨溜
169 2号井戸 C－7区	盤		淡青灰	並／良	墨書「[illegible]」
170 2号井戸 C－7区	盤	口径14.5 器高 2.2	淡灰	細砂多／良	
171 2号井戸 C－7区	盤	口径14.3 器高 2.3	淡青灰	並／良	墨書「払」

第38図

172 2号井戸 C－7区	有台皿	口径13.3 器高 2.9	暗灰	細砂多／良	墨書「払」
173 2号井戸 C－7区	椀	口径13.8 器高 4.4	(外)淡黄褐(内)黒	並／良	
174 2号井戸 C－7区	椀	口径15.5 器高 (5.1)	(外)茶褐 (内)黒	並／良	墨書「利」
175 2号井戸 C－7区	椀	口径14.0 器高 4.3	(外)淡黄褐(内)黒	並／良	
176 8号土坑 B－6区	蓋	口径13.8 器高 1.7	青灰	並／良	
177 8号土坑 B－6区	杯	口径12.9 器高 2.8	淡青灰	並／やや不良	墨書「払」
178 8号土坑 B－6区	有台杯	口径13.8 器高 5.4	青灰	細砂多／良	
179 8号土坑 B－6区	盤	口径14.1 器高 2.4	青灰	細砂多／良	
180 8号土坑 B－6区	盤	口径14.6 器高 1.9	淡青灰	並／良	
181 8号土坑 B－6区	盤	口径14.5 器高 1.9	淡青灰	並／良	墨書「払」
182 8号土坑 B－6区	有台皿	口径13.0 器高 3.3	暗青灰	細砂多／良	
183 8号土坑 B－6区	有台椀		淡橙褐	並／良	
184 8号土坑 B－6区	有台椀	口径13.5 器高 (5.0)	(外)淡黄褐(内)黒	並／良	
185 8号土坑 B－6区	有台椀	口径16.9 器高 (5.2)	(外)淡黄灰(内)黒	並／良	

第39図

186 8号土坑 B－6区	甕	口径11.9	茶褐	細砂多／良	

番号 出土地点	器種	法量(cm)	色調	胎土 焼成	備考
187 8号土坑 B－6区	甕	口径25.0	淡橙褐	並／良	
188 4号建物 P －189 B－5区	蓋	口径12.3 器高1.75	青灰	細砂多／良	墨書「㐅」、墨溜、内面にも文字有り（習書）、埋納
189 4号建物 P －23 B－4区	杯	口径13.0 器高 (3.0)	淡灰褐	並／良	
190 4号建物 P －17 B－5区	杯	口径 (13.0) 器高 (3.2)	青灰	細砂多／良	
191 4号建物 P －189 B－5区	杯	口径12.8 器高 (3.0)	淡青灰	並／良	
192 4号建物 P －189 B－5区	有台皿		暗青灰	細砂多／良	
193 4号建物 P －21 B－5区	有台皿	口径14.8 器高 4.2	青灰	並／良	タール状のもの付着、埋納
194 4号建物 P －194 B－5区	有台皿		暗青灰	並／良	墨書「㐅」、埋納
195 4号建物 P －189 B－5区	有台椀		(外)淡黄褐(内)黒	並／良	外面赤彩か、埋納？
196 4号建物 P －205 B－5区	甕	口径 (19.2)	橙褐	並／良	
197 5号建物 P －13 B－5区	杯	口径12.9 器高 3.0	暗青灰	細砂多／良	墨書「㐅」、埋納？
198 5号建物 P －10 B－6区	堝	口径 (44.0)	淡黄褐	細砂多／良	
199 4号柱列 P －25 B－4区	盤	口径14.6 器高 1.9	暗青灰	並／良	墨溜、埋納
200 5号柱列 P －599 B－6区	有台椀	口径16.4 器高 (5.3)	(外)淡茶褐(内)黒	砂粒少／良	埋納

第40図

201 包含層 B－6区	蓋	口径12.5 器高 1.9	青灰	細砂多／良	
202 包含層 B－6区	蓋	口径 (15.0)	青灰	細砂多／良	
203 包含層 B－5 6区	蓋	口径14.8 器高 (2.5)	青灰	細砂多／良	
204 包含層 B－5区 C－5区 D－5区	蓋	口径15.3 器高 1.9	(外)青灰 (内)暗青灰	細砂多／良	内面に墨痕あり
205 包含層 B－6区	蓋		暗青灰	並／良	墨書「幸」
206 包含層 B－5区	蓋	口径 (14.4) 器高 (1.8)	暗青灰	並／良	墨書「㐅」

番号 出土地点	器種	法量(cm)	色調	胎土 焼成	備考
207 包含層 D－3区	蓋	口径 (15.1) 器高 (1.8)	暗青灰	細砂多／良	墨書「㐅」
208 包含層 B－6区	蓋		青灰	並／良	墨書「㐅」
209 包含層 A－2区	蓋		青灰	並／良	墨書「㐅」
210 包含層 B－6区	蓋	口径12.4 器高 1.2	淡青灰	並／良	墨書「㐅」
211 包含層 D－5区	杯	口径13.5 器高 4.0	(外)青灰 (内)淡茶灰	並／良	
212 包含層 B－5区	杯	口径12.3 器高 3.1	青灰	並／良	
213 包含層 B－6区	杯	口径13.2 器高 3.1	青灰	並／良	
214 包含層 C－1区	杯	口径13.1 器高 2.5	灰白	並／良	
215 包含層 B－5 6区	杯	口径13.7	青灰	並／良	

第41図

216 包含層 D－4区	杯		淡灰	並／良	墨書
217 包含層 D－7区	杯		淡青灰	並／良	墨書「吉□」
218 包含層 B－5区 D－5区	杯		青灰	並／良	墨書
219 包含層 B－6区	杯		青灰	並／良	墨書
220 包含層 D－6区	杯		淡灰褐	並／やや不良	墨書「㐅」
221 包含層 B－6区	杯		青灰	細砂多／良	墨書「㐅」
222 包含層 D－6区	杯		淡青灰	並／良	墨書「㐅」
223 包含層 B－5区 B－6区	有台杯	口径14.6 器高 6.2	青灰	細砂多／並	
224 包含層 D－3区	有台杯		青灰	細砂多／良	
225 包含層 B－5区	有台杯	口径14.9 器高 5.4	暗青灰	並／良	墨書「㐅」
226 包含層 B－5区	有台杯		青灰	並／良	墨書「㐅」
227 包含層 B－5区	有台杯		青灰	並／良	墨書「㐅」
228 包含層 B－6区 B－7区	盤	口径14.6 器高 2.2	青灰	並／良	
229 包含層 D－9区	盤	口径14.8 器高 2.2	青灰	並／良	

番号 出土地点	器種	法量(cm)	色調	胎土 焼成	備考
第42図					
230 包含層 B－6区	椀	口径(13.3) 器高(3.9)	淡灰	並／良	
231 包含層 B－5区	椀	口径(12.6) 器高(3.4)	青灰	並／良	
232 包含層 D－6区	椀		淡青灰	並／良	
233 包含層 B－6区	有台椀	口径(12.8) 器高(5.0)	淡灰	細砂多／良	
234 包含層 B－4区	有台椀		(外)青灰 (内)暗青灰	並／良	
235 包含層 A－1区	有台椀		青灰	並／良	
236 包含層 B－5区 C－5区 D－6区	有台皿	口径 7.7 器高 3.4	暗青灰	細砂多／良	
237 包含層 D－6区	有台皿		青灰	並／良	墨書「吉来」
238 包含層 D－9区	壺	口径14.0	青灰	並／良	他B5・6・9、C7・8、D7・8・9一包、2井戸
239 包含層 C－6区 D－6区	壺	口径15.8	淡灰	細砂多／良	他B6一包
240 包含層 D－6区	瓶	口径 9.6	(外)暗灰 (内)淡灰	並／良	
241 包含層 2区	壺	口径10.4	青灰	並／良	
242 包含層 C－6区			(外)青灰 (内)淡灰	並／良	
243 包含層 D－7区	鉢	口径20.4	青灰	細砂多／良	他B6、C6、D6一包
244 包含層 D－7区	鉢	口径13.4 器高10.4	(外)青灰 (内)淡青灰	細砂多／良	
245 包含層 A～E －3区	硯？		青灰	並／良	
第43図					
246 包含層	甕	口径37.0 器高50.0	淡灰	細砂多／良	出土地点は第55図参照
247 包含層 B－5区 C－5区	椀	口径14.0	(外)淡灰褐 (内)黒	並／良	
248 包含層 B－6区	有台椀		(外)淡黄褐 (内)黒	並／良	
249 包含層 C－1区	有台椀 (皿？)		淡黄褐	並／良	
250 包含層 B－6区	有台皿		(外)橙褐 (内)暗褐	並／良	
251 包含層 C－1区	有台椀 (皿？)		(外)淡茶褐 (内)淡橙褐	並／良	
252 包含層 B－6区	甕	口径23.2	橙褐	砂粒少／良	

番号 出土地点	器種	法量(cm)	色調	胎土 焼成	備考
253 包含層 C－6区	堝		茶褐	並／良	
254 包含層 B－6区	堝		黄褐	並／良	
255 包含層 B－6区	堝		橙褐	並／良	
256 包含層 B－2区	椀 (灰釉)		(素地) 明灰	密／良	内面の釉が剥がれている
第48図					
257 2号建物 P－509 C－1区	椀	口径14.9 器高 3.6	橙灰	並／良	埋納
258 2号建物 P－507 C－5区	皿	口径 7.0 器高 2.2	淡橙灰	砂粒少／良	埋納
259 3号建物 P－595 A－1区	椀	口径13.7 器高 4.2	淡橙灰	砂粒少／良	埋納
260 3号建物 P－595 A－1区	皿	口径 6.9 器高 2.0	淡橙灰	砂粒少／良	埋納
261 3号建物 P－596 A－1区	皿	口径 9.6 器高(2.2)	灰褐	並／良	
262 3号建物 P－595 A－1区	椀	口径14.8 器高(4.3)	暗灰褐	砂粒少／良	
263 3号建物 P－595 A－1区	椀	口径12.8 器高 3.6	淡橙灰	砂粒少／良	
264 1号井戸 B－2区	椀		淡灰褐	砂粒少／良	内外面スス付着
265 1号井戸 B－2区	皿	口径 7.9 器高 2.1	淡茶灰	並／良	
266 2号溝 C－1区	皿	口径10.0 器高1.95	淡黄褐	粗砂多／良	
267 3号溝 B－1区			橙灰	細砂多／良	
268 3号溝 B－1区	皿	口径 7.6 器高1.55	淡灰褐	並／良	
269 24号溝 B－1区	皿	口径 9.0 器高1.85	淡黄褐	砂粒少／良	
270 包含層 B－2・3区	椀		橙褐	並／良	
271 包含層 D－2区	椀		橙褐	並／良	
272 包含層 B－2・3区	椀		橙褐	砂粒少／良	
273 包含層 C－2区	椀		暗灰褐	並／良	
274 包含層 D－2区			淡灰褐	砂粒少／良	
275 包含層 D－2区			淡橙褐	細砂多／良	

番号 出土地点	器種	法量(cm)	色調	胎土 焼成	備考
276 包含層 A－2区	椀		淡黄褐	並／良	
277 包含層 A～E －3区	皿		淡茶褐	砂粒少／良	
278 包含層 D－2区	甕		淡青灰	並／良	須恵器系陶器、内面剥離
279 包含層 C－1区	鉢	口径26.7	暗灰	並／良	珠洲陶器
280 包含層 C－1区 D－3区 B－5区	甕		暗灰	並／良	〃
281 包含層 D－2区	鉢 (片口)	口径34.6	暗青灰	並／良	〃

第49図

			釉調 素地		
282 包含層 B－4区	碗		黄灰白 明灰白	並／並	
283 包含層	碗		灰白 灰白	密／並	
284 包含層	碗		黄灰白 明灰白	並／並	高台畳付けの釉を削り取っている
285 包含層 C－1区	碗		灰白 灰白	密／良	
286 包含層 B－1区	碗		黄灰白 明灰白	密／並	釉にむら有
287 包含層	碗	口径13.3	明灰白 明灰白	並／並	
288 包含層 B－4区	碗		黄灰白 明灰白	並／並	釉に透明感有
289 西側排土中	碗		明灰白 明灰白	密／並	
290 包含層 D－2区	碗		明灰白 明灰白	密／並	釉が沸いている
291 包含層 B－6区	碗		明灰白 明灰白	密／並	
292 包含層 B－2区	碗		明灰白 明灰白	並／並	
293 包含層	碗		灰白 明灰白	並／並	釉に透明感有
294 範囲確認 試掘坑 No.5	碗		明灰白 明灰白	並／並	
295 範囲確認 試掘坑 No.5	碗		明白 明灰白	粗／並	釉に貫入有
296 包含層 A－5区	碗		灰白 灰白	並／並	釉に透明感有 高台畳付け付近の釉を削り取っている
297 包含層 A－2区	碗	口径15.3	灰白 明灰白	密／良	釉に透明感有
298 包含層 D－5区	碗 ?		灰白 明灰白	並／並	釉に透明感有
299 包含層 D－4区	碗		灰白 明灰白	並／並	釉に透明感有 内外面にやや粗い貫入有

番号 出土地点	器種	法量(cm)	色調	胎土 焼成	備考
300 包含層 D－2区	碗		灰白 明灰白	並／並	外釉部の削りが粗く、器面に凹凸感有
301 包含層 C－0区	皿		灰白 明灰白	並／並	釉に透明感有 粗い貫入有
302 包含層 B－9区	皿 ?		明灰白 明灰白	並／並	2次加熱により釉・素地共に軟質化
303 包含層 D－6区	皿 ?		明灰白 明灰白	やや粗／並	釉の内外面に細かい貫入有
304 包含層 D－1区	皿	口径 (10.7) 器高 (2.1)	灰白 灰白	密／並	
305 包含層 B－2区	皿		灰白 明灰白	密／並	2次加熱により釉が変色し、一部剥離している
306 包含層 C－1区	皿		オリーブ灰 灰白	密／並	釉に透明感有
307 包含層 C－6区	皿 (青磁)		オリーブ灰 灰白	緻密／並	釉に透明感有
308 包含層 B－8区	水注 (灰釉)		オリーブ灰? 灰白	密／良	2次加熱により外面の釉が沸いている
309 包含層 B－2区	入子? (灰釉)	口径 3.2 器高 1.5	灰白 灰白	緻密／良	2次加熱により釉が沸いている

第50図

310 3号溝 B－1区	土錘	長 3.3 幅 2.3 重 14.8g	黒灰色	並／良	
311 包含層 B・E －1区	土錘	長 3.3 幅 2.5 重 18.8g	淡黄灰	並／良	
312 包含層 A～E －3区	土錘	幅 2.0 重 (5.2)g	淡黄灰	粗砂多／良	
313 包含層 D－6区	土錘	幅 2.4 重 (14.6)g	淡黄灰	並／良	
314 包含層 D－6区	土錘	幅 2.1 重 (14.5)g	淡灰褐	粗砂多／良	
315 6号溝 A－1区	土錘	幅 2.4 重 (31.0)g	淡茶褐	粗砂多／良	
316 包含層 D－7区	土錘	長 6.3 幅 2.2 重 28.5g	淡灰褐	粗砂多／良	
317 包含層 D－7区	土錘	長 9.8 幅 4.35 重 167.3g	淡橙灰	粗砂多／良	
318 包含層 C－2区	玉	幅 0.95 重 0.5g	明青灰		石質－長石
319 包含層 C－3区	石製品	幅 4.2 重 53.5g	淡緑灰		
320 包含層 C－2区	砥石		暗青灰		
321 範囲確認 No. 1	瓦 (丸)		淡青灰	細砂多／良	
322 包含層 C－10区	瓦 (丸)		淡黄灰	並／良	
323 表採	瓦		淡赤褐	並／良	凸面剥離

番号 出土地点	器種	法量 (cm)	色調	胎土 焼成	備考
324 包含層 A－5区	鉄鍋				
325 包含層 A－5区	鉄鍋				

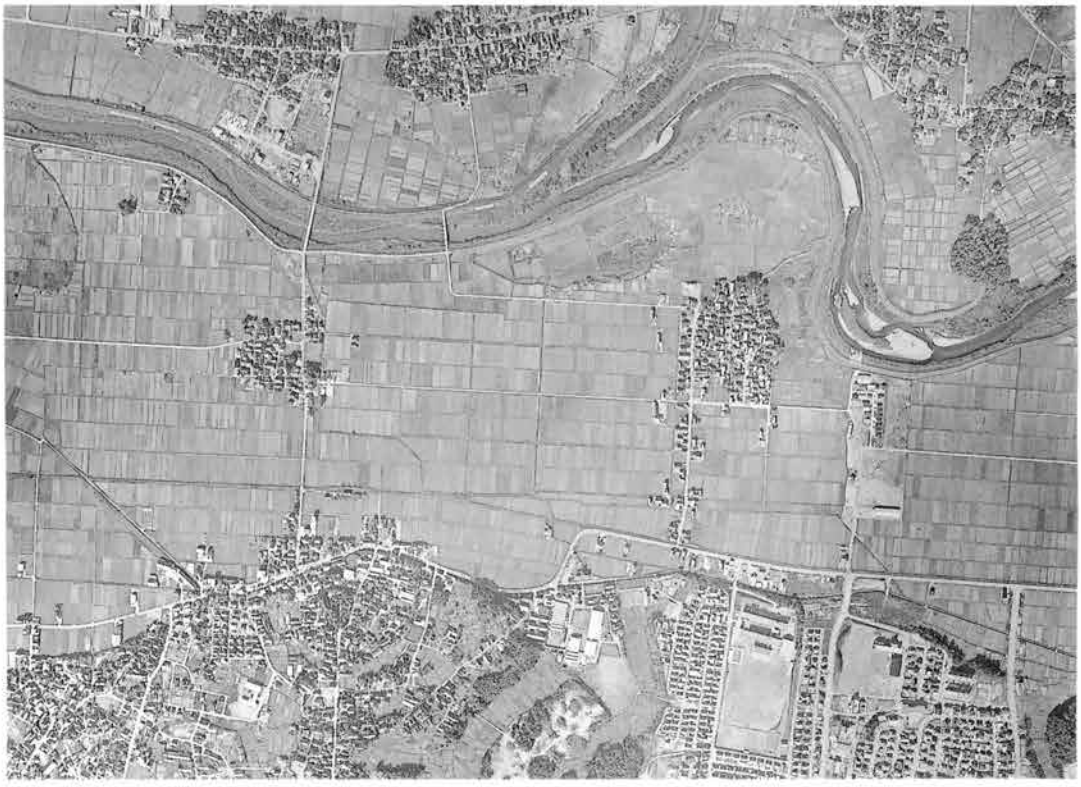
第51図

326 P －62 B－8区	柱	現存長 44.2 幅 17.5 厚 5.7			
327 6号溝 D・E －8区	杭	現存長 111.4 幅 9.5 厚 6.0			
328 2号井戸 C－7区	曲物底板	径 18.4 厚 1.1			目釘穴2ヶ所
329 2号井戸 C－7区	曲物底板	径 25.9 厚 1.1			

図版 1

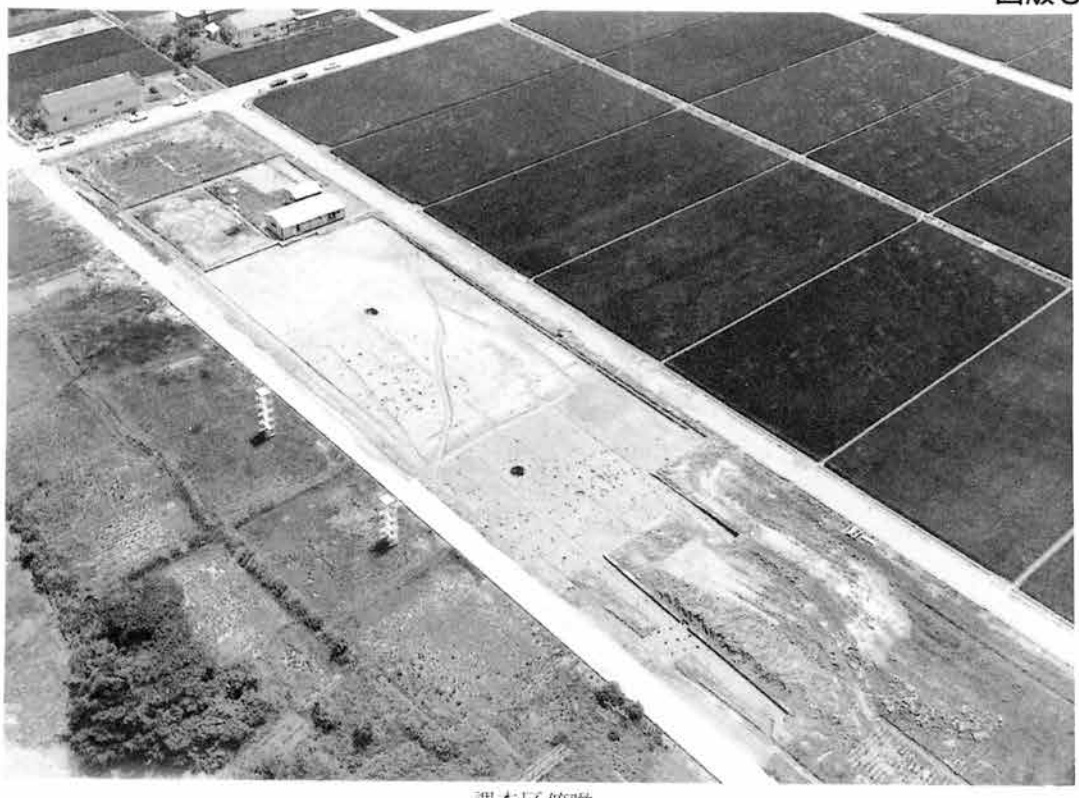
遺跡周辺の航空写真(撮影　1947年 8 月13日)

図版２



遺跡周辺の航空写真（撮影 1975年）

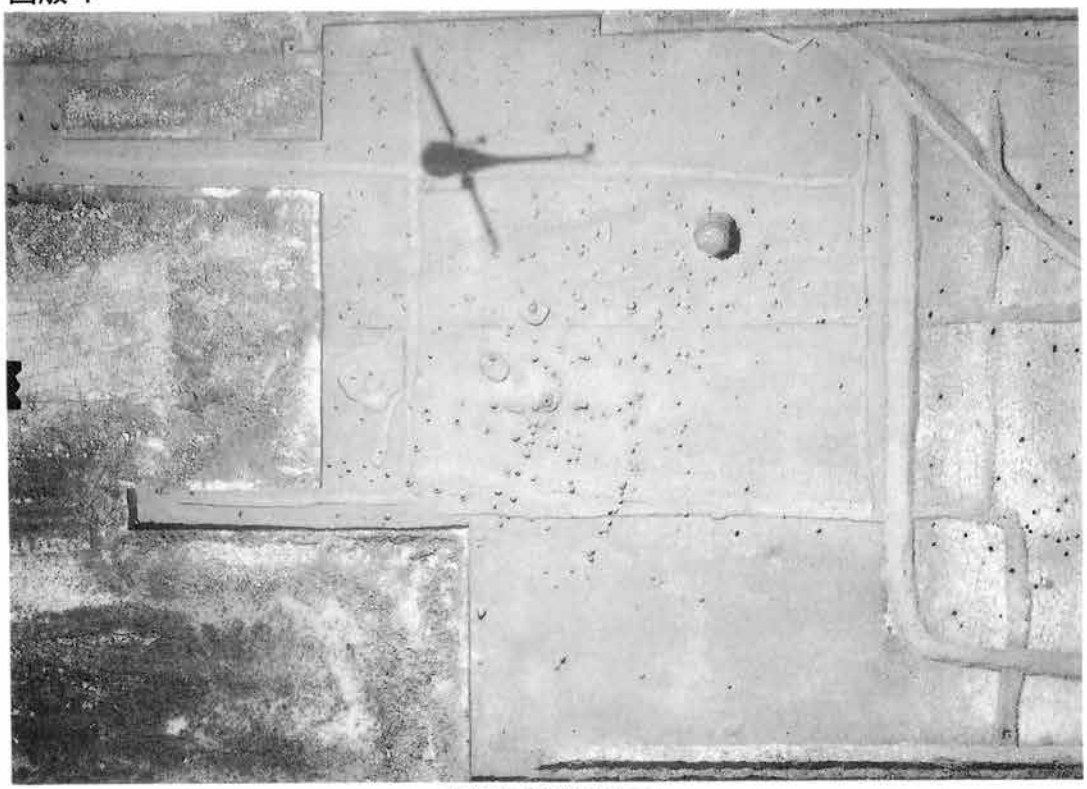
梯川流域遺跡群俯瞰（西から）



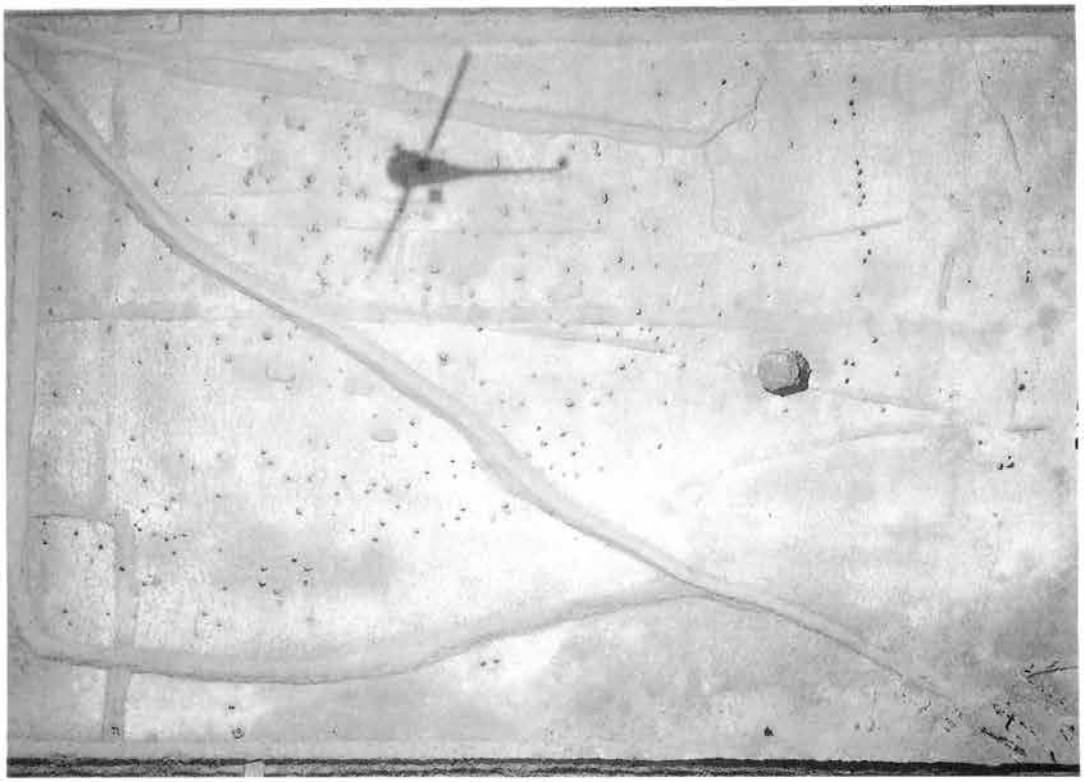
調査区俯瞰

工事実施後の遺跡の状況(東から)

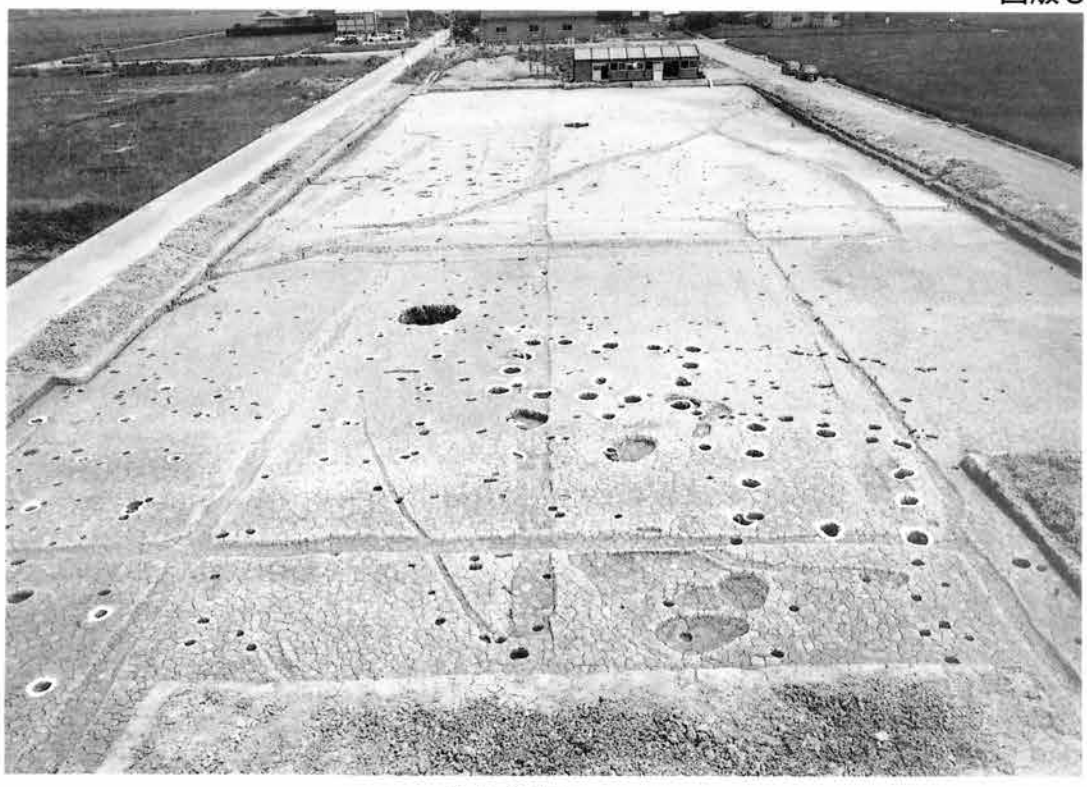
図版４



調査区垂直写真（１）



調査区垂直写真（２）



調査区近景(西から)

調査区近景(西から)

図版6

6・7号溝全景

6号溝

橋状遺構杭列(北から)

6号溝東南部

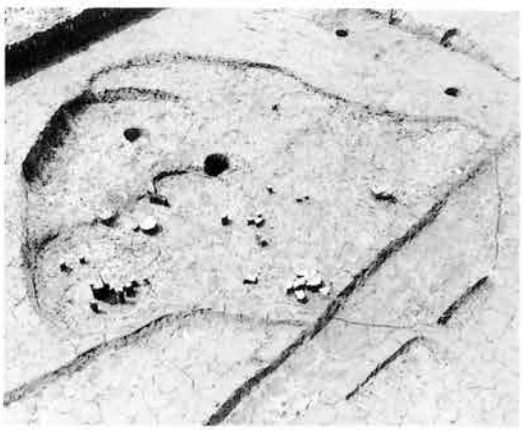
同上(南から)

7号溝(西から)

7号溝東端部

11号土坑

同上遺物出土状況

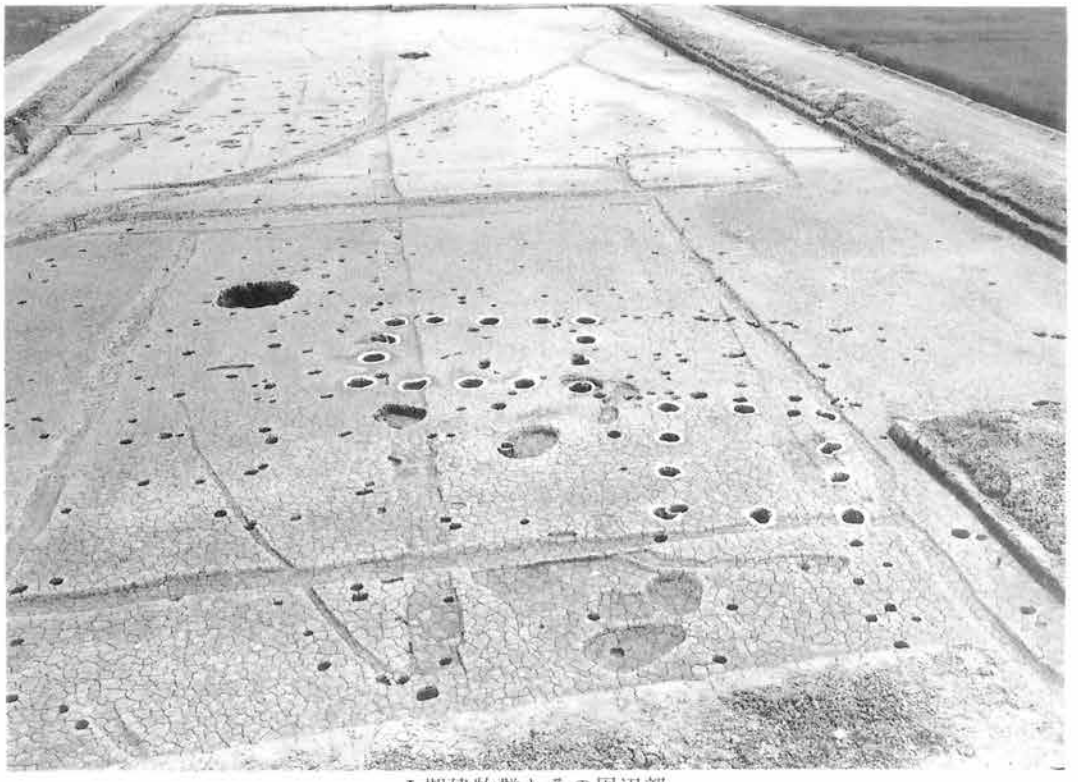


15号土坑

13号土坑

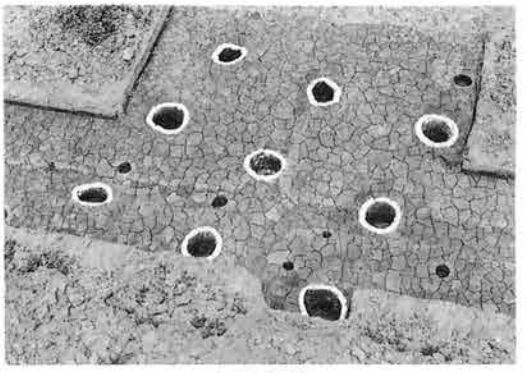
同上遺物出土状況

図版８

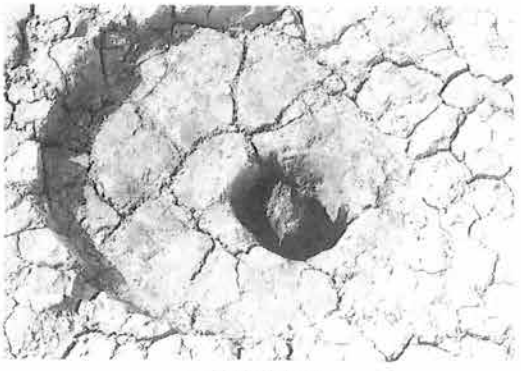


Ⅰ期建物群とその周辺部

１・６号建物



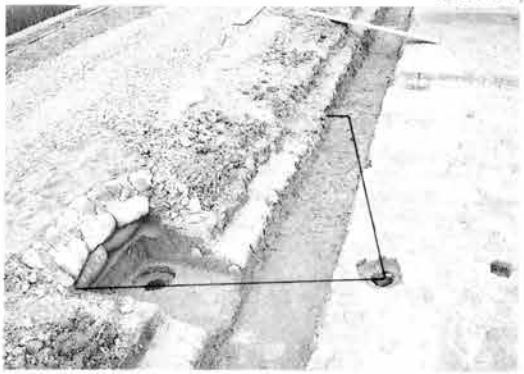
９号建物



１号建物柱穴

６号建物柱穴

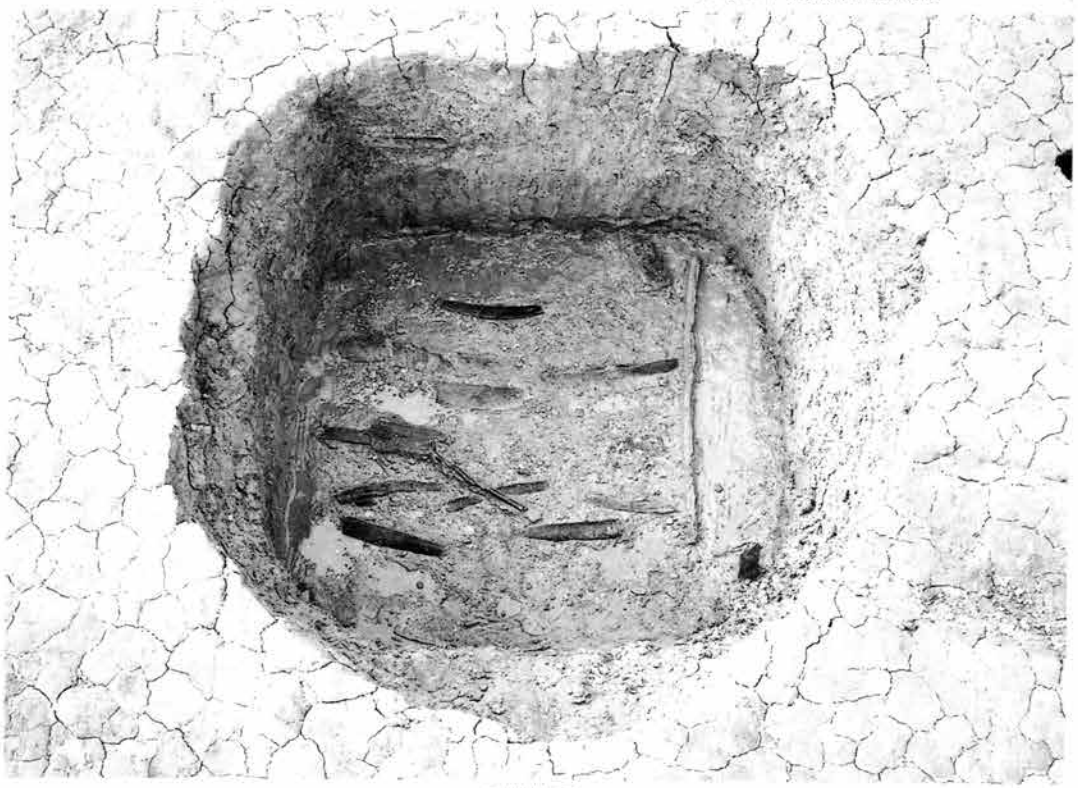
1号溝(北から)



8号建物

2号井戸調査状況

2号井戸遺物出土状況

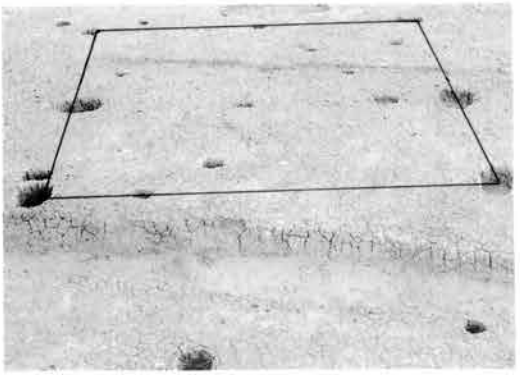


2号井戸

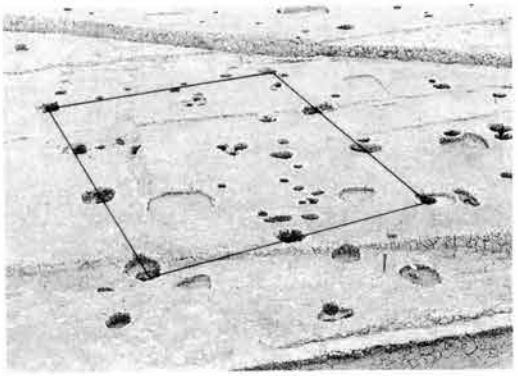
図版10

8号土坑

4・5号建物

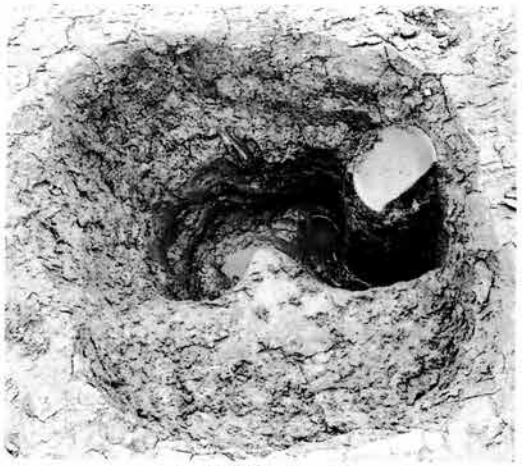


5号建物



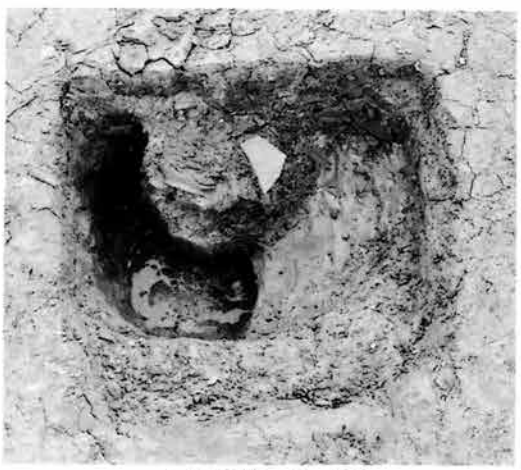
4号建物

III期建物群屋敷地



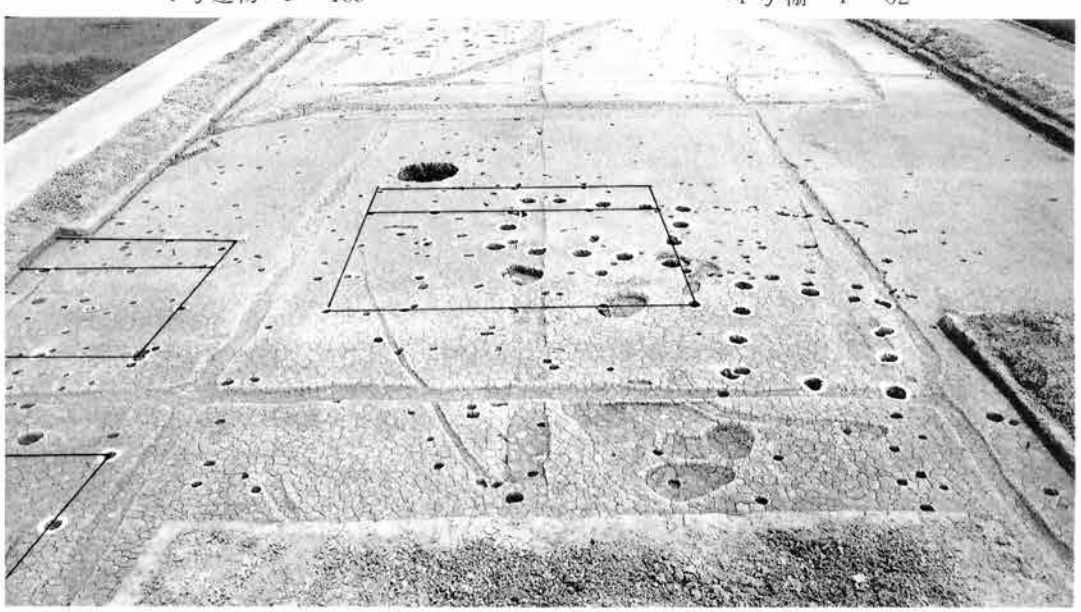
4 号建物　P－21

5 号柱列　P－599



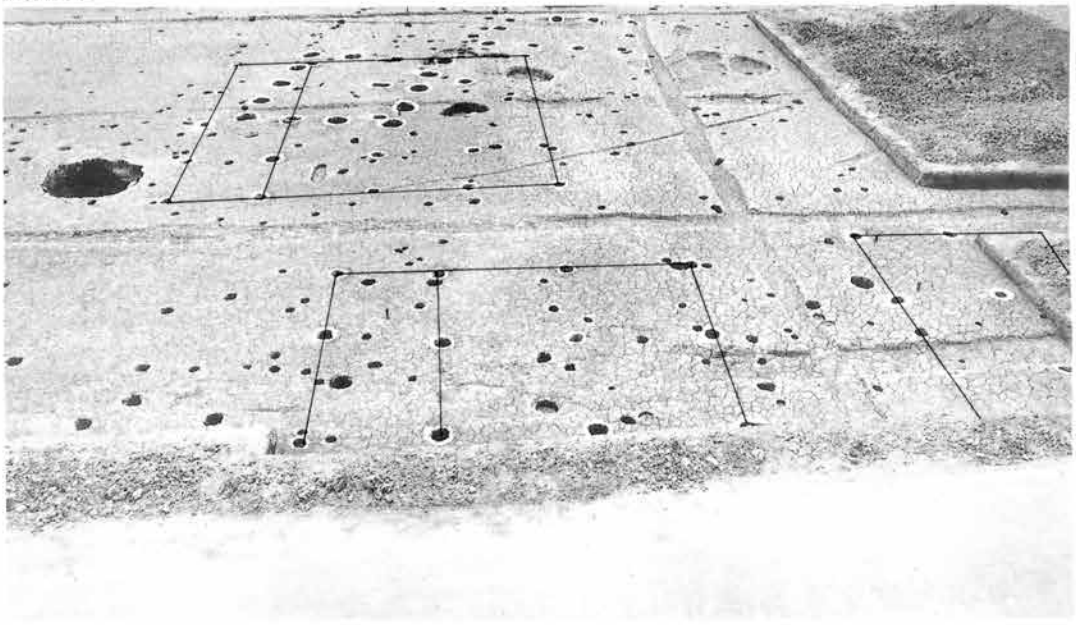
4 号建物　P－189

4 号柵　P－62



Ⅳ期建物群と区画溝(西から)

図版12

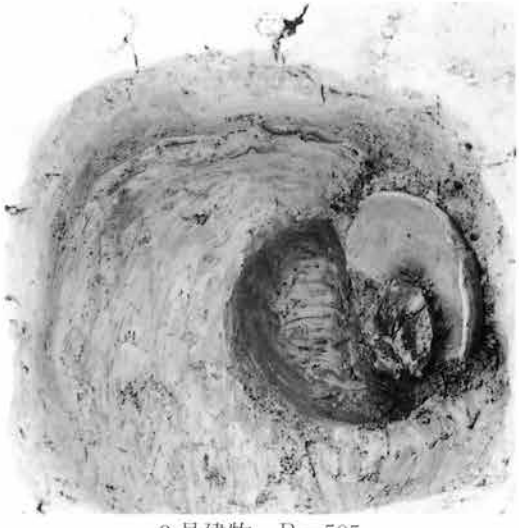


2・3・7号建物(北から)

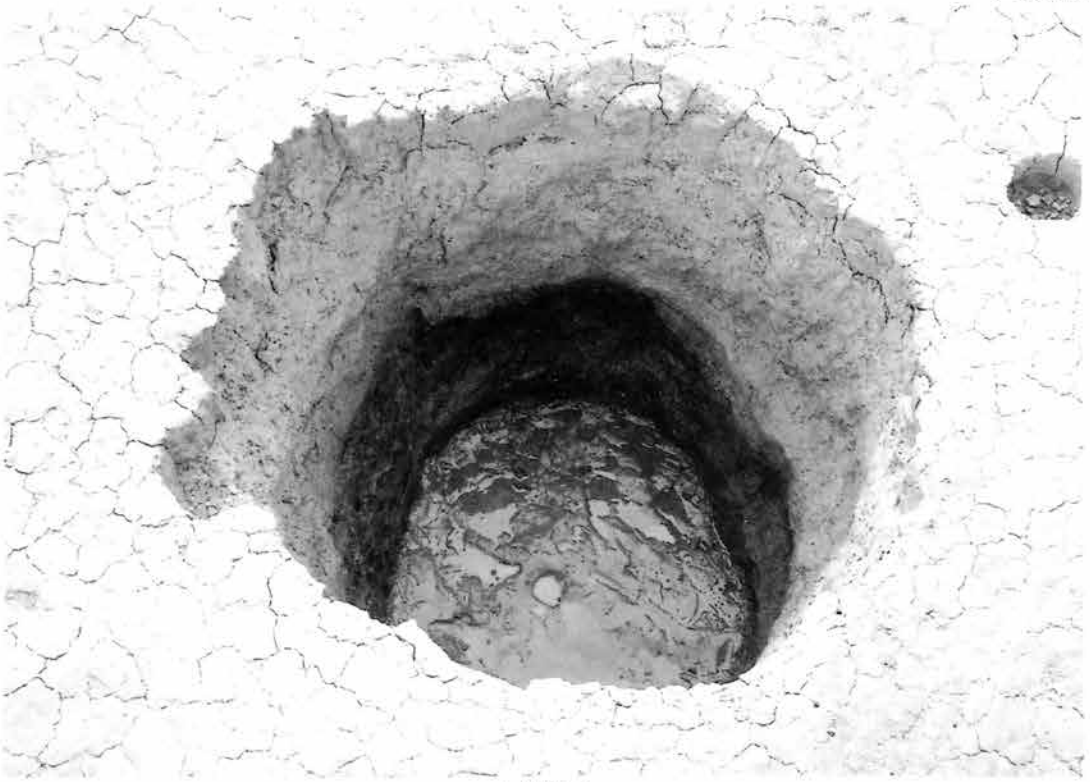
3・7号建物(南西から)

3号建物　P－583

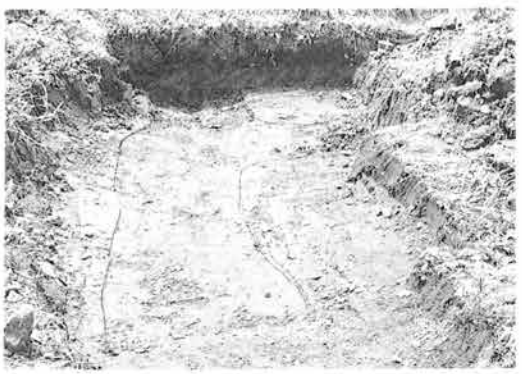
2号建物　P－509



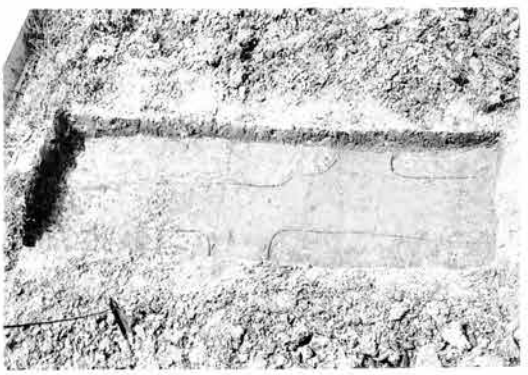
3号建物　P－595



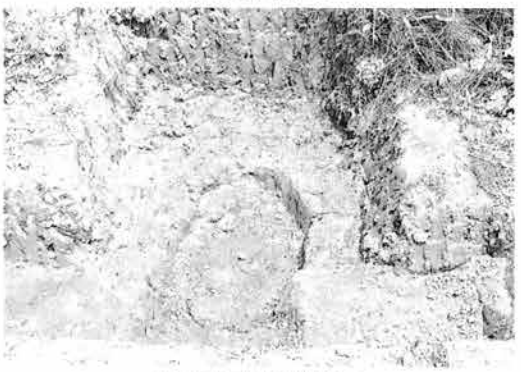
1号井戸



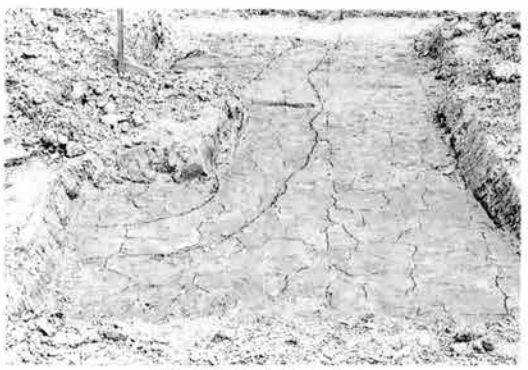
範囲確認試掘坑No. 1



範囲確認試掘坑No. 3



範囲確認試掘坑No. 4



範囲確認試掘坑No. 7

図版14

第6図　1

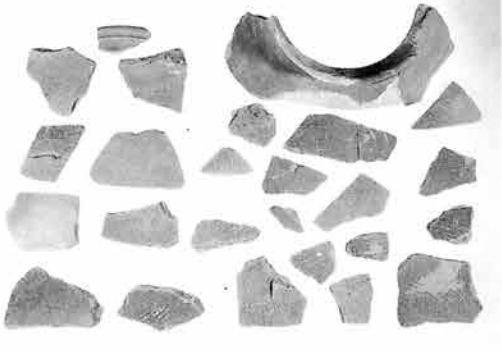
第6図　2～5他

第9図　8

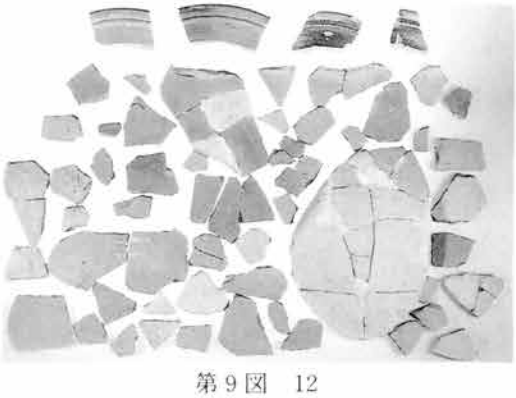
第9図　7・10

第9図　9

第9図　11



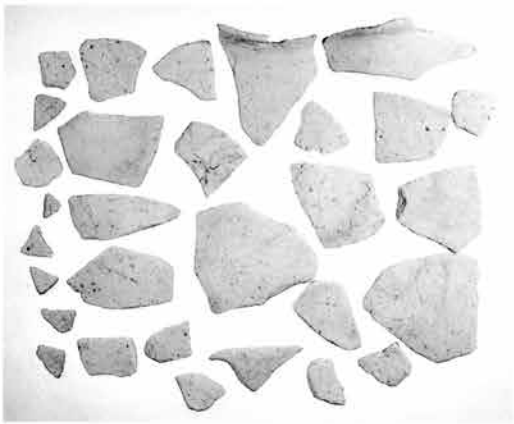
同上体部片



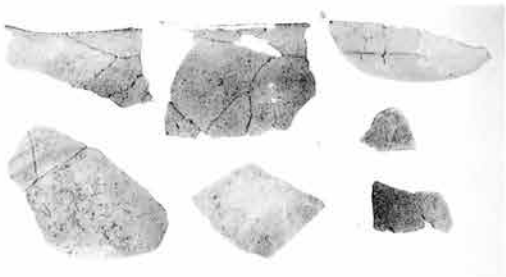
第9図　12

第12図　18

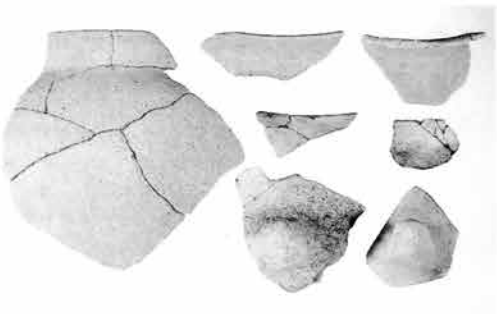
第12図　16



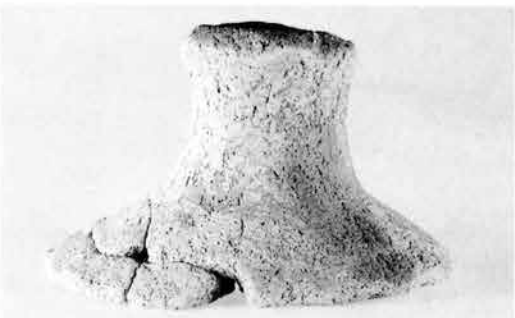
第12図　19



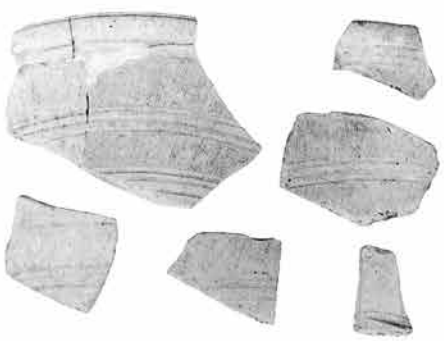
第15図　28～30



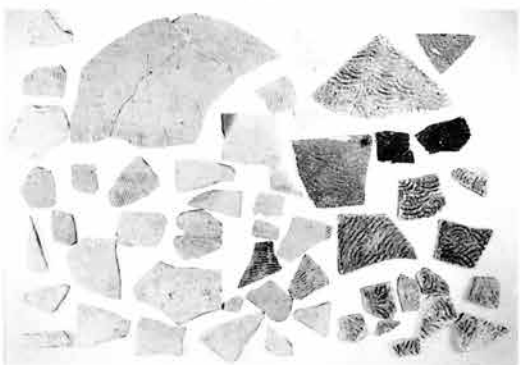
第12図　20・21・25他



第15図　29



第15図　36

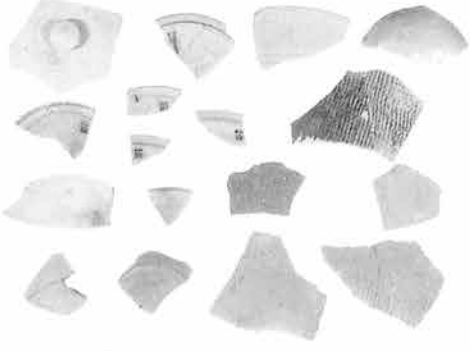


第15図　37(36体部片)

図版16

第15図　31～35

第15図　32



第17図　13号土坑出土須恵器

第17図　42

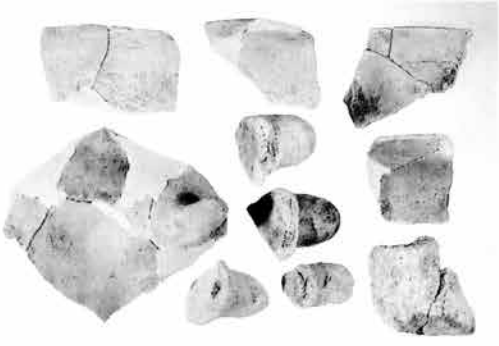
第17図　47

第17図　48

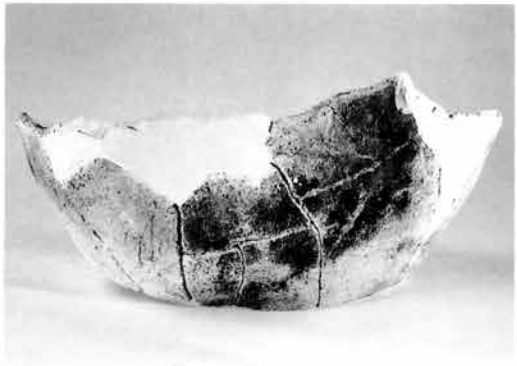
第17図　50～54　第20図　86

第17～18図　13号土坑土師器甕Ⅰ類

第18・20図　68～70・87
13号土坑土師器甕Ⅱ・Ⅲ類



第18～19図　13号土坑土師器堝、甑、支脚



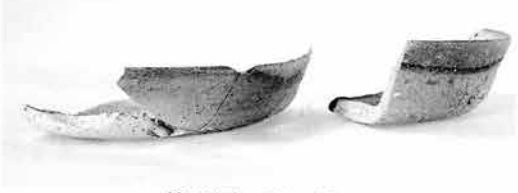
第19図　81

Ⅰ期包含層出土遺物杯・蓋類

第25図　150

第29図　92

第29図　93



第29図　89・90

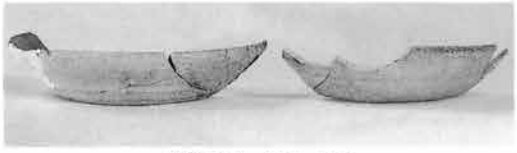
第29図　104

第29図　96

第30図　105

図版18

第37図　156



第37図　157・158

第37図　159

第37図　163～166 他

第37図　167

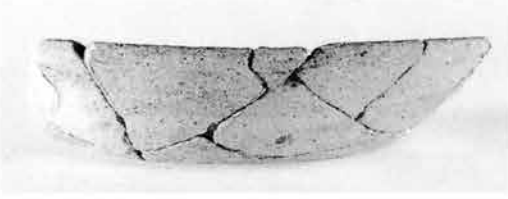
第37図　168

第37図　170

第37図　171

第38図　172

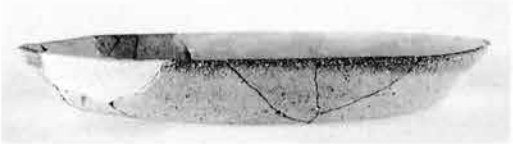
第38図　173



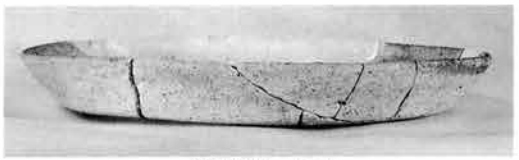
第38図　177

第38図　178

第38図　179

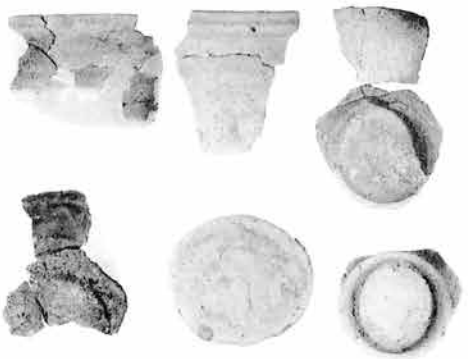


第38図　180



第38図　181

第38図　182



第37図　161・162 第38・39図　183・184・186・187

第39図　188

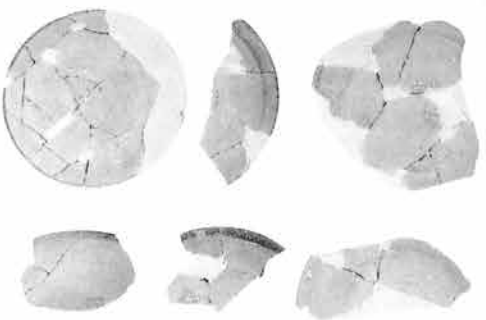
第39図　193

第39図　194

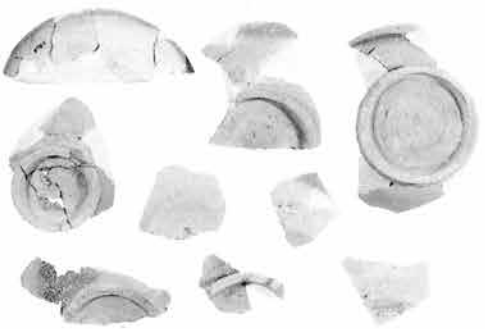
第39図　195

第39図　197

第39図　200

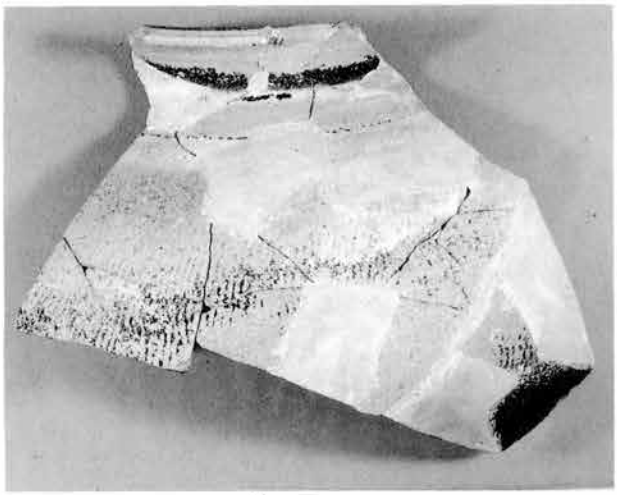


第40図　201・203・204・211～213

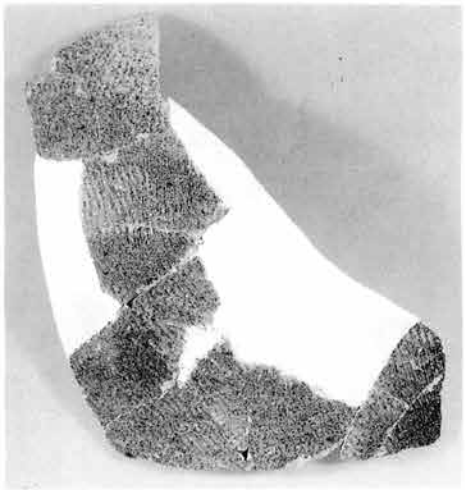


第41・42図　223・225・228・230～233・236

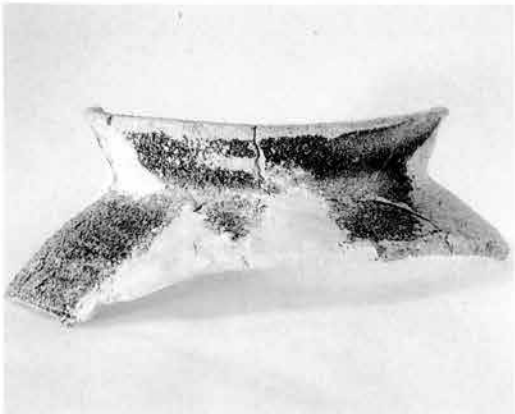
図版20



第43図　246

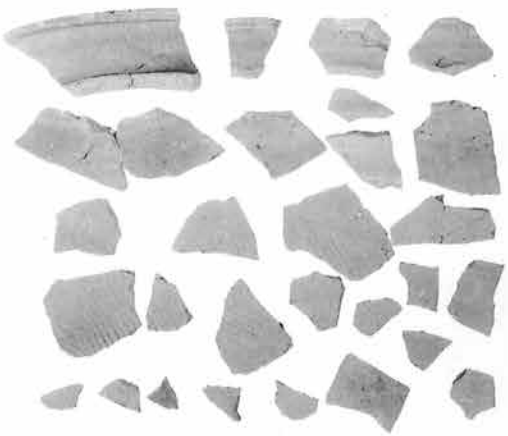


同左　体部片

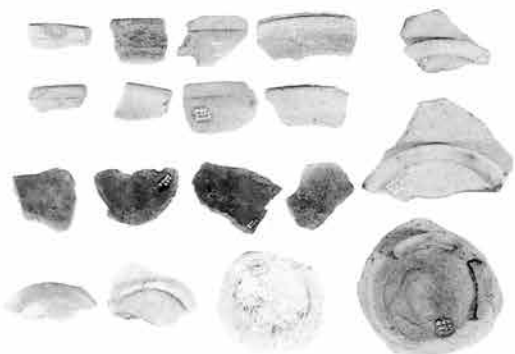


第42図　239

第42　244



第42図　238

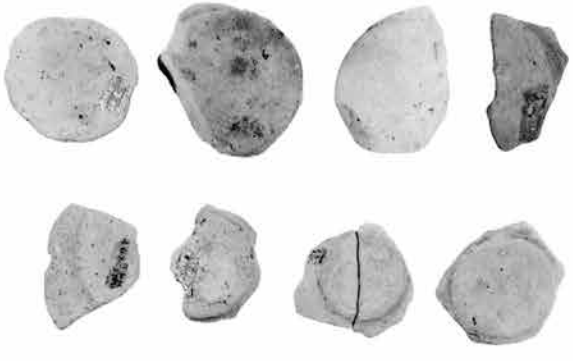


第43図　247～255

第48図　257・258

第48図　259・260・263

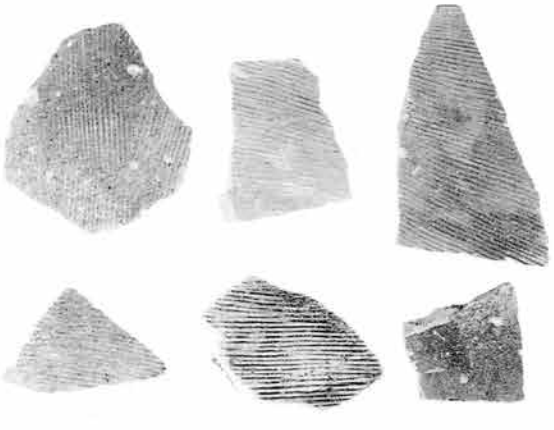
第48図　266～269



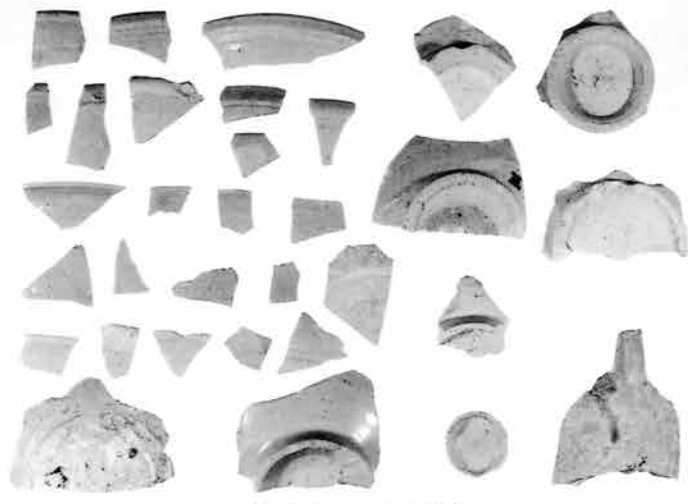
第48図　270～277

第48図　265

第48図　264



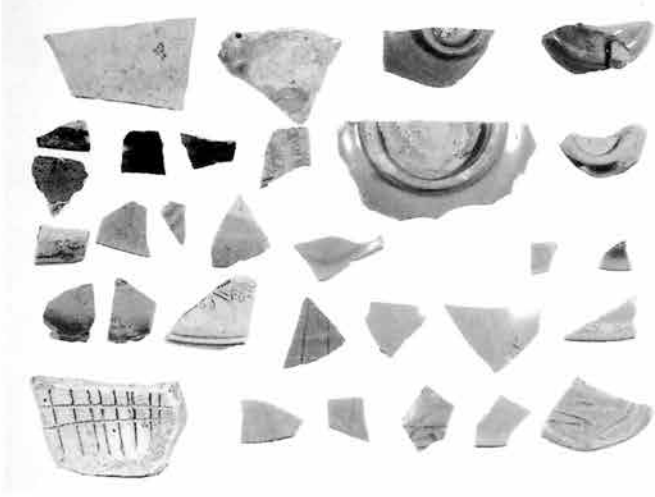
第48図　278・280他



第49図　白磁・瀬戸

第50図　318

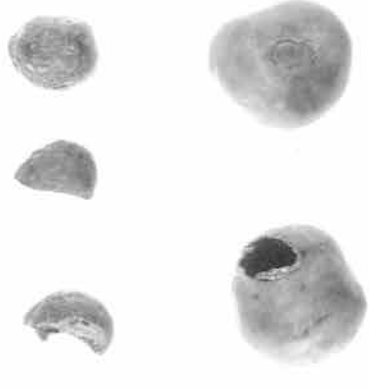
第50図　324



IV 期以降の遺物　青磁・瀬戸

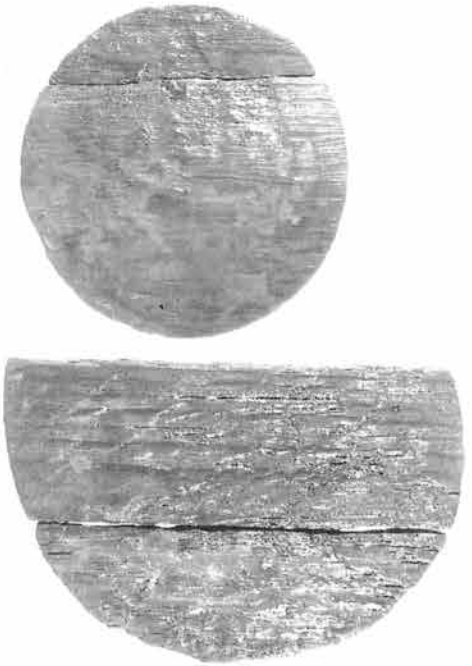
第50図　325

第50図　土製品・石製品・瓦



自然遺物　クルミ・トチの実

第51図　326

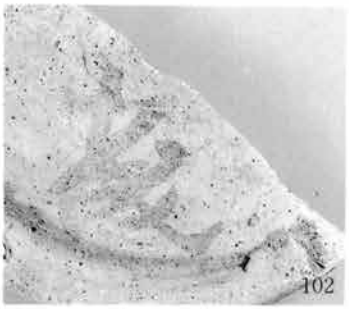


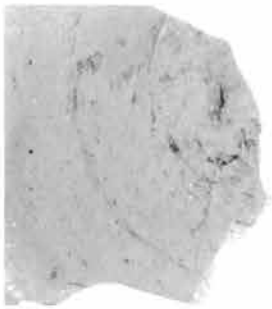
第51図　328・329

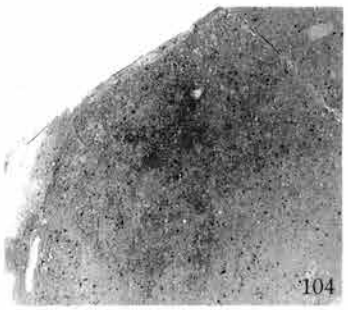
2号井戸底礫中木材

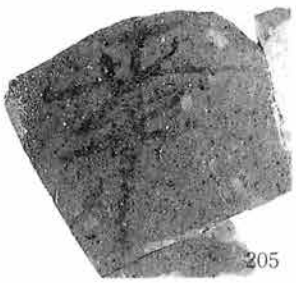
6号溝東南部杭

図版24


102


103


104

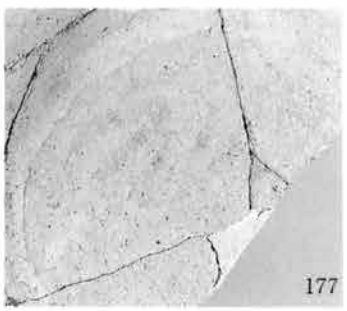

205

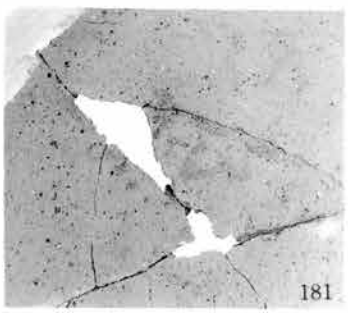
217

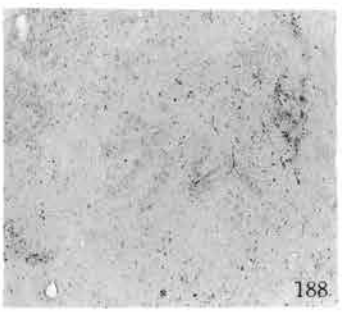
237

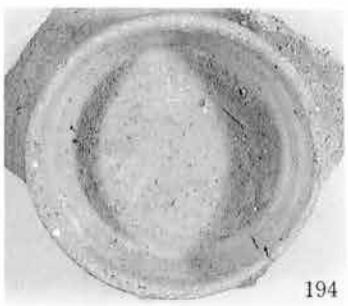
171

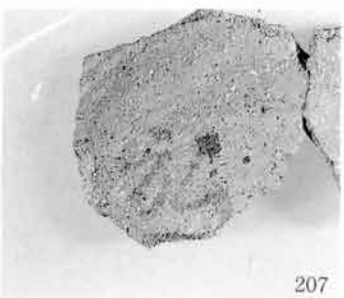
172


177


181


188


194


207

225

174

参考資料（第５章第３節）　金沢平野北西部の律令期主要遺跡（撮影　1947年11月６日）

佐々木ノテウラ遺跡

県営公害防除特別土地改良事業
に係る埋蔵文化財調査報告書

発行日　昭和61年3月31日

編集者
発行者　石川県立埋蔵文化財センター

〒921　金沢市米泉町4－133

印刷者　㈱　橋　本　確　文　堂

〒920 金沢市大手町2－35